日本国はじまりの地から未来へ

～多様性を認め合う社会の実現を～

日本女性会議 2025 橿原

大会報告書

2025年10月3日(金) ▶ 5日(日)

主催：日本女性会議2025橿原実行委員会・橿原市

目　次

大会テーマ ―― 2
大会宣言 ―― 3
大会写真 ―― 4
あいさつ ―― 8
大会日程 ―― 10

分 科 会

分科会１［健康・医療］ ―― 11
分科会２［歴史・文学］ ―― 17
分科会３［生き方×働き方「なりたい自分」］ ―― 23
分科会４［家族］ ―― 30
分科会５［子ども］ ―― 37
分科会６［リプロダクティブ・ヘルス／ライツ］ ―― 43
分科会７［教育とジェンダー］ ―― 49
分科会８［はたらく女性　輝く会議］ ―― 53
分科会９［DV・デートDV］ ―― 59

全 体 会

基調報告 ―― 65
橿原大会シンポジウム ―― 69
特別講演会 ―― 78
記念シンポジウム ―― 80

かしはら未来会議 ―― 89

あゆみ＆まとめ

プレイベント１　日本女性会議2025橿原プレ大会 ―― 100
プレイベント２　1dayジェンカレ ―― 104
開催までの歩み ―― 108
参加状況 ―― 109
参加者アンケート結果 ―― 110
後援・実行委員会等 ―― 117
協賛・寄付 ―― 118

大 会 テ ー マ

日本国はじまりの地から未来へ

～多様性を認め合う社会の実現を～

橿原市は、女帝・持統天皇が日本初の都「藤原京」を築き、
律令を制定し、国名を「日本」と定めた地です。
古来より多くの女性たちの活躍が伝わるこの地から、
多様な価値観が尊重され誰もがいきいきと自己実現できる
未来へ繋いでいくことをめざします。

開 催 目 的

ジェンダー役割からの解放とワークライフバランスの推進

雇用における差別をなくし、誰もが自分の能力を発揮でき生活と仕事の調和がとれる環境づくり（ワークライフバランス）を考え、地域や家庭でも一人ひとりがかけがえのない大切な存在として豊かで安心できる生き方を提案していきます。

産・官・学の取り組みの発信

行政と、個人、団体、企業、学校とが知恵や力を出し合い、市民参加型の会議の運営を進めることにより地域の活性化を図ります。また、次代を担う青少年たちを巻き込み、新たな視点を取り入れ、すでに男女共同参画活動に尽力している様々な団体とともにより良い活動につなげ、情報発信していきます。

ダイバーシティ＆インクルージョンの実現

性別や年齢、国籍、人種、宗教、障がいの有無などを問わず、多様な価値観、生き方を尊重される社会のあり方を考えていきます。家庭、学校、職場など、あらゆる場面で多様な価値観を尊重し、共感できる人を増やしていくことで一人ひとりのウェルビーイング*をめざし、男女共同参画社会の実現に向けた意識を前進させます。

日本女性会議
2025 橿原

大会シンボルマーク

会議と橿原の最初のひらがな「か」をモチーフに、
女性がイキイキと社会、未来に向かって躍動している様子を表現しています。

（考案：鈴木 久）

＊ウェルビーイング（Well-being）とは、個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること。

日本女性会議 2025 橿原

大　会　宣　言

私たちは今、約1300年前に日本の礎が築かれ、歴史と文化が息づくここ日本国はじまりの地橿原に集い「多様性を認め合い、誰もが尊重される社会の実現」という未来への希望を胸に「日本女性会議2025橿原」を開催いたしました。

2025年は、1975年の国際婦人年から50年、1995年の北京女性会議から30年、そして本大会は日本女性会議の歩みを継ぐ第40回目の節目を迎えました。

本大会では、年齢、性別、国籍、障がいの有無、性的指向、性自認、価値観など、あらゆる多様性を尊重し、誰もが諦めることなく、自分らしく輝ける社会をめざして、活発な議論を交わしました。

私たちは、ジェンダーギャップの背景にある構造的課題を可視化し、その解消に向けて、組織や個人が一人ひとり「自分らしい在り方」を追求しながら行動を重ね、次世代に繋げていくことをここに誓います。

持続可能な社会を実現するためには、女性が能力を最大限に発揮でき、あらゆる分野で参画・活躍できる環境を整えることが不可欠です。
同時に、男性も従来の性別役割分担に縛られず、育児や介護、地域活動に積極的に参画し、柔軟な働き方や多様な生き方を選択できる社会を築いていきます。

本大会で繋がった市民・団体・企業・行政が連携し、それぞれの役割を担いながら協働し、社会課題の解決に取り組み、より良い未来を共創していきます。

私たちは、ここ橿原から新たな歴史を創り上げ、力強く未来へ向かって歩み出すことを大会宣言といたします。

2025年10月4日
日本女性会議2025橿原

大会 1 日目

分科会

奈良県橿原文化会館

パネル展▼

▲受付

▲エントランス

▲物産コーナー

エントランス・受付▼

奈良県社会福祉総合センター

▲お弁当

▲託児

交流会

大会 2 日目

全体会

開会式

▲オープニングアトラクション
万葉ダンスファンタジー～藤原京に夢を託して～

◀あいさつ

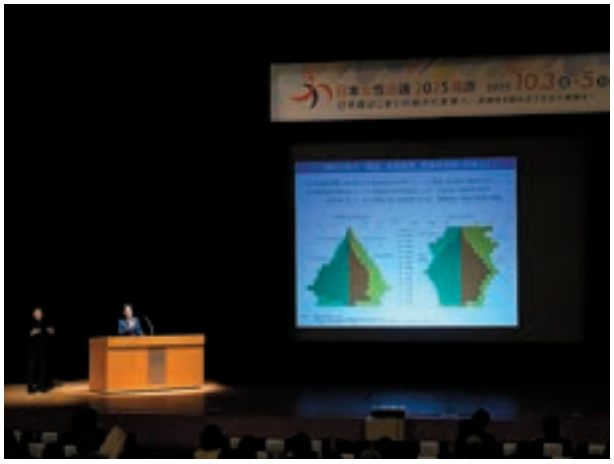
大会長　橿原市長
亀田 忠彦
実行委員長
槇村 久子

橿原市議会議長
うすい卓也

奈良県副知事
西村 高則

司会
山北 愛琳

基調報告



橿原大会シンポジウム

分科会報告

特別講演会

記念シンポジウム

閉会式

▼大会宣言

▼次期開催地香川県丸亀市へのバトンパス

▲フィナーレ

▲物産コーナー

大会 3 日目

かしはら未来会議

▲あいさつ・市長　亀田 忠彦

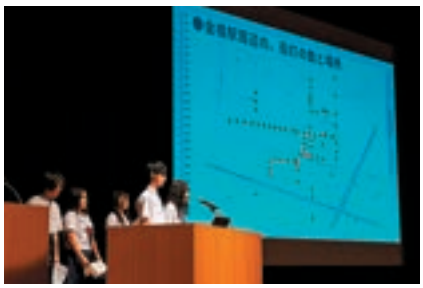
▲あいさつ・教育長　吉田 徳弘

▲司会　ヒラコ

▼エントランス

▼開演前参加校の様子▼

発表



▲審査員

▼受賞校

主催者あいさつ

大会長

橿原市長

亀田　忠彦（かめだ　ただひこ）

「日本女性会議2025橿原」は、前回の倉吉大会から３年振りに開催いたしました。全国から多くの方々にご参加いただき、盛会のうちに終了することができ、ご参加いただきました皆様に改めて御礼を申し上げます。

日本国はじまりの地を謳う本市では、藤原宮跡を含む『飛鳥・藤原の宮都』の令和８年の世界遺産登録をめざしており、本大会の開催を契機に一層の機運醸成ができたものと喜んでいるところです。

本大会を振り返りますと、初日は、９つの分科会を２会場・２部構成で開催し、参加者ご自身の興味や関心の高さに応じて幅広いテーマの中から選択して頂いたことから、いずれの分科会においても、熱心に議論に耳を傾ける姿や意見交換が行われた様子が窺えました。また、翌日には各分科会の代表から大会長に対し「橿原大会の提言」を行いました。

大会２日目は、内閣府男女共同参画局長の岡田恵子氏による基調報告に始まり、続く橿原大会シンポジウムでは、元プロマラソン選手の有森裕子氏及び地元・天理大学の現役女性アスリートをお迎えし、スポーツ界でのジェンダーの課題をふまえた心身の健康とケアの重要性を確認することができました。

さらに、モデル・俳優・歌手のアン ミカ氏に「ポジティブ脳で幸せに過ごすために」と題して講演をいただくなど、ご参加いただいた皆様の記憶に残る、意義深い大会とすることができました。

また、本大会では、２日目に記念シンポジウムを開催して地元の大学生・大学院生とジェンダー平等を考えたり、最終日には、「かしはら未来会議」と題して、地元の中学生・高校生が橿原の未来について提言を行うなど、若者の柔軟な発想や地域に対する思いに感心するとともに、地域の未来を明るく感じさせるものでした。

閉会式では、大会宣言を発表するとともに、バトン伝達式では次回開催地の香川県丸亀市のご代表に、悠久の歴史を感じさせる「さしば（翳）」をバトンとして引き継がせていただきました。丸亀市での2027年開催予定の次回日本女性会議では、全国から多くの人々が集い、実りの多い大会となりますことを祈念いたします。

本大会の開催は、本市内外において、男女共同参画の機運をより一層高めるきっかけになったと考えており、各分科会やシンポジウム、講演会で出された提言や課題は今後進むべき方向を示しており、女性の就業率向上などレガシー事業として進めていくとともに、令和９年度に策定する「第４次橿原市男女共同行動計画」に活かし、本大会の開催目的である「多様性を認め合う社会の実現」に向けた取り組みを推進してまいります。

結びに、「日本女性会議2025橿原」の開催にあたり、多大なるご協賛・ご支援を賜りました企業・団体・個人の皆様をはじめ、大会の企画運営にご尽力をいただきました多くの皆様に感謝を申し上げるとともに、本大会を契機として、全国各地で男女共同参画社会がますます発展いたしますことを祈念いたしまして、挨拶といたします。

実行委員長あいさつ

実行委員長

槇村　久子（まきむら　ひさこ）

皆さま、ようこそ奈良の橿原市へ、「日本女性会議2025橿原」に全国各地からご参加いただき、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

橿原市の女性議員の「日本女性会議を開きたい」という熱い想いから始まった橿原大会ですが、今回のテーマは、「日本国はじまりの地から未来へ～多様性を認め合う社会の実現を～」でした。

実は今回の日本女性会議は記念すべき40回目にあたります。今年2025年は1975年の国際婦人年から50年、1995年の北京女性会議から30年でした。

私事で恐縮ですが、これをしたいと思って入学したら、理工系学部には女子トイレがない！時代。保育所探し、共働きを奈良の地で始めました。そのような中、国際会議では現地のその熱気を思い出し、多様な国々の女性の現実と動きに元気づけられ、意欲が湧いてきました。

この日本女性会議は全国の各都市で開かれるところに大きな意味があることを実行委員会の皆さんと３年間の準備の中で時間が経つほど実感しました。その年の地理的位置、歴史、風土、産業と私たちの日常生活は深く関わっているからです。その特徴の一つに、奈良県の女性の就業率は全国で最下位に驚き。でも８割の女性は働く意欲があるのです。奈良県北西部は大阪のベッドタウンでもあり、通勤もあるはず。それはなぜなのでしょうか？多様性を認め合い、みんなが可能性を生きられる社会を進めたい、分科会ではそれぞれのテーマで課題を共有し、これからの方向性を探りました。

９つの分科会はどの会場も盛況で、多様なテーマでそれぞれ議論され、これから未来に向けて視野と具体的方向性や提言が出されました。濃密な会議に各会場は狭い気がするほど熱気に満ちていました。すてきな分科会報告と提言をいただき、橿原市が奈良県と連携し、レガシーとして具体化していただくことを期待しています。

自ら動くと、新たな課題や方向性、具体的策が見つかり、周りの人々と共有することで、人のつながりも広がり、次の行動につながってくる。その好循環が、それぞれの人の可能性と、地域や企業や社会、まちを新しく創っていく。その実感と期待をしました。

この好循環の波が、皆様の動きや思いが、橿原市から奈良県、全国に広がりますよう期待しています。“みんなが可能性を生きられる社会”を進めたい。まず自分から！

最後になりましたが、多くの団体、大学、企業、ボランティア、そして実行委員や市事務局並びに市職員の皆様に多大な、心温まるご支援をいただき心より感謝申し上げます。

大会日程

月日・会場	時　間	内　　容
1日目　分科会・交流会 2025年10月3日（金） 【会場】奈良県橿原文化会館 奈良県社会福祉総合センター	12:30～14:30	前半分科会（分科会1～5）
	14:30～15:30	休憩・移動
	15:30～17:30	後半分科会（分科会6～9）
【会場】グランドメルキュール奈良橿原	18:30～20:30	交流会
2日目　全体会 2025年10月4日（土） 【会場】奈良県橿原文化会館	9:30～ 9:50	オープニングアトラクション
	9:50～10:20	開会式
	10:20～10:50	基調報告
	10:50～12:00	橿原大会シンポジウム
	12:00～12:45	昼休憩
	12:45～13:30	分科会報告
	13:40～14:40	特別講演会
	14:50～16:30	記念シンポジウム
	16:30～17:00	閉会式・大会宣言
3日目　かしはら未来会議 2025年10月5日（日） 【会場】かしはら万葉ホール	10:00～10:15	オープニング
	10:20～11:30	参加校による発表
	11:30～11:45	休憩・来場者投票
	11:45～12:15	パネルディスカッション
	12:20～13:00	表彰＆クロージング

分科会一覧

分科会	分　　野	テ　ー　マ
分科会1	健康・医療	未来に向かう医療 ～性差医療を知って健康寿命をのばす～
分科会2	歴史・文学	日本国の始まり その時代を生きた女性たち
分科会3	生き方×働き方「なりたい自分」	「女だから、男だから」ではなく、生きやすい社会にするために ～橿原が変われば、奈良が変わる、そして日本を変える～
分科会4	家族	笑って考える家族のカタチ ～男の家事が社会を救う　ジャンボ宝くじを必ず当てる方法?!～
分科会5	子ども	子どもの「自分らしさ」と「生きにくさ」をめぐって
分科会6	リプロダクティブ・ヘルス/ライツ	今を生きるあなたに知ってほしい「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」
分科会7	教育とジェンダー	奈良で理工系女性人材を育てる
分科会8	はたらく女性 輝く会議	女性就職率最下位の奈良から考える ～日本国はじまりの地 橿原から はたらく女性が輝く未来～
分科会9	DV・デートDV	子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないために

分科会 1　健康・医療

日時　10月3日（金）12:30～14:30
会場　奈良県橿原文化会館　大ホール

未来に向かう医療
～性差医療を知って健康寿命をのばす～

登壇者

座　　長：細井 裕司（奈良県立医科大学 理事長・学長）
趣旨説明：島本 太香子（日本女性会議2025橿原実行委員会 副実行委員長、奈良大学 副学長 理事、奈良県立医科大学附属病院 産婦人科医）
シンポジスト：
内田 育恵（愛知医科大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科 特任教授、医師・医学博士）
津金 昌一郎（国際医療福祉大学大学院 教授）
川崎 佐智子（奈良県立医科大学 地域医療支援・教育学講座 講師、整形外科医（脊椎脊髄外科専門医））

趣旨説明

島本 太香子

「健康・医療」をテーマとした分科会を設置した趣旨の説明を以下のとおり行いました。

2025年６月に国の「すべての女性が輝く社会づくり本部」が示した「女性活躍・男女共同参画の重点方針2025」の中で、「健康」という言葉がキーワードとして示され、「仕事と健康課題の両立」など、健康であることが、すべての根底にあると認識されています。

また、「性差」という言葉も示されており、「性差に配慮した施策の推進」、「性差を考慮した生涯にわたる健康への支援」、という、まさにこの分科会のテーマが資料にも示されています。

この分科会は、これらの潮流を意識しながら、だれもが健康に、そして心豊かに、その生涯を送れるように、高齢社会を迎えた私たちが、知っておかなくてはならないことを、一緒に考えていきたい、という願いから開設しました。

分科会では、性差という観点から、健康に関するそれぞれの分野の専門家から、最新の研究成果について報告を行います。

本日の分科会の座長は、奈良の医療を支え、最先端の研究をされている、奈良県立医科大学の学長の細井 裕司氏に依頼しています。

私たち一人ひとりが、自らの特性を知り、日々の生活の中で、健康で心豊かであるために、できること、他者に向けてできること、などを一緒に考えて行きたいと考えています。

座長からの講演者の紹介等について

細井 裕司

各講演を始めるにあたり、順に紹介を行いました。

その際、未来に向かう医療として、現代においては、健康寿命を伸ばすことが大変重要となっており、その方策を、性差医療を知ってすすめるために、シンポジストとして招いた各分野の専門家から最新の情報について報告があることを参加者に伝えました。

講演①「認知症予防のための難聴を考える」

内田 育恵

内田氏は、アルツハイマー型認知症における性差の存在と、難聴が認知症予防において果たす極めて重要な役割について講演しました。

【認知症のリスク要因と性差】

アルツハイマー型認知症の患者は３分の２が女性であり、これは単に寿命の長さだけでなく、男性ホルモンであるテストステロンが病的な物質であるアミロイドβの除去に関係しているなど、生物学的に女性がハイリスクであることが分かっています 。

2017年に難聴と認知症の関係が示されて以降、研究が進められ、2024年の最新レポートでは、認知症において修正可能な危険因子が14種類報告されています。その中で難聴は高LDLコレステロールとともに人口寄与割合で首位となっています。人口寄与割合は疾患の危険因子をなくすことができれば、疾患の発症を予防または遅らせることができるという理論上の指標で、難聴の認知症に対する人口寄与割合は７％であることが示されました。

難聴は、うつの発症や社会的孤立とも関連性が深いため、難聴に関連する危険因子は合計３つ含まれています。特に、女性は生涯のうつ罹患率が男性に比べ1.6～２倍ほど高いため、女性は特に注意が必要であると指摘されました。14種類の危険因子に最適な対処を行うことで、理論的には約45％の認知症の発症を予防または遅らせることができると報告されています。

【認知予備能と補聴器の重要性】

認知症予防の取り組みは、早ければ早いほど良く、長く続けるほど有益であり、決して早すぎることも遅すぎることもありません。

「認知予備能」が高い場合、脳内に病理物質が溜まっていても認知機能は高い状態に保たれ、ア

ルツハイマー病を発症しない可能性があることが、ナン・スタディ（修道女研究）などの研究から示されています。教育や、複雑な知的活動を伴う職業経験、社会的な活動や交流といった要因が、この認知予備能と深く関連していることが分かっています。

難聴があっても補聴器を使えば認知症のリスクを減少させると評価されており、実際、複数のリスクを持つ難聴者は補聴器の使用によって３年後の認知機能の悪化が48％抑えられたという研究結果が示されました。これは、補聴器が脳に音や言葉の刺激を届け続けることで、「使えば使うほど能力は維持される」という脳の原則に基づき、活発に脳を働かせることに繋がるためです。

【健康長寿のための提言】

聞こえにくさへの気づきが大切であり、放っておくことは認知機能や健康にマイナスの影響をもたらします。ご自身やご家族の耳の健康に注目し、聞こえにくくなってきたと感じられたら、耳鼻咽喉科で正しい評価を受けることが最初の一歩になります。また、耳たぶにのせるだけで使用でき、衛生的にも優れた軟骨伝導イヤホンといった最新技術もあります。

健康長寿で健やかな毎日を送るために、難聴対策と聞こえの重要性を一層啓発していくことが、耳鼻咽喉科医としての使命であると考えます。

講演②「男のがん、女のがん：疫学研究から見た日本人のがんの要因」　津金 昌一郎

津金氏は、日本におけるがんの現状と、性別によるリスク要因の違いについて、疫学研究のデータに基づき詳細な解説を行いました。

【がんによる死亡の現状】

まず、2023年の日本人の死因では、がんで亡くなる方が全体で38万人を占め、男性・女性ともに死因の第１位です。がんによる死亡割合は、男性が28％、女性が20％と、女性の方が少ないという性差が見られますが、70歳未満に限ると各々32％、48％となり、女性が1.5倍多くなります。近年、がんによる死亡者の総数は増加していますが、これは日本人の高齢化が進み、がんになりやすい年齢層の人口が増えたためです。年齢構成を調整した死亡率で見ると、特に69歳以下の死亡数は減少傾向にあり、これまでの公衆衛生や医療の進展によるがん対策の成果が表れていると評価できます。

【がんによる死亡率の減少】

がん死亡率が減少している主な要因として、胃がん、子宮がん、肝臓がんといった感染に関連するがんの死亡率が、戦後から一貫して減少していることが挙げられます。これらの死亡率の減少は、肝炎ウイルス、ピロリ菌、パピローマウイルスといった感染源に対する制御が進んだためです。一方で、乳がんは増加傾向にありましたが、近年は横ばいとなっています。

次に、日本人のがんの原因を性差の観点から詳細に考察します。がんの原因には、生活習慣、慢性感染、環境、ホルモンなどが複雑に関わっています。

男性におけるがんの最大の原因は、タバコであり、次いで、感染、飲酒、高塩分食品などが原因として続きます。

これに対し、女性におけるがんの最大の原因は、感染であることが明確に示されています。女性においては、感染を制御することが、多くのがんを減らすための最も重要な要因であると言えます。

【タバコとアルコールの影響】

タバコの喫煙率は男女ともに減少傾向にあるものの、まだ男性が高い水準にあります。アルコールは、大腸がん、肝臓がん、食道扁平上皮がんの原因となり、飲酒量が増えるほどリスクが上昇します。その他、野菜・果物不足、運動不足、肥満なども、生活習慣によりがんリスクを高めることが確認されています。

【結び】

がんを効果的に予防し、誰もが健康寿命を延ばすためには、単一の対策に留まらず、性差を理解した上で、個々のリスク要因に応じた適切な生活習慣の改善と、子宮がんにおけるワクチン接種など感染対策の徹底が不可欠です。また、検診に関しても必ず受けるように努めてください。

講演③「骨粗しょう症とフレイル（虚弱）の予防」

川崎 佐智子

川崎氏は、超高齢社会における健康寿命の延伸に不可欠な、運動器の健康維持について、特に女性の性差に着目して以下のとおり講演を行いました。

【骨粗しょう症の現状と女性のリスク】

骨粗しょう症の患者数は年々増加しており、2024年時点で約1500万人に達しています。特に70歳以上の女性では３人に１人、80歳以上ではほぼ半数が骨粗しょう症であると推定されています。骨粗しょう症の最大の問題は骨折であり、背骨、太ももの骨（大腿骨近位部）、手首の骨がよく折れます。特に、大腿骨近位部の骨折は女性が圧倒的に多く、60歳以降から急増し、寝たきりの原因となるため、健康寿命を大きく損なう要因となります。

女性が骨粗しょう症になりやすい最大の理由は、女性ホルモン（エストロゲン）の欠乏にあります。エストロゲンは骨の形成を助け、骨吸収を抑制する役割を果たしていますが、閉経によってこのホルモンが急激に減少すると、骨が急速に弱くなってしまいます。

また、過度なダイエットや低体重も、栄養不足と低エストロゲン状態を引き起こし、骨粗しょう症を若いうちから進行させる原因となります。骨粗しょう症は高齢女性特有の問題ではなく、若い時から適正な体重を維持し、適切な栄養とエネルギーを確保することが重要です。

【ロコモとフレイル】

骨粗しょう症の予防は、運動器の障害によって移動能力が低下した状態であるロコモティブシン

ドローム（ロコモ）の予防に直結します。

フレイルは、筋骨格の問題だけでなく、低栄養などを含めた全般的な衰弱状態であり、ロコモはその一歩手前の、運動機能・移動能力が落ちた状態を指します。また、骨粗しょう症や骨折は、ロコモやフレイルの進行の契機になると考えられています。

特に、加齢変化で起こる腰部脊椎管狭窄症は、足のしびれや間欠性跛行（連続で長く歩けない状態）を引き起こし、運動を阻害することでロコモを進行させます。症状がひどい場合は、手術によってロコモが改善するというデータもあり、気になる症状があれば、放置せず脊椎外科を受診してください。

また、近年、フレイルの進行には、口腔機能の低下が関与していることが指摘されています。低栄養や体重減少、筋肉量の減少といった悪循環（フレイルサイクル）に、歯痛や咀嚼力の低下が加わることで、さらに低栄養が進んでしまうため、口腔ケアも健康長寿のためには重要な要素となります。

意見交換

分科会１「健康・医療」の意見交換では、座長を務める細井氏と各講演者との間で、性差医療の知見を踏まえた日常の健康維持策について活発な意見交換を行いました。主な内容は以下のとおりです。

【難聴と認知症予防】

内田氏は、認知症の最大のリスク要因の一つである難聴について、早期発見の重要性を強調するとともに、日常生活でテレビの音量を他者より上げる、聞き返しが増えるといった変化に気づいた際には、耳鼻咽喉科への受診を推奨しました。また、高齢者は周囲が自身に合わせて話すため、難聴の自覚が遅れがちであるという現状を指摘しました。高額な補聴器への抵抗を考慮し、簡易的な軟骨伝導イヤホンを試用することで、聞こえの改善を体感し、次の一歩を踏み出すきっかけとすることを提案しました。

【がん予防】

津金氏は、日本人のがんの原因に関する疫学データに基づき、予防のための最も重要な生活習慣として、喫煙を完全に止めること、そして飲酒量を減らすことを挙げました。特に男性のがんの最大原因がタバコであることを踏まえ、これらの根本的なリスク要因への対処が、がんの発生率低下に直結すると強調しました。

【骨粗しょう症・フレイル予防】

川崎氏は、骨粗しょう症とフレイルの予防には運動が最も効果的であると述べました。骨密度を高めるためには、骨に重力がかかるジャンプや踵落としといった「骨力アップ体操」を無理のない範囲で行うこと、また筋肉の維持・強化のためのレジスタンス運動を継続することが重要であると説明しました。さらに、ストレスを解消し、心身ともに健康な状態を保つことが、全身の衰弱を防ぎ、健康寿命を延ばす鍵であると締めくくっています。

座長総括

座長の細井氏は、本日の議論を通じて、難聴が認知症の主要なリスクファクターであることや、がんと性差の関係、ロコモやフレイルの特徴等を理解した上で、本テーマである「健康寿命」、健康で長生きするためには、自らの生活習慣を見直し、小さな変化に気づき、予防的な行動を起こすことの重要性を再認識することができたと総括しました。

分科会１提言

だれもが自分の心身の特性を知り、性差医療を活用して、自分の未来を創り、健康寿命をのばして、生き生きと過ごしましょう。

分科会 2　歴史・文学

日時　10月３日（金）12:30～14:30
会場　奈良県橿原文化会館　小ホール

日本国の始まり　その時代を生きた女性たち

分科会２は、古代衣装を身に纏った奈良大学文学部国文学科の学生たちの司会で幕を開けました。各講演の前後に講演者の紹介や自身の感想を交えたまとめを述べるなど工夫を凝らした進行により、分科会は最後までスムーズに開催することができました。

また、講演では、1300年前の日本女性の実像を歴史学や文学の研究から紐解き、現代女性と比較することで、ジェンダー問題の社会的背景を考察するなど、古代の多様な女性像を明らかにしました。

登壇者

講演：鈴木（すずき） 喬（たかし）（奈良大学 文学部国文学科 准教授）
　　渡辺（わたなべ） 晃宏（あきひろ）（奈良大学 文学部史学科 教授）
司会：奈良大学文学部国文学科 学生

講演①「万葉集に見る古代の女性たち」

鈴木 喬

１．講演の概要と現代のジェンダー認識

まず、現代の日本語に根付くジェンダー的な発想について考察します。例えば、「男だから泣かないの」という教えや、男性の意気地がない様を指す悪口としての「女々しい」という言葉は、女性に対してはあまり使われないこと、また、「愛妻家」という言葉はあっても、「愛夫家」という言葉がほとんど使われない背景には、「妻は夫を愛するもの」という前提があり、妻を思う夫が褒められる一方で、女性の側が評価されないという言葉の運用がなされてきました。

しかし、このような現代の言葉に存在するジェンダー的発想は、古代の万葉集に見る女性たちの実像とは異なる様相を示しています。万葉集の歌は、男性貴族、女性貴族、そして女性天皇によって歌われており、その中には女性が男性よりも上の立場で歌を歌う表現が存在します。

2.万葉集の歌風「ますらをぶり」の再評価

万葉集は、かつて「ますらをぶり」と呼ばれ、おおらかで男性的な歌風、雄々しい姿になぞらえたものだとされてきました。一方で、対になる「手弱女ぶり（たをやめぶり）」は、古今和歌集をはじめとする勅撰集の、洗練された優艶で柔和な女性的な歌風を指すものとされてきました。これらの概念は、江戸時代の国学者が提唱したもので、現代の学校教育の補助教材にも残っているものです。

しかし、万葉集の研究においては、「ますらをぶり」で万葉歌を評する研究者は現在一人もいません。その理由として、万葉集には現代でいう「女々しい」感覚の歌や、平安時代のような雅でむしろ女性的な歌が多々含まれていることが挙げられます。

「ますらを」が奈良時代には五位・四位の律令官人を指し、大君や朝廷に奉仕する男性像であったのに対し、「たわやめ」は「手が弱い女」「力が弱い女」という非力な女性像を漢字表記からも見て取ることができます。実際に万葉集の歌にも「たわやめだから泣いてしまうのだ」という、力が弱い女性はすぐ泣いてしまうというステレオタイプな理想像に基づく表現が見られます。

一方で、強健な「ますらを」でも恋によって「ずっと後悔している」「正気な心が今はない」「今にも死にそうだ」といった心情を歌い、恋のために泣いてしまう男が表現されます。これは、ジェンダー的な固定観念を踏まえながらも、それを転換し、あなたを想う恋心がジェンダーを超えて強いのだと歌っていると言えます。

3.「待つ女」像と通い婚の文芸性

万葉集における女性像としてしばしば挙げられるのが「待つ女」です。これは、古代の婚姻形態が、男性が女性の家に通う通い婚を前提としていたため、女性が男性の訪れを待たねばならなかったことに起因します。

額田王の有名な歌「君待つと　我が恋ひをれば　我が宿の　簾動かし秋の風吹く」は、「あなたのお出でを恋しく待っていると、簾を動かしたのが冷たい秋の風であった」という、待ちわびる様子を繊細に表現したものです。また、万葉集巻二の巻頭に置かれた磐姫皇后の歌「君が行き　日長くなりぬ　山尋ね　迎へか行かむ　待ちにか待たむ」は、恋の歌の始まりとして、愛しい人の帰りを「待っていようか、それとも迎えに行こうか」と女性が逡巡する気持ちを描き出しており、「待つ女」の姿が万葉集の編纂時に一つの美的感覚として定着した側面も示唆されています。

しかし、この「待つ」という行為は、ただ耐え忍ぶだけの暗い影を成しているのではなく、女性でしか歌えない感性や肌感覚を表現し、文芸としての良さを伝えるものとして成立しています。

4．神話に見る女性の主体性と女帝の姿

日本の神話の最高神であるアマテラス（天照大神）は女神です。イザナキ・イザナミよりも最上の神が女神であるという事実は、古代においては男性と女性が対等な関係であったからこそ認められたものであり、女性蔑視の意識があったならば決して認められなかっただろうと考えられます。アマテラスは、黄泉の国から帰ったイザナキが左目を洗った時に誕生し、高天原の統治を命じられ

ています。岩戸隠れの神話に見るように、神様の世界と人間の世界の秩序の中心であり、男装して弟スサノオと対峙する姿は、弱々しいたわやめではなく、為政者として立派な柱の像として描かれています。

また、国造りの神であるイザナミが火の神を産んで亡くなった際、夫イザナキは「私とお前が造った国はまだ造り終っていない。だから帰ってきてほしい」と妻に話しかけます。これは、現代的な「寂しい」という感情ではなく、「仕事（国造り）が途中だから」という理由であり、夫が妻を国造りの対等なパートナーとして見ていたことを示しています。

万葉集の歌人である持統天皇もまた、「待つ女」の枠には収まらない、主体的な女性の象徴として挙げられます。持統天皇の歌「春過ぎて　夏来るらし　白たへの　衣干したり　天の香具山」は、高らかに季節の到来を歌い上げるものであり、単なる叙景歌ではありません。古代では、天皇が良い政治を行うことで季節が正しく巡航すると考えられていたため、この歌は持統天皇自らの政治的な意図、すなわち「良い政治を行っている」というメッセージを込めた天皇像を表現していると解釈できます。

5．和歌の成立における女性の役割と歌人の主体性

『古今和歌集』の仮名序には、和歌は「男女の仲をも和らげ」、「この歌天地のひらけ初まりける時よりいできにけり」と記されています。さらに古い注釈では、和歌はイザナキ・イザナミの夫婦神が誕生した時から始まったとされており、女性が活躍しなければ歌の文化は成立しなかったことが示唆されます。実際、万葉集の歌の半分以上が恋歌の形式をとっており、女性が活躍しなければ和歌、あるいは極端に言えば日本文化は今の形にはならなかったと言えます。

また、宴会の場で葛城王（橘諸兄）が怒っていた際、采女（うねめ）の歌「安積山　影さへ見ゆる　山の井の　浅き心を　我が思はなくに」によってその心が慰められた例が残されています。これは、女性の歌が男性の心を慰める場面であり、女性が男性の光に照り輝く依存的な存在では決してないことを示しています。

最後に紹介された狭野弟上娘子（さののおとがみのおとめ）の歌は、女性の主体性を力強く示しています。夫が島流しになった際、彼女は「君が行く　道の長手を　繰り畳ね　焼き滅ぼさむ　天の火もがも」（夫が旅をする長い道を、手繰り寄せて焼き滅ぼしてしまいたい。そんな天の火が欲しい）と歌っています。これは、取り残された「待つ女」でありながら、ただ耐え忍ぶだけではなく、夫の苦難の道を焼き滅ぼしたいという強い願いを表現しており、女性の力強さがそこに明確に見える事例です。

6．結び

平塚らいてうの有名な一節「元始、女性は太陽であった」からも、女性の解放を説いた平塚氏のメッセージと古代の女性像を重ね合わせることができます。万葉集の女性たちは、一人ひとりが輝く太陽のように歌が輝いており、男が上、女が上といった優劣の関係ではなく、対等な存在であっ

たこと。そして、女性が活躍しなければ、日本の和歌の文化自体が成立しなかったということがわかります。

古代の女性たちは、現代の固定観念やステレオタイプに囚われることなく、強い主体性と独自の感性をもって、政治や文芸といったあらゆる分野で、主体的に輝く「太陽」のような存在であったと言えます。

講演②「古代の女帝について」

渡辺 晃宏

1．講演の概要

古代の女帝について、一般的には男系直系の継承を維持するための中継ぎ的な存在として広く理解されてきたという従来の説に疑問があります。古代の女帝は、推古天皇から称徳天皇までの８代に集中して出現しており、９世紀以降は途絶えます。この現象を中継ぎ説だけでは説明できません。女帝の政治的な実態や、当時の大和王権の王のあり方、さらには古代社会における男女の性差の認識にまで遡って、その存在意義を再評価すべきです。特に、女帝の集中は古代社会の特性と深く結びついており、彼女たちが単なる中継ぎではなく、一時代を築き上げた実力者であったことが具体的な事例を通してわかります。

2．古代における王位継承の原則

古代の大和王権における王（後の天皇）のあり方について、近年の古代史研究の一般的な理解として以下の点が挙げられます。

- 終身の任期：一度王になったら、基本的に死ぬまで王位にある終身の任でした。
- 後継者の決定方法：先代の王が生きている間に後継者を定めることは基本的に行われず、王が亡くなった後に、王権を支える豪族たちの代表者が協議して後継者を決定していました。
- 資質の重視：後継の王には、人格的に優れ、指導力を持つ熟年の者であることが絶対条件でした。20代や30代では若すぎると考えられていました。
- 譲位の発生：生きている間に王位を譲る「譲位」は基本的になく、最初の事例は645年の乙巳の変（大化の改新のクーデター）後の皇極天皇の退位でした。
- 皇太子制度の未確立：王位継承者をあらかじめ定める皇太子制度は未確立でした。明確に出来上がるのは７世紀終わり近くの飛鳥浄御原令からであり、それも奈良時代を通じて不安定な状態が続いたと考えられています。

この原則から、古代においては必ずしも男系の直系継承が自明のことではなかったことがわかります。推古天皇の世代から称徳天皇の世代までの天皇19代のうち、女帝は８代を占めており、女性と男性の比率が半々に近い状態が続いていました。

3．女帝以前の女性のリーダーと古代社会の特性

推古天皇以前にも、女性のリーダーが存在した可能性があります。

- 邪馬台国の女王:『魏志倭人伝』に記された卑弥呼やその後の台与の存在は、女性のリーダーが珍しくなかったことを示します。
- 考古学的裏付け: 古墳に葬られている首長の男女比率を調べると、女性が３割から５割に及び、女性の首長が普遍的に存在していたことが明らかになっています。
- 飯豊王の存在: 古事記にはないものの、日本書紀では飯豊青尊（飯豊王）が実質的な大王として大和王権を導いた役割が描かれています。後の歴史書『扶桑略記』では一代の天皇に数えられており、年長の女性が王位継承に関与し、王にもなり得たことを示しています。

さらに、古代の社会は双系的な社会であったことがわかっています。

- 双系性の重視: 父系と母系、男系と女系のどちらも重視され、男女の性差は基本的にあまりなかったと考えられています。
- 婚姻形態: 王とその妃は別居するのが原則で、夫が妻方を訪ねるという訪問婚の形態が一般的でした。
- 称号の平等: 社会的に男女は基本的に平等であり、称号においても男女の区別はなかったと考えられています。

こうした双系性の社会の下では、実力のある女性が王位に就くことは、決して特別なことではなかったと言えます。

４．古代の主要な女帝たちの実像

古代の女帝は、単に中継ぎとしてではなく、強力なリーダーシップと実力をもって政治を主導しました。

◆推古天皇（額田部皇女）

- 即位事情: 欽明天皇と蘇我稲目の娘である堅塩媛の間に生まれ、天皇家と蘇我氏を結ぶ接点に位置しました。
- 実力と役割: 蘇我馬子とともに王位継承に大きな役割を果たし、崇峻天皇暗殺後に39歳で即位。
- 長期の在位: 36年間にわたり大王の位にあり続け、その存在形態は、終身の任であったそれ以前の大王のあり方をそのまま体現していました 。中継ぎではなく、実力を評価されて大王になったと考えるべきであるとされました。
- 聖徳太子: 厩戸皇子（聖徳太子）の皇太子制度への関与は、日本書紀の脚色である可能性が指摘されました。

◆皇極天皇（斉明天皇）

- 即位事情: 夫の舒明天皇の死後、群臣に推戴されて即位。
- 権力構造: 乙巳の変後、弟の孝徳天皇が即位し難波へ遷都しますが、退位した皇極は皇祖母尊という最大限の尊称で呼ばれ、孝徳とともに権限を行使する協力体制を築いていた可能性が示唆されました。
- 重祚と活躍: 孝徳の死後、飛鳥に戻り斉明天皇として重祚（再即位）。大規模な土木工事

や、百済救援のために自ら北九州へ出向くなど、単なる中継ぎ以上の強力なリーダーシップを発揮しました。

◆持統天皇（鸕野讃良皇女）

- 権力の確立：天武天皇の正妻。夫の死後、天武天皇のやり残した事業を完成に導き、律令の編纂（飛鳥浄御原令）と藤原京の完成を成し遂げました。
- 譲位と太上天皇：自身の系統への確実な王位継承を見届けるため、日本独自の制度として太上天皇（上皇）を創設し、孫の文武天皇を支えました。太上天皇は、退位後も天皇権を分称する存在であり、その考え方が大宝令に色濃く反映されています 。
- 律令国家形成への貢献：律令国家の完成形態は持統天皇の存在なくしてはあり得ず、その役割は夫の天武天皇以上であったと高く評価されています。

◆元明天皇・元正天皇

- 元明天皇：持統天皇の妹。子の文武天皇の死後、即位。
- 主要な業績：平城京への遷都（710年）を主導し、その完成を導きました。これも単なる中継ぎ以上の業績です。
- 元正天皇：元明天皇の娘。将来の聖武天皇（首皇子）への継承のための中継ぎという役割も否定できませんが、その資質は高く評価されていました。元正天皇が独身のまま置かれたのは、持統天皇が後の継承を見越して計画したものかもしれません。

5．古代の女帝が集中した理由と終焉

古代に女帝が集中して出現したのは、当時の日本の社会が男女の性差が少なく、実力があれば男性と変わらず活躍できる双系性社会であったことが大きく影響しています。また、天皇の位についても男系の直系継承は当てはまらず、女性が即位する可能性が高かったためです。

しかし、持統天皇の時代に完成した律令国家は、中国の男系家制度に基づく制度を取り入れており、これにより日本の社会にも男系優先の考え方が徐々に根付くようになりました。国家の制度上、男系中心の社会が出来上がりつつある中で、幼い天皇でも即位できるようになり、わざわざ実力のある女帝を立てる必要性が薄れていきました。

その結果、孝謙（称徳）天皇が古代最後の女帝となります。彼女は唯一、皇太子になって即位した女帝であり、それまでの女帝とは性格を異にしています。

分科会２提言

古事記神話や万葉集といった文芸作品から、また古代の女帝たちの実像を通し、日本国始まりの時代における女性の在り方を明らかにしました。歴史に学ぶことの重要性と、能力による活躍、女性だからこそできることを提言しました。

分科会 3　生き方×働き方「なりたい自分」

日時　10月3日（金）12:30～14:30
会場　奈良県社会福祉総合センター　大ホール

「女だから、男だから」ではなく、生きやすい社会にするために
～橿原が変われば、奈良が変わる、そして日本を変える～

分科会3では、「誰もが自分が“ありたい姿”を実現できる社会醸成」をめざし、特に働きたい女性が「働ける社会」、次世代の子どもたちが「ありたい姿で生きられる社会」の実現を目標に、それぞれの活動を紹介・共有し、個人や組織で何ができるかを考えました。

登壇者

講師・コーディネーター：
小安 美和（株式会社Will Lab 代表取締役、奈良県こども・子育て推進アドバイザー（ジェンダー平等推進担当））
パネリスト：須﨑 康恵（奈良県立医科大学 女性研究者・医師支援センター 准教授・副センター長、奈良県男女共同参画審議会 会長）
澄川 周平（奈良県警察本部 警務部警務課 企画室長）
西岡 徳行（株式会社ハンナ 取締役）
岩城 はるみ（一般社団法人COTOIKU 代表理事）
司会：　巽 美奈子（有限会社 巽繊維工業所 代表取締役社長）

Ⅰ.基調講演

講演「女性だから男性だからではなく 誰もが生きやすい社会にするために」　小安 美和

ジェンダーギャップがもたらす「若年女性の流出」

なぜ今、地方から女性が流出しているのか。その大きな要因は、根強い固定的性別役割分担意識やアンコンシャス・バイアス（無意識の思い込み）、オールド・ボーイズ・ネットワーク（男性中心の意思決定）、ハラスメントなどのジェンダーギャップにあります。令和6年度の内閣府の調査によれば、地方を離れる理由として、「進学先がない」「やりたい仕事がない」が多く、また女性は男性に比べて「地元から離れたい」「親や周囲の干渉から逃れたい」といった地域の閉塞感を挙げる割合が圧倒的に高いことが分かっています。こうした背景が、若年女性の人口流出という深刻な課題に直結しており、若者や女性に選ばれる地域作りが急務です。

男女格差を固定化する「５つの壁」の正体

経済分野の男女格差が解消されない背景には、構造的な「5つの壁」が存在します。

- **女性自身**：ライフイベント（妊娠出産）。経験不足による自信のなさ。
- **職場**：長時間労働前提の評価体系や、柔軟な働き方の欠如。ハラスメント。
- **ケアサービス**：保育・学童、家事代行、介護などのサービスの充実や利用しやすさ。
- **家庭**：家事・育児負担の偏り。
- **社会規範**：固定的な性別役割分担意識。昭和の家族モデルを前提とした税制・制度。

これらの壁は個人の努力不足ではなく、地域のステークホルダーや地方自治体が連携して取り組むべき構造課題です。

奈良県の実態と挑戦

「都道府県版ジェンダー・ギャップ指数」によると奈良県は、就業率の男女差（43位）やフルタイムの仕事に従事する割合の男女比（40位）が、全国でも低い水準にあります。課題解決のためには、自治体や地域でデータに基づく実態把握を行い、この地域では難しい、中小企業では難しいといった「決めつけ」から脱却することが肝要です。

現在、奈良県では「ジェンダー平等推進プロジェクトチーム」を始動させ、県庁や全市町村で「お茶汲みは女性」「運転業務は男性」といった職場内の無意識の役割分担に関する実態調査を行っています。まずは公務職場から率先して変革し、その動きを民間企業や地域全体へと展開することで、負のサイクルを止める挑戦を続けています。

平等（Equality）から公正（Equity）へ

同じことを同じ条件でする「平等」ではなく、誰もが生きやすく、働きやすい社会にするためにはEquity（公正、公平＝条件を揃えること）が重要です。女性も男性も誰もが自分のありたい社会を実現できる、Equityな社会をめざしていきましょう。

Ⅱ.活動発表

活動発表①「医師の男女共同参画」

須﨑 康恵

医師の男女共同参画の現状と、奈良県立医科大学（奈良医大）における具体的な取り組みについて報告します。

医師の男女共同参画の現状

現在、日本の医師総数は34万人を超えていますが、女性医師は8万人強の23.6%に留まっています。患者の約半数が女性であることを鑑みるとこの割合はまだ少ない状況です。女性医師を増やすには、医学部に入学する女子学生を増やすことが不可欠ですが、過去30年間にわたり医学部志願者・合格者に占める女性の割合は約30%台で推移しています。これは女子高校生が医学部受験という激しい競争にチャレンジして医者になることを躊躇させる社会的な要因が存在することを示唆しています。

また、教員や教授という上位職の女性の割合は更に低く、医師への入口だけでなく出口においてもまだまだ困難が伴う状況です。この要因の一つとして挙げられるのが医師の長時間労働の常態化ですが、現在、時間外労働の上限規制など医師の働き方改革が進められており、この改革が医師の男女共同参

画につながる大きな変革期であると捉えています。

奈良医大における具体的な取り組み

奈良医大の男女共同参画に対する基本方針は「女性が働きやすい、働きがいのある職場」は「男性にとっても働きやすく、働きがいのある職場」であるというものです。その方針に則り、希望する人が希望する仕事ができるように、女性医師の研究の支援を続けております。また、女性医師は育児休業の取得者が多いものの、復職までの期間が短い傾向にあり、０歳児保育の充実が重要となります。本学では学内に「なかよし保育園」という保育施設を併設し、女性医師の活躍を支えてきました。男性医師の育児休業取得は依然として限定的であるため、現在、その推進に努めています。

過去10年間、奈良医大では「女性が常勤で働ける環境を整える」ことを目標として推進してきました。その結果、現在では目標値を超える多くの常勤女性医師が勤務しています。医師のような専門職において常勤で働くことは、専門知識の習得や昇進の機会に直結し、また患者にとっても週5日勤務する主治医の存在は大きな安心につながるため、常勤化は非常に重要です。常勤医師の増加により、教員を志す女性医師も増加しています。

結び

医師の男女共同参画を推進する最終的な目的は、女性が働きやすい環境を整備することに留まらず、多様な背景を持つ医師が増えることで患者の様々なニーズの理解の促進につなげることです。それこそが男女共生の健康増進につながると信じています。

活動発表②「奈良県警察の男性職員の育児休業の現状」

澄川 周平

一般に「男性社会」というイメージが強い警察組織において、いかに男性職員の育児休業（育休）取得を推進してきたか、その取り組みと現状について報告します。

組織の現状と課題

奈良県警察の職員のうち、警察官は男性87%、女性12%と圧倒的に男性の割合が高く（一般職員では女性が若干多い）、この背景には、体格的な強さが必要な現場での制圧・逮捕といった業務の特殊性があります。しかし、女性警察官は特に女性被害者への心のケアや対応に不可欠であり、現在、徐々にその数を増やしているところです。人事配置においては、性別に関係なく個々人の能力に応じた適材適所の人事を徹底しています。

育休取得の障壁と対策

家庭生活の充実が組織全体の利益になると考え、男性職員が仕事と家庭生活を両立できるよう育休の推進に注力しています。具体的には、職員向けの研修会の開催、育児休業取得者の業務をカバーする職員への助成制度、また育児休業取得に関するアンケート調査などを実施しました。アンケート調査の結果、男性職員が育休取得を躊躇する最大の理由として、「休むことで業務に支障をきたし、職場に迷惑をかける不安」が約3割弱を占めました。また、必要な対策として「代替職員の人員確保」が強く求められていました。

この課題に対応するため、昨年の春から「育児休業等支援要員派遣制度」（県民の行政サービスに直結する警察署の職員が育休取得で不在となる際に、警察本部から職員を派遣し業務を代行する制度）を新たに設け、運用しています。

取得率の飛躍的向上と効果

制度の導入により、「代わりの人が来てくれるから休みやすくなった」という声が多く聞かれ、組織全体として育休取得を後押しする雰囲気が醸成されました。結果として、男性職員の育休取得率は急上昇し、制度開始後の昨年は96%に達し、「育休を取って当たり前」という意識が浸透しつつあります。

今後の課題

現在の最大の課題は、育休の取得期間の長期化です。取得期間が2週間から1か月の職員が大半であるため、今後はいかに育休期間を長く延ばし、子どもと真剣に向き合う時間を確保していくかを課題として取り組んでいきたいと考えています。

活動発表③「ジェンダーギャップ解消のために組織で何ができるのか」　西岡 徳行

運送事業者における会社組織の中で性別を問わず働きやすい環境を作る事例について、報告します 。

多様な働き方を支える環境づくり

株式会社ハンナは1980年設立の運送事業者で、従業員は約200名、保有車両は147台に上ります。また運送会社としては珍しく、社員の約3割弱が女性です。女性活躍推進の基盤として、当社は24時間365日の体制で3つのコア事業（共同配送、定温配送、CVS配送）を運営しており、社員が「夜間に働きたい」「昼間に働きたい」など、多様な働き方をセレクトできる環境を提供しています 。特に共同配送事業は、社員や車両が集約されている特徴を活かし、子どもの急な発熱などによる突然の休みでも業務をカバーしやすく、社員が安心して復帰できるような環境づくりを行っています。このような取り組みを発信しているチャンネルとして、女性社員の女性目線でTikTokやInstagramを運営したところ、反響が大きく採用にもつながっています。

女性活躍の推進と人財教育

また、女性ドライバーを指す従来の「トラガール」という言葉を避け、女性軽視の印象を防ぐため、「HLA（Happiness Life Angel）」という独自の名称を商標登録し、女性も安心して物流関連の業務に参入し、性別に関係なく活躍できる環境をめざしています 。教育面では「なりたい自分になるために」をテーマに、アカデミーを開設し、５つのコンセプトを軸に「学びは栄養素」として自己成長や将来の可能性を見つける機会を提供しています 。

結び

社員教育に関わるなかで、男性、女性共に笑顔で楽しく働こうとする思いに寄り添って、挑戦できる環境の整備や後押しに取り組むことが、働く人のモチベーション向上につながると実感し、全力で事業を推進しています。

活動発表④「子育て×仕事の両立問題から考えるこれからの生き方・働き方」　岩城 はるみ

子育てとジェンダーの視点から、子育てと仕事の両立を「女性の問題」から「社会の問題」へと捉え直し、男性の家庭進出を社会全体で支援していくことの重要性について報告します。

「女性活躍」への問題提起

私は高校教員を経て、第2子出産を機に退職し、子育て支援事業を立ち上げました 。当初は「子育て支援＝母親支援」という視点で支援していましたが、活動を通じて「なぜ子育ての問題はいつも女性

の問題として語られるのか」という違和感を抱くようになりました 。待機児童問題で仕事を辞める選択を迫られるのも、子育てしやすい職場というプロモーションの対象も、「子持ち様」と揶揄されるのも、そのほとんどが母親である現状から、子育てと仕事の両立が母親の役割だと見なされていることがわかります。国や企業が「女性活躍」を推進する一方で、女性はすでに家事・育児や地域活動といった無償労働の領域で長く活躍してきました 。この無償労働を無視して有償労働の場での活躍を要請することは、結局、女性に二重の活躍を強いることになり、負担を増大させてしまいます。

「男性の家庭進出」の必要性

この問題を解決するためには、女性の社会進出（賃金労働社会への進出）と、男性の家庭進出を両輪で進めていくことが不可欠です。

（1）「取るだけ育休」の課題

現在、国や企業による男性育児休業の取得促進の取り組みは進み、実際に取得率も上昇していますが、単に取得を促すだけでは男性が主体的に子育てを担うことには繋がりません 。育休を取得しても実際には子育てを担わない「取るだけ育休」や、何をすべきかわからない、あるいは頑張ろうとしてもうまくいかないというケースもあり、近年では男性の育児うつも問題となっています。

また、男性が得る子育てに関する情報は「妻」経由が最多であるというデータもあり、妻が情報を収集・学習し、夫に教え、子育てを促すという、妻側の二重のケア負担が生じています。

（2）社会による男性子育て支援

このような状況を鑑みると、家庭内での協力や分担といった文脈のみで男性の子育てを促すことには無理が生じます。そのため、男性の子育て支援は社会で担っていく必要があると提言します。その実践として、2022年にお父さんの集い場「plat」をスタートさせ、父親向けの講座や交流会、イベントなどを実施しています。

結びと提言

「plat」への参加を通じ、父親特有の悩み共有や、先輩の話を機に育休を取得するなどの動きが起きています。特に参加された年長者の方から「女性だけでなく、男性こそ早く帰らせるべきだ。自社を変えていく」と連絡をいただいたことは、活動の大きな意義を感じた瞬間でした。女性を早く帰し、男性を稼がせるという善意に見える行動の根底には、実は無意識のバイアスや偏見があります。男性の子育てする権利や家庭での居場所がもっと尊重されるべきです。民間団体として奈良県の皆様と一緒に社会を変えていきたいと考えています。

Ⅲ．クロストーク

1．活動を通じた職場の変化

小安　短い時間でしたが、パネリストの皆様の素晴らしい取り組みをお伺いしました。本分科会のテーマとして男性も女性も誰もが生きやすい社会にするということをお伝えする中で、特に今回は「男性の育児」がひとつの論点になりましたが、男性の育休を推進する中でどのような変化を実感されましたか。

須﨑　男性医師の育休は今でも快く思われていない場面もあり、また男性医師自身にも子どもの育児

に参画するという「生活者の視点」が欠けていたところがありました。しかし、医師が「生活者の視点」を持つことは、患者のニーズに合ったより良い医療の提供に不可欠です。また、男性が育児の話をすることで、女性医師とも相談し合える環境が生まれ、連帯意識が高まったと感じています。

澄川　男性の育休取得を当然とするために、幹部や上層部に対して家庭の充実が業務に還元されることを説得し、パタニティ・ハラスメント（パタハラ）防止の啓発も含めた意識改革を行いました。男性の育休取得が増え、男性が家事育児の大変さを理解することで継続的な家庭への参画効果も期待され、女性職員も含め職場全体の雰囲気も変わってきているという声を聞いています。

西岡　女性社長自ら男性社員に育休を促し、役職者が「ファーストペンギン」として取得することで、現場が育休を取りやすい環境を作りました。夫婦共同で家事育児を担うべきだという認識が広まり、会議の中でも、育休の制度をより充実させようという話も出てくるようになり非常に価値のある制度であると考えています。

岩城　民間でも男性育休の取得率が上がっており、平日の日中に子育てをするお父さんが増えてくるので、そういった方々への支援もしっかり手厚くしていかなければいけないと思っています。

2．今後の課題と取り組み

小安　一緒に解決していくきっかけとして、現在残っている課題と今後取り組んでいきたいこと、皆で取り組めること等を教えてください。

須﨑　女性の上位職、特に教授や准教授を増やすことが現在直面している課題です 。そのためには女性も実力をつけ、職場の環境も整えていかないといけません。また、日本は女性のチャレンジへの応援が弱く、逆に男性には過度に期待する傾向があるように思います。決めつけをなくし、幼い頃から家庭や学校で女子のチャレンジを応援していってほしいです 。

澄川　女性警察官や女性管理職の数をさらに増やしていくことが課題です。また、古い施設（警察署や交番）における女性用トイレや女性の仮眠室の整備といった、物理的な環境改善も今後必要だと考えています。

西岡　女性管理職を増やすために、在宅ワークができる環境整備など、ライフサイクルが変わっていく中でも女性が管理職をめざせる仕組み作りが課題です。管理職になりたいという希望者を多く作っていきたいです。

岩城　私の方からは課題感のあるものを3点お話しします。 1点目は、男性育休の取得率について。現在取得率があまり伸びていない中小企業においても育休を取得できる方法を探し、男性育休の取得を広めることが重要です。 2点目は、女性のキャリアについて。女性が妊娠・出産や子育てと仕事の継続について、前向きにパートナーと話し合いながら決めていただきたいです。 3点目は、「ケアの社会化」について。家事育児を社会でもっと担っていけるように活動に力を入れていきたいです。

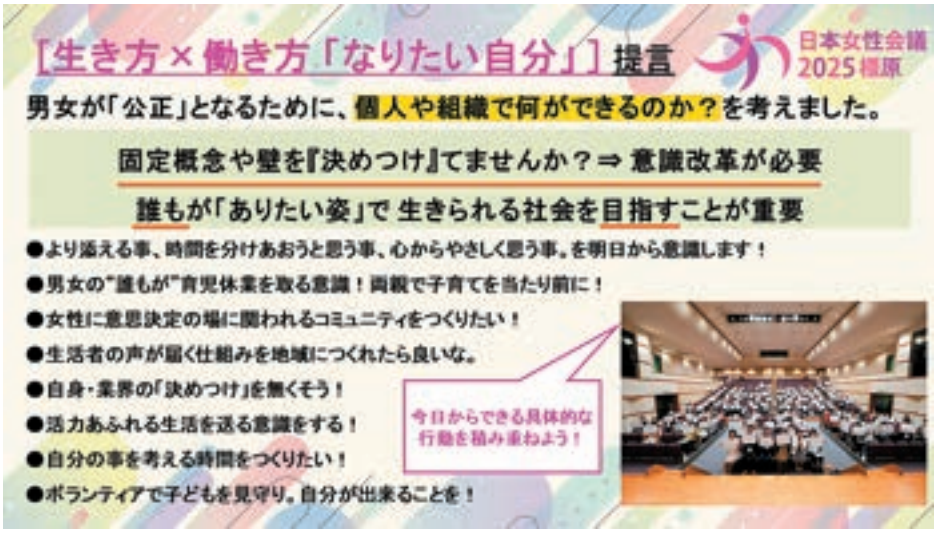
小安　共働き、共子育てに加え、共介護も含めたケアの社会化は大事な課題だと思います。様々な課題はありますが、未来の世代がなりたい自分になれるよう、自分ができることをやっていきたいと思っているところです。

3．明日からできる一歩

小安　本セッションの締めとして、パネリストの皆さん、そして会場の皆さんも、今日をきっかけに各々を取り巻く環境の中で「なりたい自分になるために、明日からチャレンジしてみよう」ということをお手元の紙にご記入ください。

小安　皆様、「決めつけをなくす」や「子育てを当たり前にする」など、多くのアクションを書いてくださいました。日本の始まりの場で皆様と対話できたことを嬉しく思います。今日やってみたいと思ったことを明日から実践し、日本をもっと生きやすく働きやすい国にしていきましょう。

分科会３提言



分科会 4　家族

日時　10月３日（金）12:30～14:30
会場　奈良県社会福祉総合センター　大会議室

笑って考える家族のカタチ
～男の家事が社会を救う ジャンボ宝くじを必ず当てる方法？！～

登壇者

講師：瀬地山 角（東京大学大学院　教授　ジェンダー論）

【基調講演】

瀬地山 角

まず高齢社会についてのお話をします。

労働力が減っていく社会で、今後労働力として追加導入が可能な選択肢は実は三つしかありません。日本の人口はあと25年で1億を切ります。増やせる余地があるとしたら、高齢者と女性と外国人しかありません。こんなときに日本人ファーストというような主張していたら、国自体、社会自体がダメになります。

高齢者の定義を65歳以上から70歳以上に変えてしまえば、20数年間高齢化が進まないんです。これは実はかなりきついことを言っていて、年金受給の標準年齢を70にしようという話です。私より年下の50代以下の皆さんは70代にならないと貰えないようにする法案に賛成しなければなりません。皆さんが払う保険料が高くなりすぎるからです。60代が自活する社会をどのように作っていくかが、今後日本社会にとって非常に重要な問題になっていくはずです。

それと皆さん自分の孫の面倒を見るから喧嘩になるんです。よその子どもの面倒見てお金もらってください。それで孫に何か買ってあげたらいいんです。そのように社会循環させていかないと60代で何とか自分で食いつなぐ社会ができない。日本社会は年金制度のできる前から細々と働くっていうことに対して肯定的なイメージを持ってる社会です。だから、高齢者が働くことについて特に抵抗を持たないんです。

去年の人口は、日本人が90万人減り、外国人が35万人増えたために55万人の減少にとどまっています。外国人を真剣に包摂するようにしていかない限り、コンビニも介護も工場も回りません。

ここから先は、色々な家族の話をしていきます。

まずは離婚です。この30年間の離婚件数は婚姻件数の3割を超えていて、大体31%です。これは去年の大谷翔平の打率と同じです。今時、結婚するっていうのは大谷翔平相手にマウンドに上がるピッチャーみたいに恐ろしいことなんです。それぐらい離婚はよく起きるものと言えます。男性の4人に1人はそもそも結婚しない。結婚した3人のうちの1人が離婚する。離婚が人生によくある不幸な出来事の一つになっているんです。むしろそれを前提にして、生活設計しなければなりません。女性の場合、自分に経

済力があるからちゃんと独立ができて「こんな人はいらない」で済むと考える人がいるから離婚が増えるのです。看護師さんたちの離婚が多いのは、日本中どこ行っても一定の収入が得られる経済力が背景にあるからです。ですので離婚が多い社会は、離婚すらできない社会よりはマシです。ただ、子どもにとって親の離婚は天災以外の何物でもありません。私達は学校で離婚について全く習いません。家庭科でリボ払いの説明までしてるのに、なぜ離婚の話をしないのでしょうか。「養育費いらないから別れて」なんて言っては駄目なんです。養育費は子どもの権利ですから、親が勝手に放棄してはいけません。大学の講義でこれを話すと、夏休みに父親と交渉しますと言う学生が必ず出てきます。

養育費算定表という裁判所が決めた基準があり、相手との収入差があると高額の養育費が出ます。それを公正証書という書類にしておけば、養育費の支払いが滞っても、裁判所が強制執行をかけてくれます。公正証書は作成に数万円かかりますが、最初に作っておけば後の取立てコストはゼロになります。こういった知識を常識として学校で教えないといけない。一番大変な思いをするのは、離婚によって貧困に陥ったひとり親家庭の子どもたちなんです。

次に、選択的夫婦別姓です。国会議員の半分が女性だったらとっくの昔に実現してるはずです。夫婦同姓を強制する制度を日本の伝統などと勘違いする人がいますが、実は明治時代に西洋をまねて導入したものです。中国や朝鮮半島は原則別姓です。旧姓使用を進めるといいますが、例えばパスポートのICチップには名前は一つしか入りません。海外からのインビテーションが通称名で来ると、ビザを取ろうとした際に問題になったりするのです。

瀬地山という苗字の人間は日本に21人しかいません。私は絶対変えたくない。ですから相手には絶対変えろとは言えません。そういうアイデンティティの問題もきちんと考えてほしい。京（みやこ）さんという女子学生が「北さん、南さん、東（ひがし・あずま）さんとの結婚は無理です」と訴えていました。笑い話ではすまないんです。一方国際結婚は日本の民法でもなんと原則別姓です。あんなに家族の一体性が、といっているのに、国際結婚には一体性はないんでしょうか。

日本の国籍法は血統主義なので、子どもは親の国籍を受け継ぎます。アメリカは出生地主義です。私の子どもたちは日本人が２人、韓国人が２人、アメリカ人が１人います。上の子は日米韓の三重、下が日韓の二重国籍です。彼女ら・彼らは20歳になって選択するときに、日本国籍を選択した場合には外国籍の放棄に努めなければならないというのが現行法の規定です。努力すればいいだけで、実際に督促が来た例もありません。

1984年に父母両系主義になり、母親が日本人のケースでも日本国籍を取れるようになりました。これは女性差別撤廃条約を批准するために変更になった規定です。日本と韓国のように両側が血統主義の場合には自動的に二重国籍が生まれ、それを強制的に解消させるシステムは日本では作動していません。実質的に不可能ですし、それを一つに絞るという義務はないんです。そもそもひとりの人間がひとつの国籍だけをもつという前提自体が、国境を越えた人の移動が増えている時代にそぐわないのです。一方で問題は、日本で生まれた外国人同士の子どもです。彼らは日本国籍を持たず、外国人登録をしていないケースだと小学校の案内が来ない可能性があります。

次に同性婚。同性婚とパートナーシップの一番の違いは遺産の問題です。条例は法律の下位規範な

ので、同性婚にしないと、民法の規定が優先され、例えば子どもがいなかったらパートナーではなく、死んだ人の親やきょうだいへと全部財産がいくんです。

同性愛者であるかどうかは外から見てもわかりません。日本は在日の問題と同性愛の問題が同じ構造になります。つまりカミングアウトが同じ構造を持つ。「私実は在日で…」と言われたとき、皆さんは善意で、「大丈夫そんなの関係ないから」と言ってしまいませんか。これは相手のアイデンティティを無視する恐ろしい発言になりかねません。私は、「みんな違ってみんないい」という言葉は、使ってはいけないと思っています。当事者の抱える微妙な差異を無理解なまま塗りつぶすような言葉だからです。

同性婚のアジアの最先進国は台湾です。台湾の同性婚は裁判所で認めなければならないという判決が出て、後から政治が追いかけたのですが、国民投票の結果、民法への組み込みは反対派の方が勝ってしまったんです。特別法を作る形で同性婚が認められました。一方で注目したいのは、その国民投票の最中に作られたのが金蘭という醤油メーカーのレズビアンの家族をテーマにしたコマーシャルでした。たかだか醤油なのに、そして、不買運動が簡単にできてしまうのに、こういう発信ができることはすごいことだと思います。

私は配偶者控除や、年金の第3号被保険者制度等は廃止すべきだという立場をとっています。高度成長期型のシステムを維持しておくこと自体に意味がない。主婦を保護するのではなく、そのお金は全部子どもに集中するように、親がどうであるかとは関係なく、子どもにちゃんとお金が行くシステムにしないといけない。働く能力のある女性が働いていないことに対して、わざわざ税金を返す必要はないと考えます。主婦が悪いといいたいのではなく、制度設計がおかしいんです。

地域的な分布を見ると、夫の稼ぎが少なく妻の稼ぎが家計に組み込まれている共働きの多い地域（左側）と、夫の稼ぎが多く妻の学歴が高い専業主婦の多い地域（右側）があります。右側には奈良、大阪、兵庫、京都、首都圏が入っています。どうして山形、福井、島根等の貧しい共働き世帯から金をとって、奈良、大阪、神奈川の豊かな専業主婦世帯に向かって税金をわざわざ還付するのか。これはつまり、貧しい方から豊かな方にお金を移転してるんです。

ちなみに、女性が働いていないところほど、女性議員の比率が高いんです。女性が働く県ほど、女性議員は少なくなります。奈良は女性が働かず、女性議員も少ないという珍しい例です。

さらに夫の年収を横軸に、専業主婦の働いている割合を縦軸にしてグラフにすると、豊かな世帯ほど働く割合が低くなります。なので統計的には明らかに貧しい世帯からとりあげて豊かな世帯に還付しています。

ただ問題は主婦vs.働く女性ではなく、男性の家事育児時間が少なすぎることです。共働き世帯で男性1時間対女性5時間。これは社会的に問題にすべき水準だと思っています。

国の出生動向基本調査でみると、独身男性が結婚相手に求める条件は、人柄を除くと、トップが家事育児の能力、2番目が仕事への理解、3番目が容姿です。女性が男性に求める条件も、人柄を除くと、なんとトップは家事育児の能力。 2番目が自分の仕事への理解で、 3番目にようやく経済力なんです。男の子は受験勉強してる場合じゃないんです。勉強より夕食を作るのをちゃんと教えてください。その能力を持っている方が絶対生存確率は上がります。

女性は今、専業主婦になるだろうと思っている人がわずか3.6%しかいません。男性側も（専業主婦に）なって欲しいと思ってるのは6.8%しかいない。女性は働こうと考えているので、相手に家事育児の能力を求めるのは合理的ですが、男性は専業主婦になって欲しくないと考えているのに、相手に家事育児の能力を求めています。これでは女性に対し、働きながら全ての家事をやれというのと同じです。無理なんです。男性の要求には無理があり、50歳時点未婚率（生涯未婚率）は男性の方が格段に上がっ

ており25年データで3割を超えるはずです。

2012年の味の素のCM「日本のお母さん」は母親の食事作りを極端に強調するものでした。これを見て女性は応援されたと思うんでしょうか？ 味の素に抗議したところ、「父親が子どもの着替えを手伝う場面なども制作しましたが、母親が主人公のため父親を前面に出す演出にはなっておりません」と回答がありました。父親が家事育児を「手伝う」などと考えていることをもって固定的性別役割分業というのです。こんな回答を堂々と返してくる会社の感覚が理解できません。家事は手伝うものではなく、共有して分担するものです。格好の題材だと思ったのでネット記事にしてあります。「瀬地山　味の素」で検索してみてください。さらにそのCMでは「あなたはあなたの食べたものでできている」というので、私はこの案件以来、味の素の商品は一切買わない「一人ボイコット」を楽しんでいます。

共働き男性の家事の最低水準は、手間をかけなくてもいいから夕食を平日に2～3回分担することであるはずです。これができないと妻は働けません。

少子化という現象を説明するために、環境問題の例えを使います。植林をしない林業者と植林をする林業者が競争すると、植林をしない林業者が勝ち、最終的に日本中が禿山にされ、30年後に大水害という形でツケを一気に払わされます。環境に優しくて値段の安い商品というのは存在しないんです。

植林を子育てと置き換えます。子育てのコストが、女性労働者の方の上にのみ加算されているように、企業から見えている状態なんです。企業は男性の労働力を購入することによって、子育てのコストを回避できてしまう。結果として、子育てをしない人ばかりが会社に集まるので子育てのできない会社になり、最終的に子育てのできない社会が出来上がるんです。これが、少子化という現象です。根本的な原因は、子育てをしない男性ばかりが働いているから、それができるような働き方になっていないことです。だから、ワークライフバランスは男性の問題でなくてはならず、産後パパ育休をせめて皆が取るようにしていかなくてはなりません。

私はイクメンという言葉が大嫌いです。自分の子どもの面倒を見ているだけですよ。イクメンという用語は、自分の子どもの育児にすら関わらない父親がいる社会でしか生まれません。日本の異常さをよく示している言葉だなと感じます。

お父さんは育休を取ることをためらわないでほしい。次の人が取りやすくするために、取らなきゃいけないんです。社員が育休を取得すると企業は一切お金を払わず、手当金は全部雇用保険から出ます。だから育休を取ると現場が忙しくなる、というのは本当はおかしいんです。取った人の人件費が浮いているんですから、その使い道を考えてください。

父親だけが働く一頭馬車体制は、このご時世、男女の平等云々以前に危険です。馬は3分の1の確率でいなくなるし、失業したら終わりです。共働きじゃないとリスクが高すぎる。

女子学生の皆さんはみんな少なく見積もって、大体2億円のジャンボ宝くじの当たりくじを持っています。ところが統計的には約半分の人が、それを途中でドブに捨てています。皆さんのパートナー（男性）が捨てさせているんです。仮に、最初の子どもが生まれた後も正社員で働いたら、その女性はそのあとの約30年で大体2億は稼ぎます。それが非正規になってしまうので、億単位のお金が消えるんです。女性の正社員での就労というのは、家計に異次元の収入をもたらします。

夫の家事を時給で計算してみましょう。女性がフルタイムで働いたときに必要な男性の家事量は平均すると年間約1,000時間です。女性の年収を1000で割った数値が、その男性の家事の時給と言えます。女性が400万稼いでいる場合、時給4,000円です。男性の家事の時給は男性自身の残業代の時給より必ず高いんです。正規の共働きの方が絶対に得になります。年金も専業主婦だと6～7万しか出ません。年収500万で2人が働いたほうが老後も安心です。

もう正社員をめざすのが難しい、あるいはうちの夫はなにもしない、という方へのアドバイスとしては、パートナーにこれは家事の分担ではなく、避難訓練だと伝えてください。まず土日の昼ご飯をお父ちゃんに任せます。平日の朝ご飯は、毎日同じものを作ってよくて、所要時間ほぼ10分。これも夫の担当に。妻だって寝こんだり入院したりします。そのときに料理ができないと夫自身が大変なことになります。だから避難訓練なんです。ゴミ出しは、出来上がったゴミを集積所に持っていくだけだったら家事ではありません。私は「ゴミとの散歩」と呼んでいます。

男性差別の話もしておきましょう。中高年の男性の自殺が圧倒的に多いんです。男女比でいうと2対1。大黒柱が屋根の重みに耐えかねて、死んでいってるんです。

そして最近、「黙って俺について来い」と言うタイプの男性がいなくなりました。女性だって自分の意見を聞いて欲しいと思うようになったんです。当然です。ところがその優しくなった男性を指して女性が、「でもいざっていうときは私を引っ張ってくれる頼りがいがある人じゃないと」と言う。優しくて頼りがいのある人というのが、人気があるそうですが、「意見を聞け」と「聞かずに引っ張れ」というのでは、同じ項目について逆のことを求めてることになります。いつもやさしくて時々ぐいぐい引っ張ってくれる。こんな都合のいいのはペットの犬だけです。女性に残されている選択肢は、その「頼りない」彼と一緒に悩んで結論を出すことであって、女性にも責任から逃れないで欲しいと思います。大黒柱の時代は終わったんです。

ジェンダーギャップ指数をみると、高等教育の順位では148カ国中112位です。教育には高等教育の場で強烈な差別があるんです。例えば、愛知県の県立高校の合格実績の表を見ると、「女の子は浪人するな、女の子は親元から通え」という二つの圧力がかかっていることが読み取れます。女子高校生は第1志望を受けさせてもらえていないんです。

男女共同参画という言葉は普及しているとは言いがたい状況ですが、基本法の前半に「性別に関わりなく」という文言が出てきます。これは異質平等論（男と女は違うけど平等）という考え方を明確に否定してる箇所なんです。個人差は常に性差を超えます。まともな学者は「男性脳、女性脳」なんて言いません。脳は性別による違いより個人差の方がはるかに大きいので。日本社会の思い込みが作り出したものを変えていくことができるはずです。それを性別からの自由と呼ぶのです。

【質疑応答】

（色字はLiveQからの質問、感想）

司会　LiveQ（質問フォーム）を使って、皆さんからの質問や感想についてお答えいただきます。

「残業が多いから夫が夕食を作ることが多いです」

瀬地山　当たり前のことですが、それでいいんです。これはちゃんとジャンボ宝くじの現金化が進んでいるっていう状態だと考えてください。

「主人というのはやめませんか？」

瀬地山　本当そうだと思います。私は友人が言ったときには、「お前いつから飼われてる犬になってん」って言うようにしてるんですけど、抵抗があります。パートナーと呼びます。

「日本は子育て等が難しいが、他国と比較して国のサポート等にどのような差があるのか?」

瀬地山　他国と比較すると日本の政策的なサポートは非常によくできています。育休の制度と保育所だけに関して言えば一番充実している。難しいのは職場の理解がないとか、男性自身がわかっていない等、制度を使う側の問題だと思っています。

「見た目だけの育休を取ることで会社も育休の実績があるという形になっています。」

瀬地山　その数日単位の育休は、休んでも邪魔になってるだけです。(家庭で) 戦力になるには、最低限月単位で (育休が) 必要なんです。無いよりはマシなので、みんなが休むシステムにしていくこと自体には意味があるとは思っていますが。

「講義を聞いても「女性は何をどうしたらいいですか?」という男性社会への不満が残るだけ。」

瀬地山　パートナーと話をしてください。次は発信するんです。物がわかって、怒りを持ったのなら、それをちゃんと発信し、仲間を増やす作業をしていくんです。それが社会運動です。黙ってても社会は変わりません。戦わないと社会は変わらないので。

「母子家庭で、家事をしない男性と同等の仕事をしようと努め、眠る時間も削っているが、仕事に向いていないと言われるのが悔しい。」

瀬地山　まず養育費算定表で検索をして調べてみてください。相当な額の養育費が出るはずです。長丁場ですから、早く公正証書を作るなり、何か手を打って考えてください。一番危険なのは、睡眠時間を削ってご自身が倒れることです。仕事の評価以前の問題です。まずは養育費について弁護士さんか法テラスなどで聞いてみてください。例えば明石市では市が (養育費を) 立て替えて取り立てまでやっています。

　職場の状況がわからないので、なんとも申し上げられないのですが、女性をひとくくりにして二流市民扱いしている会社だと職場を変える必要があるのかもしれません。子持ちの女性の上司がいる会社かどうかがチェックポイントです。

「配偶者控除をなくすか変えるかしてほしい。」

瀬地山　何度か政府もその方針を打ち出していますが、政治家が動けないのは、専業主婦世帯の票が減るからでしょう。有権者の側が変わらない限り、これは変わらないと思います。有権者がアホやとしか思えません。

「職種が異なり残業の多い妻の仕事への理解が低い夫に対し、これを改善していくためにはどのように相手に理解を求めていけばよいか…」

瀬地山　まずは話し合いの問題です。徹底的に話し合うしかないです。それがダメならより強力な手段です。ストライキ、サボタージュ、別居などです。波風立てないと、物事は変わりません。

「男性に育休取得してもらっても、世話してあげなければならない人が増えたという話を聞いたことがある。」

瀬地山　邪魔になる育休ですね。取得が一、二週間だとそうなります。日本の制度は、男性と女性の交代で取った方がもらえるお金は大きくなるようにちゃんとできていて、政策はよくできています。月単位で取らないと意味がありません。逆にいうとはじめの頃に男性が月単位でとって家事スキ

ルを上げておくと、あとあと貴重な戦力になります。

司会　今、子育て中の親は男の子を育てる時、将来結婚したら家事も育児もできる男性に育てあげ、必ずジャンボ宝くじを当ててもらいましょう。そしてシニア世代は、家事育児を積極的にする息子には温かい気持ちで見守っていきたいですね。

父親の育休については、取ってずっと家にいてくれなくてもいいから、毎日の仕事を終えて5時頃には帰宅しているような働き方を求めている母親が多いです。

瀬地山　育休の話で言うと、やっぱり出産に立ち会うということは重要です。大谷翔平だって休むんですよ。それぐらい重要なことなんです。次は保育所のお迎えからです。送りだけじゃなくて、週に1日でもいいので、ちゃんとお父ちゃんのお迎えの日も作ってくれと。一日しか無理なら水曜にしてください。水曜にすると、月火は残業しても、水曜1回定時で帰るわけです。木金働いて土日来るので、大きな体調の崩れがなくなります。

最後に、私達ができることとして、SNSとかも含めて主張はしやすくなっているわけですから、そうやって発信をしましょう。発信は徒党を組まないと意味がありません。ちゃんと徒党を組んで、声にしてあげていくから物事が変わっていくわけです。夫婦関係においてもそうで、声を上げないと現状は変わりません。自分が「こうだ」と思うときは、ちゃんと声を上げてほしい。また、少なくともそうやって声を上げている人間に対して、きちんと援護射撃をしてほしいと思います。

【分科会４提言】

＊必ず当たるジャンボ宝くじをドブに捨てないために、妻が正社員で定年まで働き続けられるように、男性が家事・育児を分担しよう。そうすれば約2～3億円の収入を得られる試算。

＊男性の家事・育児に費やす時間が少ないのは社会課題。男性が子育てに関われるような働き方をしよう。

＊社会制度、企業風潮、家族のジェンダーバイアスに疑問を感じたら波風立つことを恐れずに、声をあげて変えていこう。また、そういう人の応援をしよう。

分科会 5　子ども

日時　10月3日（金）12:30～14:55
会場　奈良県社会福祉総合センター　研修室Ｂ・Ｃ

子どもの「自分らしさ」と「生きにくさ」をめぐって

登壇者

司会／問題提起：林 郷子（奈良大学 社会学部心理学科 教授）
発表者：狗巻 修司（奈良女子大学 文学部 准教授）
飯田 順三（奈良県立医科大学　名誉教授、
医療法人南風会 万葉クリニック子どものこころセンター絆 センター長）
奥山 志帆（郡山北小学校・郡山中学校分教室「ASU」主任）

○問題提起

林 郷子

本分科会での重要な課題は、生きにくさを抱える子どもたちをどのように支援していくかです。生きにくさの要因は多岐にわたりますが、今回は特に年々増加している発達障がいと不登校の二点に焦点を当てました。発達障がいは10人に１人はいるという報告があり、不登校に関しても本年度は34万人に達し、中学生では15人に１人という状況です。

このような状況に対し、課題への取り組みや理解は広がりつつあります。発達障がいについては、合理的配慮の義務化が始まり法律的な整備が進んでおり、支援機関も増えてきました。不登校に関しても、単に学校復帰を促すだけでなく、多様な学び方の保障という視点が重要視されています。例えば、現在、教育支援センターや学びの多様化学校など、さまざまな形の居場所や学びの場が提供されるようになってきています。不十分な点はまだあるものの、課題への取り組みは広がりを見せています。

今回のテーマに「自分らしさ」をセットとした背景として、相談に来られたお母様の言葉がきっかけにあります。生きにくさと自分らしさは表裏一体の関係にあるという問題意識を提示し、講演者や参加者とともに、子どもたちの視点に立ち、真の支援とは何かを考えていきたいと思います。

○発表

「乳幼児の発達障がいと支援について」

狗巻 修司

１．発達とは何か

発達障がいを理解するためには「発達とは何か」という根源的な問いを理解する必要があります。発達とは、単に成長することではなく、個人を取り巻く環境との相互作用を通して、その個人が質的に変化していくプロセスです。この発達というプロセスは、主に以下の３つの側面から構成され

ています。

①分化（専門化）：以前は一つの機能として働いていたものが、より細分化され、特化した機能を持つようになること（例：手を握る動作から、つまむ動作へ）。

②統合（複雑化）：分化された機能が、互いに協調し、より複雑な機能として働くようになること（例：目と手を協調させて作業を行う）。

③変容（脱中心化）：自分の視点だけでなく、他者の視点を考慮に入れ、状況に応じた行動ができるようになること。

これらのプロセスは、子どもが外界と関わる中で、絶えず環境からのフィードバックを受け取り、自ら変化していくことで進んでいきます。

2．自閉症スペクトラム症（ASD）の特性と支援

ASDの子どもたちは、主にコミュニケーション、対人相互作用、そして限定的・反復的な行動や関心の分野で特性を持ちます。ASDの子どもたちのコミュニケーション研究から、彼らの行動は一見すると「こだわり」として否定的に捉えられがちですが、それは「自分の発達の安定化を図るための手段」として機能している場合があります。

例えば、特定のものを集めるという行動は、彼らにとって世界の複雑さを整理し、自分の発達を安定させるための「足場」となっている可能性があります。支援においては、この「こだわり」を否定するのではなく、その行動が子どもにとってどのような意味を持っているのかを理解し、その意味を尊重しながら、より社会的に適応できる形へ行動を「橋渡し」していくことが重要です。

3．支援の原則：発達の「土台作り」

乳幼児期の発達支援は、すぐに目に見える結果を出すことだけが目的ではありません。この時期の支援は「土台作り」に例えられます。まずは焦らず、子どもが安心して成長できる環境という「土」を耕し、そこに支援という「種」を蒔き、水や栄養を与える。そして、芽が出て花が咲くのを待つという姿勢が、長期的な発達を見据える上で非常に重要です。

早期発見・早期支援は、研究データからもその効果が裏付けられており、もちろん重要ですが、それはあくまでも早期の対応をセットで行う必要があることを意味します。大切なのは、短絡的な成果を求めるのではなく、長期的な視点で子どもの可能性を信じ、成長を支え続ける姿勢です。

「中学生から増える不登校と思春期の神経発達症」

飯田 順三

1．子どもの発達の理解

かつて大人のミニチュアと見なされていた子どもが、独自の存在として認識されるようになったのは比較的最近のことです。

また、人の「心と脳」の関係について、主観的な思いは他者との相互作用、すなわち間主観性が確立されて初めて意味を持つようになります。子どもは、この他者との交わりの中で、言葉や感情の交換を通じて心を形成していくため、人との関わりが心の育ちに不可欠であると言えます。

2．思春期の神経発達症と併存症

思春期・青年期における神経発達症（特に自閉症スペクトラム症：ASDや注意欠陥・多動症：ADHD）は、幼少期とは異なる形で現れます。

- 幼少期：神経発達症自体が主訴となり、病院に来院することがほとんどです。
- 思春期・青年期：自尊感情の低下に伴い、うつ病、不安障害、睡眠障害といった併存症・合併症を主訴として来院するケースが多くなります。診察を進める中で、その基盤に神経発達症が存在したことが判明するという経緯がしばしば見られます。

特に女子の場合、多動などの特性が目立ちにくいため、小学校の頃は見過ごされがちであり、中学校になってから上記のような併存症をきっかけにASDやADHDであることが判明することが多いです。思春期の子どもは、自分が他の子と「ちょっと違う」と感じやすく、特に女子は友人関係の中で裏読み（空気を読むこと）が求められる状況が多く、それができないことへの悩みが深くなりやすいと考えられます。

3．不登校と支援の必要性

不登校は、学校に行けないという状態であり、その背景には様々な要因があります。学校に行けない状態の子どもに対しては「不登校を治すのではなく、不登校を卒業する」という意識が重要です。

不登校からの「卒業」とは、必ずしも学校に戻ることだけを意味しません。多様な学びの場、例えばフリースクールや地域活動など、その子にとって居場所となる活動を見つけ、社会の中でうまくやっていける自信を回復することが、真の支援です。その子が「自分らしさ」を諦めずに、社会の中で自立して生きていく力を育むことが、最終的な目標です。

「郡山北小学校・郡山中学校分教室「ASU」の取り組みについて」

奥山 志帆

1．「ASU」の概要と目的

「ASU」は、文部科学省に認定された「学びの多様化学校」であり、不登校児童生徒のセーフティーネットとなることを目的としています。心理的な理由等から通常の学校生活を送ることが困難になった市内全域の小中学校の児童生徒に対し、個々の実態に応じた段階的かつ丁寧な支援を通して心理的な不安の改善に努め、社会的な自立を支援し、教育の機会を提供することを目的として設置されました。

大和郡山市は、昨年70年目を迎えた歴史ある街であり、市内には11の小学校と５つの中学校があります。「ASU」は市の北部に位置し、市内全域の子どもたちを対象としています。

2.「ASU」における支援の取り組み

「ASU」の建物の中には、「ASU」に入室する前に必ず過ごしてもらうあゆみルームがあります。あゆみルームは、「家から外に出る初めの一歩」「家以外で安心して過ごせる場所」となるよう温かい居場所作りを大切にしている場所で、「ASU」正式生になるための入り口、大切な準備期間を過ごす場です。そして、「ASU」では子どもたちが「自分らしさ」を取り戻し、社会とのつながりを再構築できるよう、多様な支援を展開しながらも次の３つを重要な柱としています。

- 心の居場所づくり：土台となる部分で、子どもたちにとって安心して安全に過ごせる場所であるために、スタッフ一人ひとりが児童生徒としっかりと向き合い、それぞれの人間性や特性、家庭

環境や困りごとなどを常に把握するよう心掛けています。

- 豊かな体験活動：年間計画を立てて、さまざまな体験活動（例：校外学習、救命救急講座、野菜作り、調理実習）を実施しています。何よりも大切にしているのは、これらの体験活動をとおして、自己肯定感や自己有用感、自尊感情を高めること、また他者理解の力を高めることです。ただ活動を楽しむだけではなく、各活動の企画段階で、児童生徒同士のコミュニケーションが図れたり、社会性が身に付いたりするような様々な仕掛けを施しています。
- 進路保障：不登校生徒の場合、授業を受けていない期間が長いこともあり、学校での成績がつかず、高校への進学を望んでも受験できる学校が限定されることが多くあります。「ASU」では市内のほかの学校と同じように評価を行い、通知表に記載します。また、教科の評価評定以外に各教科の文章評価を別紙にて添えることで、数字では表れない子どもたちの努力を目に見える形で評価しています。「ASU」の成績で内申を作成してよいと認められており、ひとりひとりの希望や学力にあった高校、私立高校はもちろん、公立高校の受験ができます。

3．課題と今後の展望

現在、全国的に不登校が増加し続け、社会問題となっています。実際に、学校に足が向かない、あるいは同年代の子どもに会いたくないなど、学校の環境自体が難しいと感じる児童生徒も一定数存在します。文部科学省は学びの多様化学校を全国に300校設置する目標を掲げていますが、学びの多様化学校の運営については、施設面や人員配置といった問題も残されています。

「ASU」は、このような社会から切り離されようとしている子どもたちと一人でも多く出会い、つながっていくことで、不登校児童生徒にとってのセーフティーネットとしての役割を今後も強化していきたいという強い決意が述べられました。多様な居場所の提供を通じて、子どもたちが安心して自己を確立し、社会へ踏み出せるよう、支援を継続していくことが今後の展望です。

○ディスカッション・質疑応答

（参加者からの質問）

先生方個人の考えを教えてください。狗巻先生には発達心理学の観点から私たち一人ひとりへのアドバイスを、飯田先生には増え続ける不登校への独自の意見を、奥山先生には「ASU」の課題を聞かせてください。

狗巻　発達段階というのはあくまで仮説であり、個人差も大きく、発達だけで説明できない要因もたくさんあります。ただ、支援していく中では、発達という観点から人を捉えていく必要性はあると考えています。

飯田　不登校について一番大事なのは、自尊感情を下げず、劣等感を持たせないことです。そのためには、待つことで本人の罪悪感を減らし、周囲が設定する目標の閾値をあまり作らず、本人のストレスにならないレベルまで下げ、それが達成できたときにしっかりと向き合ってあげることが重要だと思います。

奥山　「ASU」の課題は施設面です。新しくきれいですが、小・中の全学年が同じフロアにいるため非常に狭いです。パーテーションで区切って授業をしていますが、隣の音が気になり落ち着かない子もいます。もっとゆったりとしたスペースで、各学年が落ち着いて取り組める環境があれば良いと感じています。

（Q&Aフォームからの質問）

保護者に対する心構えについて、気を付けていることなどを教えてください。

奥山　不登校の保護者は、学校に行けないことへの罪悪感や焦りを強く持っておられるので、まずはその気持ちをしっかり聴き、寄り添う姿勢を示すことを一番に考えています。保護者が安定することが、子どもの不登校からの復活の鍵になると思います。

（Q&Aフォームからの質問）

不登校の子どもがゲームに長時間没頭している場合、制限しなくても大丈夫でしょうか。

飯田　理想は本人の自由にさせてあげたいですが、睡眠時間確保のために、何時までならやめられるかを本人と相談して時間をかけながら少しずつ調整することが大事です。一方で、オンライン上の交流も他人との大切な繋がりですので、その部分は十分に評価してあげてもいいかなと思います。

（Q&Aフォームからの質問）

発達障がいを持つお子さんで特に知的障がいと重なる場合、気づかれにくいことがあると思いますが、そういった場合の早期発見、支援に繋げていくための取り組み等はあるのでしょうか。

狗巻　早期発見、支援が大切であるのは研究データでも示されている事実ですが、早くなければいけない、という意味ではありません。保護者が受け入れられない場合、保育園などから直球で伝えると関係が崩れてしまうこともあります。事実を共有しながら理解を深めてもらい、園や学校が「相談しなければならない場所」ではなく、数ある「相談先の選択肢の一つ」として機能することが重要だと考えています。

○分科会５提言

個々を大切にすることと社会とのつながりを育むことは相互に関連し合っていることを確認しました。

個々のペースに寄り添った支援を大切にしていくことをめざします。

分科会 6　リプロダクティブ・ヘルス／ライツ

日時　10月3日（金）15:30～17:30
会場　奈良県橿原文化会館　大ホール

今を生きるあなたに知ってほしい「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」

登壇者

コーディネーター：
島本（しまもと） 太香子（たかこ）（奈良大学 副学長・理事、奈良県子ども子育て推進会議 会長、奈良県医療審議会委員、産婦人科医）

シンポジスト：
木村（きむら） 文則（ふみのり）（奈良県立医科大学産婦人科学講座 教授、奈良県立医科大学附属病院高度生殖医療センター長、国際体外受精学会　理事、日本がん・生殖医療学会　理事）
髙木（たかぎ） 麻衣（まい）（株式会社タカギ 代表取締役社長）

Ⅰ．趣旨説明

「現代女性のリプロダクティブ・ヘルス/ライツ（女性のライフステージを通じた健康支援の立場から）」

島本 太香子

1．分科会の主旨とめざすもの

本分科会では「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ（性と生殖に関する健康と権利）」について、次世代を産むことに関する生物学的基盤と最先端医療を共有し、現代社会で自分らしいライフコースを選択することを学び、男女が互いの生物学的特性を理解・尊重し合い、それぞれの特性をいかしていける社会づくりについて考えることを目的としています。

2．リプロダクティブ・ヘルス/ライツとは

「リプロダクティブ・ヘルス」とは、性と生殖に関する健康＝性と生殖について身体的、精神的、社会的に良好な状況にあること、「リプロダクティブ・ライツ」は、性と生殖に関する健康について、自分の意思が尊重され、自分の身体に関することを自分自身で決められる権利のことを指します。つまり、「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」は結婚する、しない、子どもを産む、産まない、産むとすれば時期、人数、間隔などを選択・決定する権利（自己決定権）で、そのために必要な情報と手段を得ること、避妊、不妊治療、生殖器のがん、性感染症の予防や治療、母子保健、育児支援など幅広い領域に関わる概念です。

3．女性医学と性差医療の視点

医療の現場では、QOL（生活の質）やWell-beingを守るための予防的な「女性医学」が重要視されています 。女性専用外来では、身体の仕組みの違いだけでなく、家族や社会での役割といった背景も考慮した診療が行われます 。また、男女で病気の現れ方や薬の作用が異なる点に着目する「性差医療」の視点も、適切な治療や社会的な健康課題の解決に不可欠です 。

4．現代女性の健康課題とホルモン変動

女性の健康は、一生を通じて女性ホルモン（エストロゲン）の大きな変動に影響を受けます。思春期から閉経期にかけて、月経困難症や更年期障害など、年代ごとに課題が変化します。特に現代女性は、過去の女性に比べて出産回数が減少し、生涯の月経回数が劇的に増加しました。そのため、月経にまつわる症状といかに向き合い、快適に過ごすかが現代的な健康課題となっています。

5．プレコンセプションケア（Preconception Care）と次世代への責任

リプロダクティブ・ヘルス/ライツの中でも、特に近年注目されているのが「プレコンセプションケア」という概念です。プレコンセプションケアとは、若い男女が将来のライフプランを考えながら日々の生活や健康と向き合うことを指します。最近の調査研究で、妊娠中だけでなく、妊娠中あるいは妊娠前の女性の健康状態が、本人の将来の健康だけでなく生まれてくる次世代の健康にも大きく影響することが示されており、満ち足りた自分（Well-being）の実現につながるヘルスケアとして注目されています。

妊娠・出産は男性も共に関わる問題であり、人生100年時代において、すべてのライフステージでいかに健康に過ごすかが、個人のWell-beingと次の世代の未来につながります 。

Ⅱ．講演

「今を生きるあなたに知ってほしい「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」がん患者の未来を作る」

木村 文則

1．がん治療の進歩と子どもの未来

現代のがん治療は目覚ましく進歩しており、小児がん（白血病など）の５年相対生存率は80%を超える時代となりました。かつては不治の病とされたがんを克服できるようになった今、医療の目的は単に命を救うだけでなく、がん経験者が自分に自信を持ち、人間として生きていく力を守ることに広がっています。特に10代から20代の子どもや若年層のがん患者にとって、将来子どもを持てるかどうかという不安は、人生の大きな課題となっています。

2．がん生殖医療のブレイクスルー

がん治療（抗がん薬や放射線）は、卵巣にダメージを与え、不妊症や早発卵巣不全を引き起こす

リスクがあります。そこで重要となるのが、がん患者が命を救われた後に子どもを持てる可能性を残すための医療である、がん・生殖医療です。

1997年、ベルギーのDonnez J博士が世界で初めてがん患者の卵巣組織を凍結保存し、治療後に解凍・移植することで2003年に自然妊娠・出産に成功しました。この出来事は世界に大きな衝撃を与え、現在では同様の方法で200人以上の子どもが誕生しています。

3．日本における妊孕性温存（にんようせいおんぞん）の歩み

日本でも2010 年頃から、白血病治療前に卵子を凍結保存した女性が回復後に出産した事例などが大きく報道されるようになりました。現在では、未受精卵を凍結する「卵子凍結」や、受精した卵を凍結する「胚凍結」、さらには卵巣そのものを一部凍結する「卵巣組織凍結保存」といった手法が広がっています。

4．がん治療が妊孕性に及ぼす影響

がん治療の種類によって卵巣への影響は異なります。特定の抗がん薬は成長中の卵胞だけを攻撃するため、一時的に機能が弱まっても半年から１年程度で回復する場合があります。しかし、直接卵子に悪影響を及ぼすような治療では、卵巣機能が失われてしまうリスクがあります。医療現場では、米国臨床腫瘍学会（ASCO）などのリスク評価基準に基づき、患者一人ひとりの状況に合わせた診療が行われています。

5．妊孕性温存の具体的な手法

- **胚凍結・卵子凍結**：体外受精の技術を用い、約10日間の排卵誘発を行って卵子を取り出します。結婚している場合は「胚（受精卵）」として、未婚の場合は「未受精卵」として凍結します。
- **卵巣組織凍結保存**：手術（主に腹腔鏡）により卵巣の一部を切り取って凍結します。この方法は、治療を急ぐ必要がある場合や、排卵誘発が難しい小児患者などにも適しています。凍結した組織を将来体内に戻すことで、自然妊娠の可能性を残すことができます。

6．経済的格差と助成金制度の設立

かつて外来で受診した19歳の看護学生が費用の問題で治療を断念せざるを得ないという悲壮な場面に直面し、経済的格差によって治療の選択肢が失われる現状に強い危機感を抱きました。そこで、地方自治体への粘り強い交渉を行い、妊孕性温存治療に対する助成金制度を実現させました。この動きは全国へ広がり、令和３年には厚生労働省による国の助成制度として確立されました。

7．奈良県立医科大学の取り組み

奈良県立医科大学では、2024年に「高度生殖医療センター」を設立しました。日本の人口減少が進む中で、持病を持つ方の不妊治療やがん・生殖医療を含む高度な生殖医療を提供し、患者の希望を支える体制を整えています。

8．結びに：患者の「生き方」に寄り添う医療

がん生殖医療の本質は、病気の治療そのものではなく、患者が自らの生き方を選択するリプロダ

クティブ・ヘルス/ライツに基づいた医療です。がん治療は患者の人生を一時的に立ち止まらせてしまいますが、医療者は患者が「どう生きたいか」「何をめざしているのか」という人生の目的を鮮明に理解する必要があります。医療者として大切なのは、中立な立場で客観的な事実や数字を提示し、患者が自らのバックグラウンドに基づいて最適な選択を行えるよう支援することです。個別の状況や価値観に応じ、患者が何を大切に思って生きているのか、何を守ろうとしているのかを深く理解し、医療を提供していきたいと考えています。

Ⅲ．活動報告

「若い世代への取り組み Happpy プロジェクト」

髙木 麻衣

1．企業としての社会貢献活動「Happpy プロジェクト」

株式会社タカギは、橿原市で95年前に創業した女性を中心とした肌着メーカーです。長年にわたり、生地開発や月経中に快適に過ごせるショーツなどの製品を通じて女性の体と向き合ってきました。社員の８割を女性が占める企業として、製品を通じて培ったノウハウを社会に還元したいと考え、2018年に「Happpy（ハッピー）プロジェクト」を発足しました。若い世代へ月経の正しい知識と対処法を伝え、月経とポジティブに向き合えるようサポートする社会貢献活動です。

2．既存の月経教育への課題とプロジェクトの理念

従来の学校教育における月経教育は、男女別々に行われることが多く、動画視聴などの受動的な形式になりがちでした。その結果、内容が記憶に残りにくく、月経を「隠すべきもの」「ネガティブなもの」と捉える傾向が根強く残っています。

プロジェクト名の３つの「P」には、不安や偏見をなくす「Peaceful（ピースフル）」、自分の体を大切にする「Precious（プレシャス）」、月経を正しく理解する「Period（ピリオド）」という願いが込められています。単なる知識の付与ではなく、体験を通じて自分事として捉え、周囲への思いやりを育むプロセスを重視しています。

3．小学校における月経教育の取り組み

プロジェクトの主な活動は、小学校での出前授業です。子どもたちがわかりやすく、かつより深く理解できるよう、月経の原理だけでなく生活に即した内容も交えながら授業を行っています。また、男女ともに学び合う環境づくりを重視し、男女共修形式を基本としつつ、学校の要望に応じて男女別形式にも対応している点が特徴です。

（1）授業の内容

授業は、タカギの社員が講師となって、月経に関する講義パートと子どもたちの興味を引く体験型・実践型の実践パートで構成しています。

- **講義パート：**

月経の仕組み、経血量の変化、月経時期間中の体調の変化、生理用品の種類や使い方など

- **実践パート：**

紙ナプキンの付け外し、吸水実験、グループワーク（例：生理用品にかかるお金のシミュレーション）、クイズなど

（2）教育の成果

授業を受けた近畿大学附属小学校４年生や関屋小学校５年生を対象としたアンケート結果から、以下の高い成果が示されました。

- 78%が授業を「面白かった」と回答し、「面白くなかった」は0%
- 「男女が一緒で良い」「どちらでも良い」と答えた児童は90%以上
- 自由記述では、「生理について知ることができて安心できた」「男は生理がないけど男女関係なく知っておいた方がいいと思う」「女の子が困ってたら助けたい」「お互いわかり合って支え合いたい」といった、男女が共に学ぶことへの肯定的な評価と相互理解に基づいた支え合いの意識を示す声が多数寄せられた

これらの結果から、体験型・実践型プログラムが子どもたちの興味を喚起していること、そして男女が共に学ぶことで、正しい知識の習得に留まらず、助け合い、支え合う意識が生まれていることが明らかであり、「Happpy（ハッピー）プロジェクト」が心の変化を生む活動になっていると考えています。

４．今後の展望とリプロダクティブ・ヘルス/ライツ

子どもたちが自身の体のサインである月経を正しく理解し、自他ともに認め合う環境を作ることは、リプロダクティブ・ヘルス/ライツの観点からも非常に重要です。自分らしく快適に過ごすための「選択肢」を若い世代に提供し続けることで、誰もが健康で前向きに生きられる社会の実現に貢献していきます。

Ⅲ．意見交換

コーディネーターの島本先生、シンポジストの木村先生、髙木社長の３名が、教育者、産婦人科医、企業というそれぞれの立場から、リプロダクティブ・ヘルス/ライツを「いかに若い世代に伝え、社会全体で支えていくか」に焦点を当てて意見交換を行いました。

１．包括的性教育（CSE：Comprehensive Sexuality Education）という視点の提示（島本）

リプロダクティブ・ヘルス/ライツを伝える上で、国際基準である「包括的性教育（CSE）」の考え方が重要です。包括的性教育は、日本で一般的な「性教育＝体や健康の知識」だけでなく「人権とジェンダー平等」「性的同意と安全」「人間関係と感情」「文化・社会メディアとの関係」といった非常に幅広い概念が含まれており、意思決定・共感・自己肯定感をなどライフスキル向上につながるものであると位置づけられています。一方、日本では、教育の内容やタイミングが限定的で画一的であることや性に対する否定感などが課題として挙げられます

２．企業によるリアルな体験型教育の実践と今後の展望（髙木）

「Happpyプロジェクト」では、教育課程とは異なる立場から、月経の仕組みや体の仕組みだけ

でなく、生理痛や経血の漏れなど先輩女性としてのリアルな体験談を伝えること、ショーツやナプキンに触れながら体験型の授業を中心にすることを重視しています。活動を始めた当初は男女共修での実施に戸惑う先生方もいましたが、生徒たちが純粋に受け止める姿に、大人たちにも新たな発見がありました。現在はCSR活動として地域も回数も限定的な実施ですが、今後は大学生などを講師に育成し、回数やエリアを拡大してスケールを大きくしたいと考えています。また、さらなる展開のために専門機関等との外部連携を強めることが課題です。

3．性教育のタブー打破と患者の意思を尊重する医療のスタンス（木村）

性がタブー視され性教育や情報が隠されている現状を打破すべきだと考えています。若い世代に恥ずかしがらず、正しい情報をポジティブかつ正確に伝える姿勢は非常に正しいと考えており、産婦人科医として一緒に連携に協力したいと思います。また病気という理不尽な状況で多くのものを失いかねないない患者さんに対し、治療だけでなく「どう生きたいか」という人生の目的を医師にも相談してほしいと願っています。方法論としての難しさはありますが、個人の努力に留まらず、一人ひとりの意思を丁寧に聞き取るスタンスを業務全体で構築し、組織として取り組んでいくことが重要だと考えています。

Ⅳ．総括：多様性の理解と連携の必要性

島本先生が本分科会について以下のとおり総括しました。

- 今回のシンポジウムは、異なる立場からのリプロダクティブ・ヘルス/ライツへの取り組みの最前線を報告し合い、共通の方向性を見出す試みから計画したものである。
- 木村先生からは、最新の生殖補助医療の活用として、がん患者さんへの未来をつくることが可能となっていること、新たにその技術を活用する患者さんの生き方に対し、医療や支える者の真摯な向き合い方が求められることが報告された。これは、今後、リプロダクティブ・ヘルス/ライツに関わる医療が進展し、それをどのように活用していくかを、社会全体で理解し、判断していく一例となる。
- 髙木社長からは、地域での教育活動の実践の試みについて報告された。学校教育全体の中でこれらの事例が活かされていくためにも、産官学の連携のもとで、包括的な性教育が進むことを願う。

このシンポジウムを通して、立場の違いや価値観の違いがあるからこそ、それぞれに発見があり、学びがあるという認識を共有できました。医学（今回は産婦人科）、企業、地域、家庭、教育機関など、あらゆる異なる立場が、リプロダクティブ・ヘルス/ライツという一つの共通認識のもとで連携し、個別性と多様性に応じた情報交換や取り組みを皆様と共に推進していければと考えています。

分科会６提言

【自分を大切に、他者も大切に】

医療・教育・企業・地域が連携し、教育と医療の両面からリプロダクティブ・ヘルス/ライツに基づくライフコースの自己決定を支援します。

分科会 7　教育とジェンダー

日時　10月3日（金）15:30～17:30
会場　奈良県橿原文化会館　小ホール

奈良で理工系女性人材を育てる

登壇者

司会：安田 恵子（奈良女子大学 ダイバーシティ推進センター特任教授）
講演：久保 博子（奈良女子大学 研究院工学系 教授・工学部長）
顯谷 智也子（奈良工業高等専門学校 准教授、女性エンジニア養成推進センター長）
松岡 由貴（奈良女子大学研究院 自然科学系・准教授、日本女性会議・連携委員）

趣旨説明

安田 恵子

本シンポジウムは「奈良で理工系女性人材を育てる」がテーマですが、はじめに理工系女性人材の育成が急務である日本の現状と課題について説明します。

日本はジェンダーギャップ指数が低迷し（148カ国中118位）、理系女性研究者の割合（17.5%）や高等教育機関の工学分野における女性比率（16%）は、いずれもOECD加盟国中で最下位です。

一方、日本の女子生徒は国際的学力調査（PISA、TIMSS）において、数学や理科の成績が国際平均を大きく上回り、世界トップクラスで、男子生徒との成績差もほとんどありません。

成績は優秀なのに、理工系進路を選ぶ女性が少ないのは日本特有の現象と見られます。数学や物理学が「賢い学問」という思い込みがあり、それが男性的イメージと結びつき、さらに日本では「女の子は知的でない方が良い」等のジェンダー的バイアスがあって、女性の理工系への進路選択を無意識のうちに阻害している可能性があります。

奈良では、たとえば奈良女子大学では全国の国立大学理学部女子卒業生の約１割を輩出して理系女性人材の育成に貢献しています。今回は、奈良での取り組みとして、奈良女子大学工学部、奈良工業高等専門学校の理工系人材育成の取り組み、関西科学塾の理工系女性人材の裾野拡大の取り組みを紹介していただきます。

講演：女性活躍社会をめざす奈良女子大工学部の取り組み

久保 博子

内容

久保博子先生は、2022年に日本初の女子大工学部を設立した背景と教育内容を紹介されました。

奈良女子大学は、女子高等師範学校時代から家政学部（現生活環境学部）を通じて「物づくりの伝統」を継承し、理系女性を多数輩出してきた歴史があります。

日本は、現状でOECD諸国における理系女性の卒業生比率と比較して、18.2%と最低です。日本国内で他学部に進学するものに比べて、工学部進学者は著しく低く、２割を切っています。社会的なイノベーションやSDGs達成のため、多様な視点を持つ女性エンジニアの育成が急務とされています。

同大学の工学部は、大規模大学と競争せず、主体性、実行力、課題解決能力といった、産業界が求める資質を育てることに注力しています。カリキュラムは、専門知識に加え、教養と個性を育むリベラルアーツや、芸術（Art）を加えたSTEAM教育を重視すると共に、グループでのPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）を導入しています。また、学生が自分自身で自分に合ったカリキュラムを柔軟に設計できるようにしており、企業との協働による科目も受講できます。

さらに、ソニーグループやDMG森精機などの企業と連携し、中高生から大学院生までを対象とした「女性エンジニア養成ワークショップ」を主催するなど、理系分野に進む女性の裾野を広げる努力を続けています。

女子大という環境は、ジェンダーギャップを感じることなく、お互いの力を伸ばし合い、学生が自信とリーダーシップを身につけられる場となっています。

講演：女子学生の価値創造を育む教育アプローチ
～奈良高専発「しなやかエンジニア教育プログラム」～

顯谷 智也子

内容

顯谷智也子先生は、日本の女性エンジニアの現状と、それに対応する奈良高専独自の「しなやかエンジニア教育プログラム」について紹介されました。

日本のSTEM（科学、技術、工学、数学）分野における大学進学者のうち、女性の割合は18.5%と低くOECD加盟38カ国中最下位です（１位のポーランドは43%）。また、ITエンジニア全体に

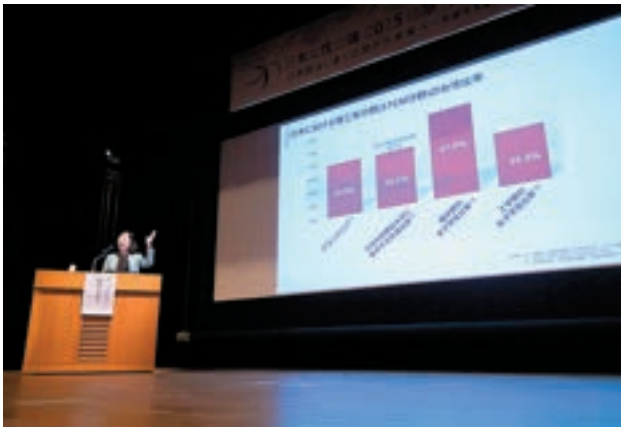
占める女性の割合も18.8%にとどまっています。

一方で、2030年には約78万人のITエンジニアが不足すると予測されており、社会全体で多様な人材の参画が不可欠です。

とりわけ、生活者視点での価値創出や意思決定の質の向上を図るためには、多様な視点を持つ女性エンジニアの育成が急務です。

さらに、社会・産業の変化に伴い、エンジニアに求められる能力も変化しています。従来の技術者像から、創造的思考や柔軟性、異分野との協調性を備え、ゼロから新しい価値を迅速に創出できる「価値創造者」への転換が求められています。

こうした背景のもと、同校が展開する「しなやかエンジニア教育プログラム」は、変化に対応するための新しい教育アプローチです。確かな工学技術に加え、伝統文化や芸術、心理学など工学以外の分野の学びを取り入れ、感性や表現力を育みます。この高専５年間の継続的なプログラムは、多様な環境でリーダーシップを発揮し、新たな価値を創造できるイノベーション人材の育成をめざしています。



講演：大学の研究室で材料加工に挑戦！ ～関西科学塾での取り組み～

松岡 由貴

内容

女子中高生を対象とした理系進路選択支援事業「女子中高生のための関西科学塾」の活動と、松岡由貴先生ご自身の実験講座の内容、そして理系分野におけるジェンダーバイアスに関する考察について紹介されました。

同塾は関西の五つの国立大学が連携し、大学の研究室設備を用いた理工系の実験講座を幅広い分野で提供されています。

松岡先生は、材料開発のプロセス（計量、切る、加熱、混ぜるなど）が料理や家事といった日常の作業と本質的に同じであり、これは家事経験が比較的多い女子にとって材料系に進む際のアドバンテージになり得るという考えを示しました。また、同じ作業であっても仕事であれば男性向き・家庭内であれば女性向きとレッテル付けされており、このような性別による無意識の決めつけを払拭すべきだと訴えられました。

科学塾への参加希望者は年々増加しており、今年度の夏休み期間に実施された「大型装置を見て

みよう」のイベントには、具体的に進路を考える高校生から募集枠の10倍の応募がありました。先生は、周囲の大人達が性別や年齢で決めつけず、子どもが興味を持った分野に挑戦できるよう後押しをし、体験の機会を与えることの重要性を結びとして話されました。

まとめ

理工系に女性が少ないのは日本特有の現象で、そこには女性が経験する根深いバイアスがあり、それを回避しつつ女性を育成することが重要です。このシンポジウムでは具体策として、女子の理科へのモチベーションを高める関西科学塾や専門教育で幅広い能力を習得させる奈良女子大学工学部、奈良工業高等専門学校の取り組みを紹介いただきました。これにより、「力のある理系の女性」を輩出し、彼女たちがロールモデルとなることで理工系女性のさらなる増加を期待します。

分科会７提言

理工系分野における女性人材育成は日本の急務です。分科会７では奈良県における理工系女性人材の裾野拡大と育成の取り組みについて情報を共有し、課題について考えました。
理工系をめざす女性の進路に存在する負の要因を排除し、理工系女性人材を増やし、50：50で女性が活躍できる社会の実現をめざしましょう。

分科会 8　はたらく女性　輝く会議

日時　10月3日（金）15:30～17:30
会場　奈良県社会福祉総合センター　大ホール

女性就業率　最下位の奈良から考える
～日本国はじまりの地 橿原から はたらく女性が輝く未来～

登壇者

先進地報告：　塚田（つかだ） まゆり（長野商工会議所 副会頭、ダンススタジオブロードウェイ 代表、善光寺世界遺産をすすめる会 議長）
コーディネーター：小安（こやす） 美和（みわ）（株式会社Will Lab 代表取締役、奈良県こども・子育て推進アドバイザー（ジェンダー平等推進担当））
パネリスト：　原田（はらだ） 杏子（きょうこ）（五條メディカル株式会社 代表取締役、社会福祉法人奈良県共同募金会配分委員、橿原商工会議所 女性ビジネス研究会 会員）
森本（もりもと） 知加（ともか）（株式会社南都銀行 営業店次長）
佐藤（さとう） 雅大（まさひろ）（佐藤薬品工業株式会社 代表取締役社長）
司会：　上田（うえだ） 恭子（きょうこ）（有限会社STAR VOICE 代表取締役、一般社団法人日本マナーOJTインストラクター）

Ⅰ．先進地報告

女性がワクワク幸せに働ける社会をめざして～NAGANO働く女性会議～　塚田 まゆり

NAGANO働く女性会議ができるまで

ニューヨーク留学での経験から、自由に語り合える場作りと郷土発信の重要性を知り、帰国後、スターバックスの誘致や「NAGANO検定」立ち上げに奔走しました。その中で、自ら発案発言していくことが実現への近道であり、地域全体で一緒にムーブメントを起こすことが何よりも重要であるという考えに至りました。そして女性初の商工会議所副会頭就任を機に、女性が生きやすく働きやすい組織について発信できる、女性たちの社会参画を促す場所づくりのために「NAGANO働く女性会議」を設立したのです。

NAGANO働く女性会議の取り組み

NAGANO働く女性会議の役割は、働く女性の問題・解決について、スピード感と危機感を持って話し合える場を提供すること。そして、すべての働く女性が主役となって問題・課題を話し合い、男性も含め一人ひとりが「ワクワクする働き方」を考え実行し、社会に発信していくことです。

- 座談会・ワークショップの開催：様々な座組、テーマで女性の働きやすさについて悩みや意見を共有しました。

- 長野市長・長野県知事への提言：既存制度のさらなる拡充や周知、企業や商工会議所との連携について提言を行いました。
- 応援宣言の発表：国際女性デーにあわせて、長野県知事、長野市長とともに「働くすべての女性を応援します」という宣言を発表しました。

これらの活動の結果、会員企業の経営者・管理職、女性社員、行政組織、商工会議所内のそれぞれで能動的なムーブメントが働きだすようになりました。

女性がワクワク幸せに働ける社会をめざして

商工会議所のネットワークを活かし、女性人材のロールモデルを地域ぐるみで推進し、みんなで一緒に女性がワクワク幸せに働ける社会をめざして活動していきたいと考えています。そして、NAGANO働く女性会議のような取り組みを全国に発信し、それぞれの地域で異なる課題を共有し、成功事例を学び合い、互いに手を取り合うことでより大きなムーブメントを生み出していきたいです。

Ⅱ.パネリスト発表

1．橿原商工会議所女性活躍への取り組みと企業としての取り組み
～健康経営・相談できる職場環境～

原田 杏子

橿原商工会議所 女性経営者ビジネス研究会について

現在、女性経営者は全国的に増加傾向にあるものの、ライフスタイルの影響により今後も経営が続けられるか不安など様々な悩みや課題を抱えています。そこで、女性経営者が集い、ビジネス発展と地域経済の活性化に貢献することを目的として設立されたのが「女性経営者ビジネス研究会」です。女性が持つ独自の視点や能力をビジネスに最大限活かし、さらに高めていくためのプラットフォームを提供しています。活動内容としては、女性経営者のネットワーク強化、セミナー・研修会の開催などを行い、社会の発展に寄与し、女性経営者の成長や幅広い人脈づくり、社会参画を支援しています。

企業としての先進的な取り組み

五條メディカル(株)は2020年に設立され、再生医療・高度生殖医療分野などの専門物流に社会インフラとして対応するサービスを提供しています。

安心・安全なサービスを提供するために何よりも大切なのは従業員の心と身体の健康です。

- 専門部署の設置：健康増進幸福創造部・健康経営アドバイザー・産業医等を設置し、従業員の心と身体の健康について真剣に考える経営を行っています。
- 具体的な支援策：ラジオ体操、置き型社食によるバランスの良い食事や水素水の提供、リフレッシュのための休憩スペースの設置などを行っています。

こうした取り組みが、人を大切にする文化を育み、社員が自分らしく能力を発揮できる職場づくりに繋がっています。その結果、健康経営優良法人（中小規模法人部門（ブライト500））という全国500社の中の１社に３年連続で選ばれました。

2．地方銀行の取り組み

森本 知加

自身のキャリアと女性活躍推進

私が入行した2005年当時は、女性は主に窓口業務、男性は外回り営業である渉外業務に就いていました。しかし４年目に女性として初めての渉外に配属され、結婚・出産・子育てを経て、現在は営業店の次長をしています。

（株）南都銀行は奈良県を主な事業基盤とする地方銀行で、中期経営計画の柱の一つに人材の創出を掲げ、特に女性活躍については３年後の2028年に女性管理職比率20％という目標を設定し、環境整備を進めているところです。

ワーク・ライフ・バランス実現に向けた制度の実現

当行グループは、「誰もが働きやすい環境整備」を重要課題と捉え、ワーク・ライフ・バランスの実現に向けた制度の拡充を継続的に行っています。

- 休暇制度の拡充：以前は年１回だった５日間の連続休暇に加え、新たに５日間のリフレッシュ休暇が新設されました。さらに、育児・介護などの目的で取得可能な積立休暇も新設されました。
- 柔軟な働き方の導入：フレックスタイム制度の拡充により、趣味や習い事、子どもの授業参観や運動会にも参加しやすくなりました。
- 子育て・介護支援の強化：短時間勤務制度やはぐくみ休暇の取得対象を、子どもが小学校入学前から中学校入学までに拡大しました。はぐくみ休暇は従来、子の看護の際に利用できましたが、今年度からは子どもの行事参加にも利用できるようになりました。また、家族を介護するための介護休暇や、介護休職制度なども取り入れています。

これらの制度の充実により、プライベートの充実や、育児・介護との両立など多様な働き方が実現しており、結婚イコール退職ではなく、実際に制度を利用して仕事を続けていく先輩行員を間近で見ていることで、女性行員の仕事への不満はなくなっています。

3．男性リーダーによる女性活躍推進への想いと取り組み

佐藤 雅大

経営のモットー

佐藤薬品工業（株）は、医薬品受託製造の国内トップクラスの企業として、橿原市を拠点に医薬品の製造を行っています。私の経営のモットーは、創業者をはじめとするOB・OG、現役社員、そしてそのご家族や社外ステークホルダーの皆様に「安心」していただく事業経営を行うことです。「社員たちが在っての私、私が在っての社員たち」という互いを尊重する姿勢を大切にしています。

子育て支援、男性育休への取り組み

- 事業所内託児所「Satoにこにこ園」：2014年に事業所内に開設し、産前産後・育児休暇を経て復帰した社員が多数利用しています。

- 働き方の多様化：時短勤務や残業免除を、法定以上の小学校卒業までに引き上げました。
- 男性育休推進：社内報などを通じて育休取得者へのインタビュー記事を全社員に共有し、男性が育休を取得しやすい雰囲気づくりを行っています。

社員向けフェムケアセミナーの実施

女性社員を対象に、健康で長く働くための会社づくりの一環として、専門家による月経やセルフケアに関するセミナーを実施しました。また、男性社員への女性特有の健康課題の理解促進についても研修計画を立案しているところです。

若手活性化委員会「わくわく向上委員会」発足

企業変革に必要な人材やリーダーの育成をめざし、自由な発想で新規提案を行う社内のプロジェクトチームを発足しました。「自分たちの会社は自分たちで作る」という考えのもと、新たな休暇制度の実現やSNS発信力強化施策などを提案し、実際に導入されています。

今後の目標

一般事業主行動計画に基づき、2028年度までに女性管理職比率を12%に引き上げること、また男性育児休暇取得率15%の達成を掲げています。男性育児休暇取得率は既に20%を超えるなど計画以上の進展を見せており、現在は目標の再設定とともに、男女問わず管理職をめざすためのモチベーション作りと環境整備に一層注力していく考えです。

Ⅲ.トークセッション

奈良県が女性就業率最下位であることへの課題と向き合う

小安　奈良県の女性就業率は全国47位という事実にどう向き合うべきでしょうか。

原田　奈良も長野と同様、大阪などの近隣都市へ働きに出る若い方が多いのだと思います。奈良には優秀な女性が多いですが、大阪と比べて賃金が低く、その条件で心身に無理をしてまで働きたいか、と感じている方は多いはずです。

森本　私の入行当時は寿退社が当たり前でしたが、今は短時間勤務を利用して「共働きが当然」と考える若い世代が確実に増えています。制度が整えば、奈良の就業率も必ず上がっていくという期待感があります。

佐藤　奈良はベッドタウンとして専業主婦層が厚いこと、また貯蓄額が全国３位と高く、経済的なゆとりがあることも影響しているかもしれません。

塚田　今日登壇されている皆さんは比較的大きな企業ですが、日本企業の99.7%を占める中小企業では、これほど手厚いケアは困難なのが現実です。大企業がリードしつつ、行政や商工会議所が中小企業を支えることが急務ではないでしょうか。

小安　今感じている「壁」はありますか。

森本　ロールモデルが不足していることです。制度があっても、利用ができない、しづらいという声が男女問わずあります。私は管理職として、自ら授業参観のために休みを取り、部下の男性たちにも取得を促しています。

佐藤　社内アンケートでは、女性社員は責任やリーダーシップに強いプレッシャーを感じ、管理職になるのが不安だ、という声が出ました。

塚田　一人ひとり状況は違います。その人が向いていると思うなら、「どのような環境なら管理職ができるか」を個別に話し合うのが一番です。

原田　私はまず「前向きな価値転換」が不可欠だと感じています。例えば出産や育児によるブランクを、会社側が「未来を導くリーダーシップを学ぶための実践訓練」とポジティブに捉え直すという受け入れ態勢を橿原市全体で作っていきたいです。社員が「ここは自分の居場所だ」という安心感を持てる場所を、行政の知恵も借りながら構築したいです。

小安　男性も同じく、育児休暇取得後に職場に戻った際の価値転換が必要です。育児で培われるコミュニケーション力や忍耐力に価値を見出すメッセージを行政が発信し、義務としての制度ではなく、人生を豊かにする「付加価値ある活動」だと社会全体で定義し直せると良いですね。長野県の女性たちが自ら声を上げ、行政や経済団体を巻き込んだように、橿原市や奈良県においても、まずは私たち自身が発案、発言し、企業や行政が連携することが重要です。

地域全体での支援の必要性

小安　橿原市には女性経営者の会はありますが、働く女性のネットワークがないことについて、具体的にどのようなことが実現可能でしょうか。

原田　経営者に限らず、現場の女性や専業主婦の方々など、多様な世代・立場の女性たちが対話できる機会があれば素晴らしいと思います。

佐藤　発信が苦手な方でも意見を出しやすいよう、まずは社内で女性リーダーを発掘する土壌を整えたいです。さらには、そうしたリーダーたちが社外の多様な方々と交流し、共に環境を改善していける大きなムーブメントを地域全体で起こしていきたいですね。

小安　企業間の連携も重要です。本日登壇されている３社の知見を共有し、橿原・奈良全体で学び合うネットワークがあれば素敵ですね。

塚田　他者との対話を通じて「自分は何者か」を再確認することが自己実現に繋がります。商工会議所は「人生の応援団」として寄り添い、社会を良くする一助になりたい。ぜひ橿原市で「働く女性会議」を実現させましょう。

小安　自社にロールモデルがいなくても、他社の女性の姿を見て勇気をもらうこともあります。こうしたネットワークを各地に広げたいですね。

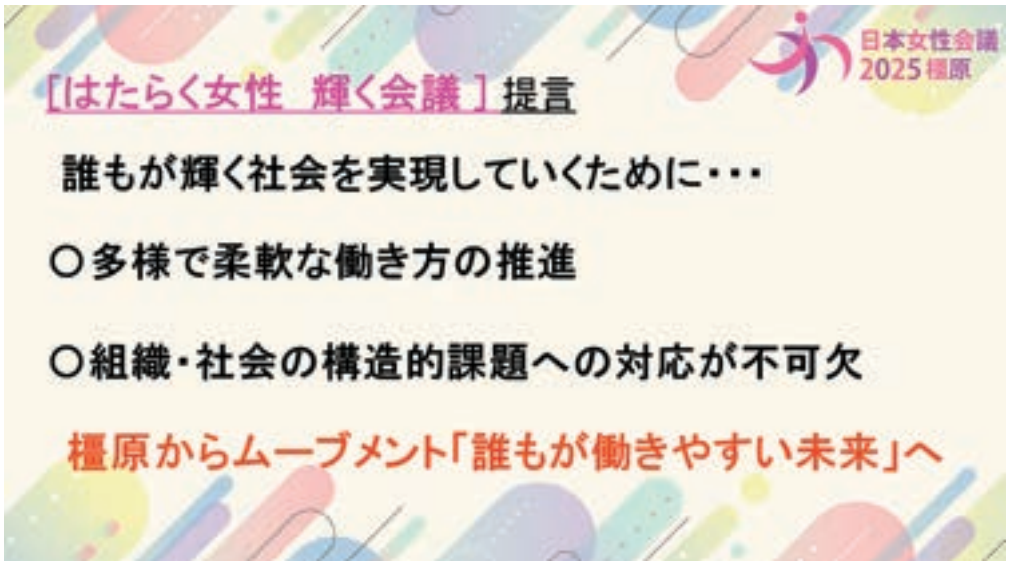
塚田　客席にいらっしゃる橿原市長にも一言いただきたいです。

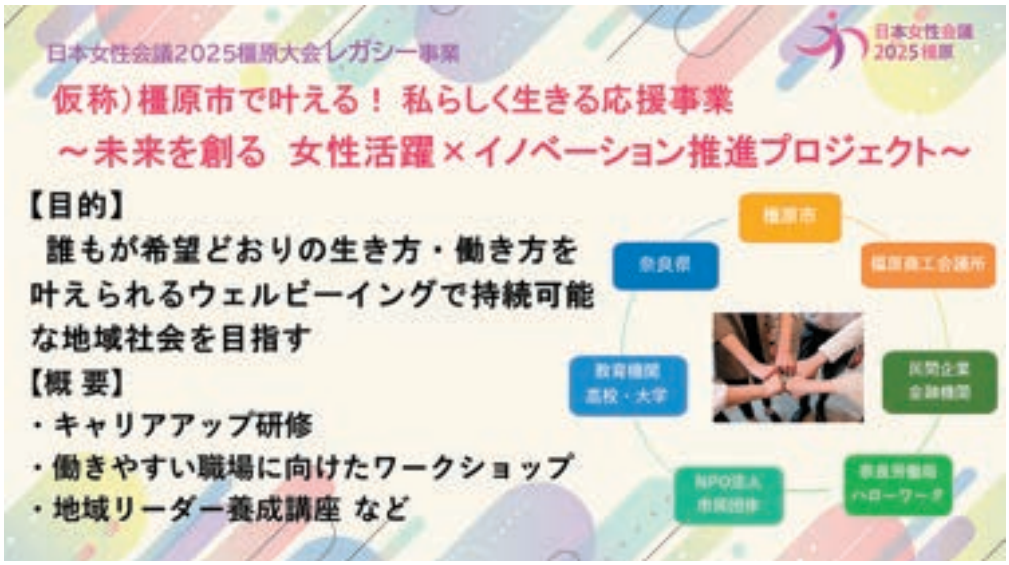
亀田市長　心に響くお話をありがとうございました。「日本女性会議」という大会名ではありますが、女性だけではなく「人間活躍」することが大切なのだと改めて感じました。女性の社会進出と同時に、男性の家庭進出も不可欠です。誰にとっても働きやすい環境を作るために、企業の皆様や商工会議所としっかりと連携し、積極的に取り組んでいきます。女性会議の開催をゴールとせず、その先を見据えて頑張っていきたい

です。

小安　奈良の女性就業率は現在最下位ですが、これはＶ字回復するしかないということです。私たちも一人ではなく連帯して声を上げ、誰もが自分らしく生きられる社会を作る一歩にしましょう。

分科会８提言





橿原市では分科会３及び分科会８の提言を受け、「誰もが働きやすい未来」へ向けて、今後も事業に取り組みます。

分科会 9　DV・デートDV

日時　10月3日（金）15:30～17:30
会場　奈良県社会福祉総合センター　大会議室

子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないために

分科会９は、子どもたちを取り巻く暴力の問題が近年ますます深刻化しているという現状認識に基づき開催されました。分科会の目的は、現状の情報共有を通じて、大人が知っておくべきこと、そしてDVや性暴力のない社会の実現に向けて、子どもたちに何を伝えていくべきかを話し合うことにあります。

登壇者

コーディネーター兼パネリスト：風味（かざみ） 良美（よしみ）（参画ネットなら）
パネリスト：中谷（なかたに） 奈央子（なおこ）（性教育学講師・思春期保健相談士）【zoom参加】
吉川（よしかわ） ヒロ（tomoni. 共同代表）

Ⅰ．自己紹介、活動内容及び子どもたちの現状等

＜風味 良美＞

1．団体の成り立ちと活動の紹介

参画ネットならは2007年に奈良県の男女共同参画の実現のために結成されました。主な活動の柱はデートDV防止教育、命の安全教育、そして相談活動で、子どもたちを被害者にも加害者にも傍観者にもさせないことをめざし、県内の小中高で出前講座を実施しています。メンバーにはDV被害の経験者であり、予防教育の重要性を痛感して資格を取得し、活動に加わっている者もいます。

2．子どもたちのジェンダー平等意識と課題

DVや性暴力はジェンダーに基づく暴力です。子どもたちは「ジェンダー平等」という知識を頭では理解しているものの、具体的な生活や行動の場面で社会構造の現状や根強く残る慣習、ジェンダーバイアスとのギャップに戸惑いや疑問を抱いている実態があります。

ジェンダー平等に対する考え：

デートDV防止講座を受講後、アンケートにあがって来る感想は、ジェンダー平等を肯定的にとらえるものもあれば、「ジェンダー・ギャップ指数は欧米の価値観であり日本とは価値観が違うところがある」「家の考えと違うところもあった」など、かなり否定的にとらえるものまでさまざまです。

伝え方の工夫：

ジェンダー平等教育やデートDV防止教育は、男子への逆差別といった感情的な反発が見られるケースもあり、関係者間では伝え方について、継続的な工夫と努力が続けられています。

３．若年層における性暴力被害の深刻な実態

内閣府男女共同参画局が2022年６月に実施した、若年層（16歳から24歳）への性暴力被害の実態に関するオンライン調査結果が以下のようになっています。

被害の割合：

2,040人の回答者のうち、約４人に１人が何らかの性暴力被害に遭ったことがあると回答しており、若年層における被害の深刻さが浮き彫りとなりました。

最大の発生場所：

性暴力被害に遭った場所として最も多かったのが学校であり、加害者は学校の教職員、先輩、同級生、クラブ活動の指導者など、日常的に接する学校関係者が多数を占めています。

性暴力の内容：

言葉による性暴力が38.8%、身体接触を伴う性暴力が28.2%と、多様な形の性暴力が若年層を脅かしている状況です。

＜中谷 奈央子＞

１．自己紹介と活動の経緯

私は思春期保健相談士として、主に学校現場を中心に性教育に携わる活動をしています。

活動を始める前は、三重県の公立高校で養護教諭（保健室の先生）をしていました。その養護教諭時代に、性のことに悩みや傷を抱える生徒に多く出会ったものの、当時の自分には「困ってから、傷ついてから、何かが起きてからの話を聞くことしか」できなかったという後悔が、今の活動の原点にあります。この後悔から、「もっと前にできることや、伝えられることはなかったのか」と考え、専業主婦を経て、現在の性教育を仕事とするに至りました。現在は、学校での講演のほか、執筆活動も行っており、例えば『10代の妊娠』といった本の執筆や、様々な作品の制作協力にも携わっています。

２．学校現場における性教育の実態

児童・生徒の年齢に応じて、伝える内容と形式を工夫しています。

高校：人数が多いことから、講演会形式が中心となります。扱う内容は、避妊、性感染症、デートDV、性暴力など、踏み込んだ話がほとんどです。講演後には、コンドームなどの実物を用いて生徒と話をしたり、個別の相談に応じたりすることもあります。

中学校：こちらも講演会形式が多いものの、デートDVや人間関係の問題、境界線と同意、そして「よい関係」とは何かといった、より身近なテーマを扱うことが多いです。

3．子どもたちが直面する現状と必要な感覚

子どもたちを性暴力の被害者にも加害者にもしないためには、まず子どもたち自身が「自分は大切にされている」という感覚と、「自分の体は自分のもの」という感覚を持つことが重要です。この感覚が基盤となって、他者に対して境界線（バウンダリー）を意識し、同意（コンセント）を大切にできるようになるはずです。

＜吉川 ヒロ＞

1．自己紹介と活動内容

2012年頃から、性の多様性の啓発活動に取り組んでいます。

主に学校現場を中心に活動し、性の多様性やジェンダー平等を切り口とした、人権や「違いがあってもいい」というメッセージを伝える講演や授業を、子どもたちや先生方に対して行っています。また、大阪府内の一部の自治体や団体において、性的マイノリティ当事者の相談窓口の相談員も務めています。

さらに、友人とともに「tomoni.」というユニットを立ち上げ、性の多様性も含んだ目に見えない違いについて子どもたち同士で話し合うワークショップの企画・実施や、性的マイノリティ当事者とアライ（支援者）の方々が集まる企画の運営にも取り組んでいます。

2．性の多様性に関する学校現場の現状

学校現場での活動を通して、子どもたちが直面している具体的な課題と、それに対応するための支援のあり方について報告します。

子どもたちの多様なセクシャリティ：

身体的な性の特徴（セックス）、自認する性（ジェンダー・アイデンティティ）、好きになる性（性的指向）は、人によって様々であるという性の多様性に関する教育は、子どもたちにとって非常に重要です。

特に、性的マイノリティの子どもたちは、男女二元論や異性愛前提の環境の中で「自分は特別な存在だ」と感じてしまうことで、周りの環境から距離を置いてしまい、困っていることや悩んでいることを「特別なこと」として誰にも相談できず、孤立してしまう傾向にあります。

教育現場における課題：

学校教育においては、性の多様性に関する情報や指導が不足している場合が多く、また、教職員側にもリテラシーの不足や無意識の偏見が存在することが課題です。

子どもたちの孤立を防ぐためにも、学校全体で「どんな子でも困っていることがあれば、いつでも話を聞くよ」というメッセージを繰り返し発信していくことが重要です。

Ⅱ．今後の課題及び提案

＜風味 良美＞

1．今後の課題の明確化

若年層の性暴力被害の最大の発生場所が「学校」であるという事実は、子どもたちが安心して生きられる社会を実現するために喫緊の課題として、以下の点に取り組む必要があります。

①学校における安全性の確保：
　教職員・指導員による加害を防ぐためのリテラシーの向上。また、子どもたちには性暴力の根底にある間違った認識や行動、また、性暴力が及ぼす影響などを正しく理解し、お互いを尊重する態度などを発達段階に応じて身に付けるための「生命（いのち）の安全教育」を推進します。
②包括的な性教育の推進：
　身体や生殖の仕組みを教えるだけの性教育ではなく、人権や人間関係、性の多様性、ジェンダー平等、幸福など幅広いテーマを含む包括的性教育を推進します。
③大人の意識改革：
　DVや性暴力のない社会の実現に向けて、子どもたちが被害者にも加害者にも傍観者にもならないよう、大人がまず現状を深く知り、暴力の根絶を基盤とする社会を構築していく責任と、子どもたちに明確なメッセージを伝えていく姿勢が不可欠です。

２．社会への提案

　本分科会を通じて、「安心して生きられる社会にするための今後の課題や提案」について、パネリストや参加者と共に議論を深め、DV・性暴力のない社会をめざすために学校・地域・行政が連携し、私たち一人ひとりが具体的な行動につなげていきたいと考えています。大人が担うべき責任と、社会全体での意識改革の必要性を明確にすることで、若年層の安全と人権を保障する社会の実現をめざします。

＜中谷 奈央子＞

１．身近な大人による境界線意識と同意の尊重

　子どもが成長の過程で、「嫌」と感じたときに「嫌」と伝え、それを身近な大人に受け止めてもらう体験を日々の中で繰り返し行うことが極めて重要です。これにより、「嫌」と言っても関係が壊れるわけではないという安心感を子どもが獲得し、他者との健全な境界線を意識できるようになります。

２．性をタブーにしない環境づくり

　小さいうちから、「性をタブーにしない環境づくり」を心がけるべきです。
ポジティブな対話：
　体や性の話をポジティブな話題として扱うことが大切です。
子どもの発言への対応：
　子どもから質問があった際に、大人側が「怒らず、逃げず、嘘をつかず」に向き合うことで、「性はタブーではない」という明確なメッセージを子どもに伝えることができます。
日常でのキーワード：
　「人は個々に異なり、それぞれに素晴らしい」というキーワードを日常会話の中で伝えていくことも有効です。また、子どもの発言を「何言ってるの」と否定するのではなく、「面白いこと気づいたね」「いい質問だね」とポジティブに受け止めることで、環境の雰囲気は大きく変わります。

３．思春期におけるコミュニケーションの工夫

　思春期に入ると、性に関する話をしづらくなるという課題が生じます。この時期には、直接的な会話が難しくても、以下のような工夫により情報を伝えることが必要です。
間接的な情報提供：
　本を渡す、LINEで情報を送るといった方法や、テレビや動画を見ながら「これってそうなんだよ」

とひとりごとのように話す「突っ込む性教育」も効果的です。
「アイメッセージ」の使用：
　伝えたいことがあるときは、子どもの行動を責める「なんであなたはこうなのよ」という「ユーメッセージ」ではなく、「私はこう感じるよ」という「アイメッセージ」で伝えることで、関係性を壊さずに真意を伝えることができます。

＜吉川 ヒロ＞

1．日常的な「男女分け」の見直し

　性的マイノリティ当事者や、性別違和を持つ子どもたちにとって、日常生活における過剰な「男女分け」や異性愛規範が、最も大きな生きづらさの原因となっています。
服装・髪型の規定の見直し：
　服装や髪型を男女で分けるのではなく、性別を問わず制服を選択できたり、男女ではなく髪の長さなどで規定を定める学校が増えてきていますが、この流れをさらに推進する必要があります。
イベントにおける配慮：
　卒業式や合唱コンクールなど、男女で役割や列を分けるシーンにおいて、男女混合の出席番号順にしたり、「男女の区別は関係なく、好きな方を選んでいいよ」という選択肢を提示することが、子どもたちの心の負担を減らすことに繋がります。

2．ハラスメント防止と相談窓口の設置方法の提案

　子どもたちを被害者・加害者・傍観者にしないために、日常的な配慮や制度の見直し、そして教育を積み重ねることで、多様な子どもたちが、孤立することなく安心して自分らしく生きられる社会をめざすべきです。
相談窓口の提示方法の工夫：
　「性別に関する悩み」という形式で相談窓口を設けると、セクシャリティに関する相談がカミングアウトとほぼ同時になってしまい、特に大人に相談するハードルが極めて高くなります。
そこで、例えば「服の着替えがしにくい」「体に傷や痣がある」など、様々な理由で起こり得る困りごととして相談窓口を設け、特定の性別やセクシャリティに限定されない形にすることが効果的です。
　重要なのは、相談に来た人にだけ情報を与えるのではなく、「いつでも、誰でも話を聞く」「一緒に考える」というメッセージを全体の場所で繰り返し発信することです。
傍観者への関わり（バイスタンダー教育）：
　性に関わる「からかい」や「茶化し」が起こった際に、周囲にいる人がどう関わるかという「傍観者（バイスタンダー）」の役割の重要性を、学生に伝えていくべきです。
　「それはやめなよ」と一言声をかけることや、教師などの権力者に報告するといった具体的な行動の選択肢を示すことで、子どもたちを傍観者にしないための環境を整備することが重要です。

Ⅲ．質疑応答

（色字は質問）

参画ネットならの活動について教えてください。

風味　活動開始当初、学校現場への導入に苦慮しましたが、県との共同事業に応募し採択され、現在は奈良県からの案内を通じて学校で講座を実施しています。講座のファシリテーターは、

DV根絶には予防教育が不可欠という考えのもと、民間団体「アウェア」が養成する認定資格を取得しています。

教師や親などの権力差がある中での被害をどう防ぐべきか、また子どもを加害者にしないための教育について教えてください。

風味　昨年、児童生徒への性暴力で処分された教師は157名になります。幼児期から境界線や同意を学ぶ「生命（いのち）の安全教育」を大人が進める必要があります。

中谷　学校は被害防止に偏りがちですが、人権ベースの加害予防教育はまだ不十分です。私はNOを伝えることと同時に、それを受け止める（拒絶＝人格否定ではない）教育をセットで伝えています。

吉川　小学生向けに同意を学ぶ絵本を活用し、NOと言う練習とNOと言われたら止める練習を両方行う実践例もあります。

保護者の抵抗や教職員の理解不足、教育課程の過密化に伴う「生命（いのち）の安全教育」についての授業時間の減少ついてどう感じていますか？

中谷　性教育への反対は一部で、学校での教育を望む保護者が多いのが実情です。しかし、大人の理解を深めることに関しては厳しい現状もあり、例えば三重県では性の多様性に関する教職員研修は進んでいますが、性暴力予防の研修はまだ圧倒的に少ないです。

吉川　教職員研修は単発になりがちで、その後の検証が難しい現状があります。英語やICT教育の導入で現場は多忙化しており、人権教育の枠が削られていると感じます。

包括的性教育を広める工夫や、デジタルサービスの活用、AI相談の是非は？

中谷　性教育という言葉自体のイメージチェンジを図るため、ニュース等の身近な話題から興味を持ってもらうことが大切です。デジタルサービスで言えば、若者向けサイト「セイシル」や保護者向け「命育」などの信頼できるソースの活用を勧めています。

吉川　性教育は「暮らしや人生」の話だと伝えています。AI相談については、共感的な回答に救われる面もある一方で、正確性に欠け、もっともらしい嘘をつく不安があるため、複数の情報源に当たることが大切です。

風味　包括的性教育については、１回の講座で子どもたちの行動を変えることは難しいので、発達段階に応じた繰り返しの教育が不可欠だと感じています。

分科会９提言

子どもたちが性教育という言葉のイメージにとらわれず、ジェンダー平等というものをもっと身近に感じられるようになることが理想です。

学校・地域・行政 そして、私たち一人ひとりが連携して取り組み、人権の尊重を基盤とし、幅広い内容を体系的に学ぶ「包括的性教育」を実施し、ジェンダー平等を実現していきましょう。

基調報告

日時　10月４日（土）10:20～10:50
会場　奈良県橿原文化会館　大ホール

男女共同参画に関する最新状況について

発表者：岡田（おかだ） 恵子（けいこ）（内閣府男女共同参画局長）

Ⅰ．男女共同参画推進の意義

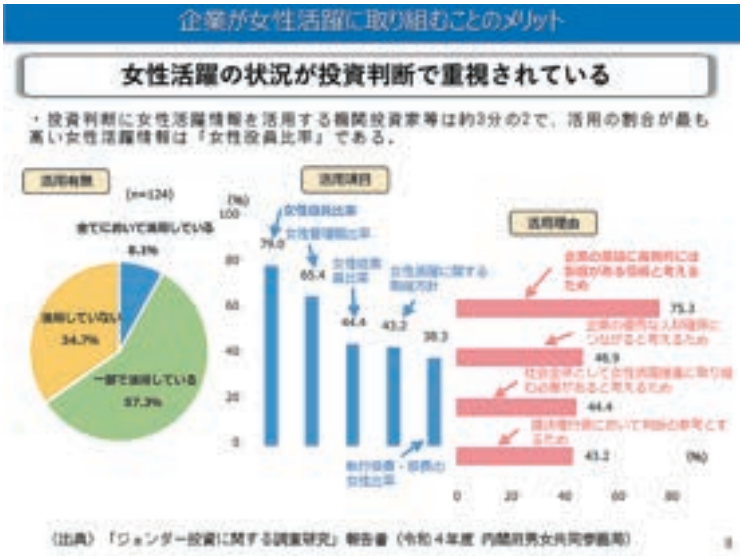
男女共同参画の推進は、全ての方が生きがいを感じられる多様な社会の実現に不可欠であり、我が国の経済社会の持続的な発展に不可欠な要素です。少子高齢化や価値観の多様化が進む中、あらゆる分野の意思決定に男女が参画し多様な視点を確保することが、活力ある持続可能な社会につながります。

Ⅱ．データで見る現状と成果

1．構造の変化（約40年前と比較）

人口構造：女性就業者が増加する一方で、就業者全体が高齢化。
世帯構造：単独世帯の割合が最大に。高齢者単独世帯の増加も背景のひとつ。
共働き：共働き世帯は徐々に増加。夫婦ともにフルタイムで働く世帯も増えている。

2．各分野での女性活躍



政治分野：議員の女性割合は衆議院15.5%、参議院 29.6%、都道府県議会14.6%、市町村議会18.1%。女性参画の課題としては、活動と家庭生活の両立、女性議員へのハラスメントなどがある。

行政分野：国家公務員の採用者に占める女性の割合は約4割程度。役職に就く女性も増えている。

企業分野：管理職相当の女性割合や上場企業の女性役員比率は上昇傾向にあるが、依然他国との差は大きい。機関投資家の約３分の２は長期的な企業業績への影響があるという理由で女性活躍の情報を投資判断に活用している。

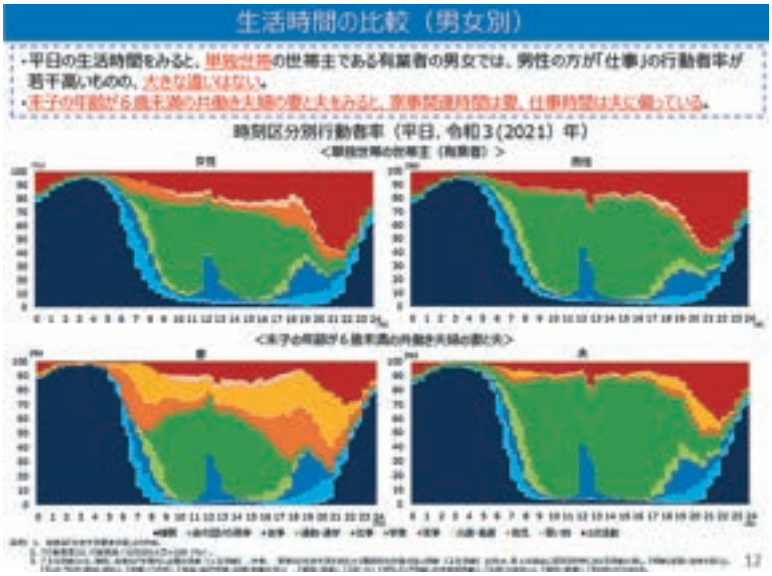
Ⅲ．根強く残る課題

１．労働と経済の格差

正社員同士でも、年齢を経るごとに男女の給与の差が拡大しています。これは管理職比率の違いや就業継続期間の違いなどが原因です。2026年４月より、従業員数101人以上の企業を対象に女性管理職比率と賃金差異の比率の両方を開示することが義務化されます。

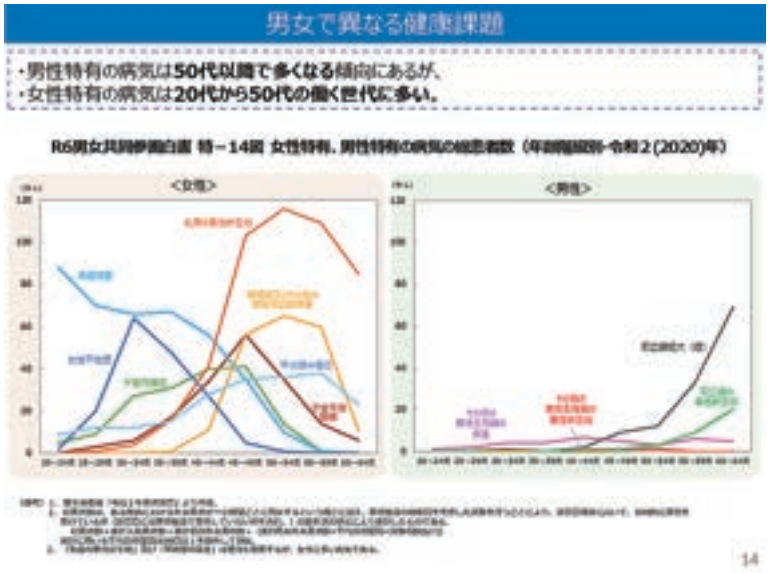
２．時間の使い方の格差

女性は非正規雇用の割合が高く、特に年齢層が上がるとその割合も大きくなります。無償労働時間（家事・育児等）は女性が男性の５倍であり、他国と比べても大きな差があります。背景に固定的性別役割分担意識やアンコンシャス・バイアス、長時間労働の慣行等があります。男女ともに長時間労働の是正と生産性の向上、多様で柔軟性のある働き方を推進する必要があります。



３．健康・介護問題

男性と女性で健康課題が異なります。性差のある病気の罹患は男性の場合、中年期以降で多くなる傾向があるが、女性の場合は20代から50代の様々な時期に起こる傾向があるため、生涯にわたる健康支援が必要です。また、家庭で介護する男性が増加しており、ワーキングケアラーが増加するなか、離職防止等のための両立支援が極めて重要となります。

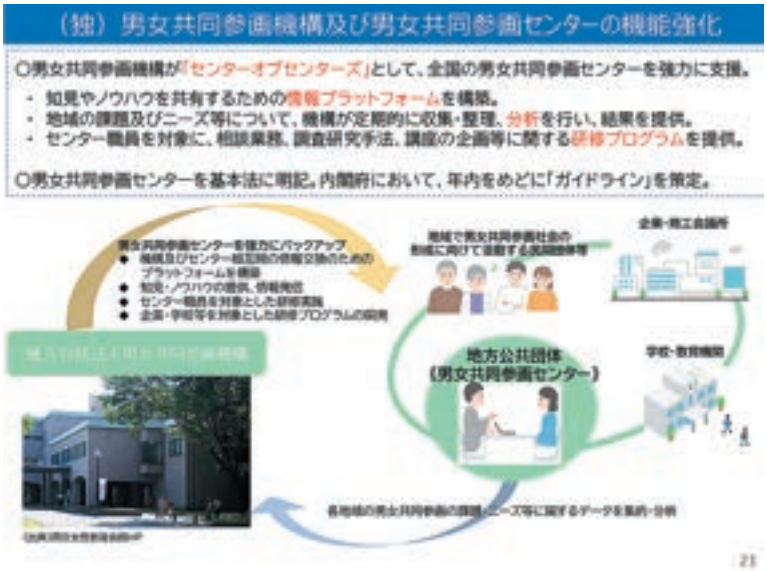


4．若年層の意識変化と将来の展望

若年層では男女ともに「仕事と家庭を両立したい」「パートナーに両立してほしい」と考える割合が最も高く、管理職になりたいという20代女性は以前に比べ増加しています。また、男性の育児休業取得率も高まっています。若年層の意識変化をよく理解し、政府も「共働き・共育て」の実現に向けた取り組みや、働き方改革を進めなければなりません。

5．地域課題

女性を含め誰でも安心して住み続けられる地域を作っていくことが重要です。若者の転出理由に、出身地域での親や周囲の人の干渉や世間体から逃れたかった等の回答があり、背景には固定的な性別役割分担意識が考えられます。2026年４月に男女共同参画機構を発足させ、各地の男女共同参画センターの支援を通じて、各地の男女共同参画の取り組みをサポートしていきます。



6．安心・安全の確保

災害時には女性や子どもなど脆弱な状況にある者がより多くの影響を受けるため、平時から防災・復興に関する意思決定や防災の現場への女性の参画が重要です。

また、性犯罪・性暴力は被害者の尊厳を踏みにじる重大な人権侵害です。DVについては、精神的な暴力も保護命令制度の適用となるよう法改正を行いました。

Ⅳ．今後の展望

政府は、5年間の「男女共同参画基本計画」を定め、その中で毎年各省庁と連携して取り組む施策「女性版骨太の方針」をまとめています。直近では「女性に選ばれ、女性が活躍できる地域づくり」を重点的施策の一つ目に定めています。引き続き横断的な視点を持って、進めていきたいと考えています。

様々な分野で男女がともに参画し、あらゆる方が暮らしやすい社会を実現すること、そして地域での男女共同参画が進み、地域の活力が高まることが、日本全体の活力向上、ひいてはウェルビーイングの向上につながります。

本大会が男女共同参画社会の形成促進と推進の原動力となることを期待しています。

橿原大会シンポジウム

日時　10月４日（土）10:50～12:00
会場　奈良県橿原文化会館　大ホール

未来にも輝けるスポーツライフをめざして
～心身の健康とそのケア～

シンポジウムの趣旨

近年、女性アスリートの活躍は目覚ましいものがありますが、その背景には依然として多くの課題が存在しています。特に、競技スポーツ指導者における男性の割合の多さから、女性の体の仕組みや精神的な状況に対する無理解な指導、さらにはセクハラやパワハラといった問題も発生し続けています。

アスリートだけでなく、一般の女子生徒や学生の間でも、「体育嫌い」の子どもや、スポーツをしないという選択をする女性が増加しているというデータもあります。その根本的な背景には、スポーツ文化が元々男性によって作り出されたという背景があり、筋肉量が多いほうが勝利するという仕組みで作られている競技が多く、その中で「女性は男性より体力が劣る」という体力観の問題が存在しています。

男性が作ったスポーツの領域に女性が追いつこうとする中で、女性特有の生理などの体の仕組みやケアに対する無理解な指導者によって、女性が一生涯にわたり心身ともに非常につらい状況を抱えてしまうケースもあります。

本シンポジウムは、このような無理解とケアの後回しといった事態にならないよう、「未来にも輝けるスポーツライフ」をめざし、心身の健康とそのケアについて考える機会として企画されました。

登壇者

メインパネリスト：有森（ありもり） 裕子（ゆうこ）（元プロマラソン選手）
コーディネーター：田里（たさと） 千代（ちよ）（天理大学体育学部教授）
パネリスト：　前田（まえだ） ひなた（天理大学人間学部人間関係学科創作ダンス部）
　　有川（ありかわ） 舞（まい）（天理大学体育学部体育学科剣道部）

心身の健康を保つ秘訣

田里　有森さんは今年６月に日本陸上競技連盟会長に就任されるなど、非常に多忙な日々を送られていると存じます。心身のケアや日々の健康を保つ秘訣があれば、まずお聞かせいただけますでしょうか。

有森　年齢を重ねるごとに、様々な肩書きが自然と回ってくるものだと感じながら、緊張感を持って臨んでいま

す。「今、どのくらい走っているのか」と尋ねられますが、奈良マラソンには毎年参加しているものの、現在は全く走っていません。走行距離はゼロです。

しかし、健康を保つことは、自分の体を自分で管理することに他ならないと考えています。来年で還暦を迎える年ですので、体のバランスを意識しています。現役時代は筋力が充実していましたが、今は自分の体に無関心になると体の歪みが生じていることもあるからです。

そのため、時間が取れるときは、週に２回、パーソナルトレーニングでジムに通っています。年齢とともに自分特有の体があるため、そこをしっかりケアしたいのです。

パーソナルトレーニングの他に、ピラティスも行っています。ピラティスは、体の前面と背面のバランスを整えることや、ゆっくりと深呼吸をすることによるメンタル的な安定を図ることができます。

これらで体を整えると、「整いました」という感じになります。こうした時間を通じて、「体のここが少し痛いな」「硬いな」といったことや、「メンタルが今日はイライラしているな」「整っているな」といった心身両面のチェックを欠かさず行っています。自分がある程度整うと、周囲に対してまず整った自分で対応できます。大抵の場合、周囲に腹を立てた際に、他人を整えようとしてもできないことがほとんどではないでしょうか。自分が整っていることが一番早い解決策だと思うので、まず自分を整えていくことが基本だと考えています。

覚悟と「自分で自分を褒めたい」

田里　有森さんといえば、アトランタオリンピック女子マラソンで銅メダルを獲得された際に、「自分で自分を褒めたい」という名言を残されています。この発言に至るまでの文脈に、ご自身の体も心も全てを引き受ける覚悟を非常に強く感じました。現役時代に、そうした覚悟をどのように築き上げてこられたのかをお聞かせいただけますでしょうか。

有森　「覚悟」になるのでしょうか。ただ、明確なのは、私は走ることを決して「好き」とか「楽しい」ということで始めたわけではなく、自分が生きていくための「仕事」として捉えていました。この「仕事」という自覚は、実業団に入ったときに強くなりました。

リクルートランニングクラブに入部した時期は、リクルート事件の真っただ中で、「リクルートなんて誰も行くものか」と言われるような状況でした。しかし、「会社が自分を受け入れてくれるのなら」という、やる気一本で拾っていただいた選手でした。そのとき、走ることで給料をもらっていることに対し、自分の責任を全うしなければならないと強く感じました。もちろん、楽しむことにまで至らなければいけないという意識も持っていました。「つらい」「言えない」ではなく、そういうことさえも「楽しいね」「やりがいがあるね」と思える自分になることが大切だと、何年かかけて落とし込むようになりました。

最初のバルセロナオリンピックのときは、まだそうした意識が社会に馴染まない状況があり、「好きでないと駄目」「楽しくないと駄目」という空気感もありました。スポーツの世界でトップを取った人がどうやって生きていくか、非常に多くの可能性を持っているのに、それを活かすための社会もありませんでした。そんな中で、スポーツ選手が社会に対して仕事の最たるものを示すには、オ

リンピックメダリストになることだと考えました。当時は、オリンピックメダリスト以上の価値がほとんどなかったのです。何かを発言したいのであれば、「メダリストにならないと物を言うな」という風潮もありました。

もう一度自分がオリンピックに出てメダリストにならなければ、スポーツに対する関心の持たれ方や環境、選手たちの意識づけについて発言しても聞いてもらえない、というプレッシャーを自分に課したのが、ちょうどアトランタオリンピックのときでした。

そのとき、「I want to go（行きたい）」ではなく、「I must go（行かなければならない）」ということを自分自身に課して臨みました。

「自分で自分を褒めたい」というあの言葉は、実はそういった思いで言った言葉です。銀から銅に落ちた結果でしたが、仮に周りからブーイングがあったとしても、多分私は同じコメントを言いました。その言葉は自分に言ったのです。誰にも理解されなくても、自分が理解することが一番大事だ、というほどの思いを持って言った言葉でした。

結局、自分自身が自分のやることに対してどういう意識を持ってやるか、ということです。どんなことであっても、自分がそこにコミットしていることを意識し、それに対して責任を持つという意識は、男女関係なく、何か物事をやろうとする人間であれば大切なのではないかと思っています。

田里　有森さんがプロフェッショナルとして、「仕事」としてその役割を果たすという感覚をお持ちなのだと理解いたしました。

海外選手との意識の違い

田里　大学で部活動を行っている学生が「しんどい」と心情を吐露することが少なくない現状において、海外とのスポーツに対するとらえ方の違いについて、ご意見をお聞かせいただけますでしょうか。

有森　私がマラソンを始めたきっかけは、ソウルオリンピックで優勝したポルトガルのロサ・モタ選手でした。それまで日本の女子マラソン選手のゴールシーンを見て、「絶対やるものか」と感じていました。あの悲壮感と、倒れ込む姿を見て、「どうしてやるのだろう」と思うことしかありませんでした。

しかし、ロサ・モタ選手は、ゴール寸前で満面の笑顔ではしゃいでゴールしたのです。その姿を見た瞬間、「マラソンとは本当はどういう競技なのだろうか」と思い、マラソンをやりたくなりました。

おそらく彼女は、誰かに強いられたわけではなく、自分ができることを極める楽しさに特化していたのだと思います。もちろんきついことはたくさんありますが、「嫌なこと」はなかったと思うのです。「きついこと」と「嫌なこと」は全く違います。

嫌ならばやめた方がいい。これは確実にお伝えします。嫌なら何の力も出てきませんし、周囲にもネガティブな空気を持つことになり、マイナスしか生まれないのです。

一方で、きついというのは、練習をしているからこそ当たり前のことです。きついということは、成長しているということです。きついことさえも楽しめること、これが大切です。

最も大切なことは、本人がそれを決めているということ、本人がそれを選んでいるということです。このような意思の持ち方について、日本の選手と海外の選手は異なります。

日本は小中高で、運動会や体操、体力測定などから、まずスポーツは「規則正しく整列して」といった形で始まります。しかし、海外では、「強いられる」ことはありません。クラブ活動も同様で、

「競技としてのスポーツ」を選ぶのは、だいぶ後になります。

なぜなら、本人の意思が本当に叶わないと駄目だからです。意思を持つための条件として、まず「勉強ができること」が求められます。それができなければ、スポーツ選手にはなれません。海外では、「人間としてきちんと勉強できますよね、自分の生活をきちんと送っていますよね。そうであればスポーツをするための環境が与えられますよ」という流れになるのです。

そのため、日本のように、途中から「やらされている」ような感覚で部活動を行い、大学に入って、きついのに自分のことではないようなことをやっている、という感覚でやることは、あまり少ないのです。

海外選手の記者会見を見てわかるように、彼らは絶対に言い訳をしません。自分の意思で自信を持って、その時間を選んでやってきたという背景があるからです。

選手の発言で、「国民の皆さんのために」「応援の皆さんのため」といったことは、日本ではよく聞きますが、むしろ海外では、「自分がどう思っているかを伝えたい。それを言うのは当然だ」という考え方です。海外の選手が戦う前に「ここまで来られたのは皆さんのおかげで」というコメントをした記者会見は、あまり聞いたことがないと思います。これは生意気なのではありません。当たり前のことだからです。自分がこんなに頑張ってこんな状態なのだ、と伝えることが自分の使命であり、そこで奮起させるという強さを持っているのです。

摂食障害と「自分で考える力」

田里　メンタルの面についてですが、あまりにもきつすぎて自分を追い込んでしまう学生がいます。特に中高時代のスポーツ経験において、「食べることをトレーニング」とする、いわゆる「食トレ」を強いられたと。それによって、現在食べることを非常に嫌がっているという学生が一定数おり、摂食障害的な症状を呈しているのではないかと見ています。食という点で、トラウマになっている学生に対して、どのようなケアの仕方があるとお考えでしょうか。

有森　現在、そのあたりの取り決めは厳しくなっており、選手の紹介で体重や身長などの情報を載せない、ということが行われています。これは、選手がそれらの情報を気にしすぎて、メンタル面に影響が出ることが少なくないからです。

摂食障害の原因が過度な食トレにある選手もいるでしょう。ただ、それでも競技を続けているのであれば、「どうなりたいのか」を考える必要があります。

「今日のレースはどうだったか」「どこで体力が尽きたのか」「どこがきつくなったのか」などを選手に問いかけ、本人が今やっていることの影響がどう出るかを知らない限り、理解しない限り、この状況は変われません。周囲が「やはり食べた方がいい」「体力やパワーが落ちたでしょう」と言っても、本人が「それでもいい」と一瞬でも思ってしまうと、そこは多分変わらないと思います。

したがって、本人がその状況の中で起こることに対して「どうですか」「何を感じていますか」「どうなりたいですか」「どうしますか」という問いかけを、本人のペースで続けていく必要があります。

大学生であれば４年間、高校生であれば３年間という限られた時間の中ではありますが、本人の意思の確認、つまり「自分で自分の意思を確認する」ということを期待しなければ、いつまで経っても人が決めたことに全部従ってしまうでしょう。人任せになってしまうのです。

「監督が言ったから」「チームの方針だから」「女子の選手はみんなそうだから」という理由で行動するようになり、「あなたはどうなのか」という自分の力を本当に奪ってしまうことになります。

これは年齢に関係なく起こります。子どもの頃から「こうしましょう」「どうする」「どうしたいか」ということを自分で考える力を本当に早くつけさせないと、全てが人任せになり、何か起こったときにも人や監督、チームのせいにしてしまい、その結果、チームを転々とすることになり、最終的には旬を過ぎて終わってしまうことにもなりかねません。

大切なのは、そういったタイミングが来たときに、徹底的に本人に考えさせるということです。どう転ぶかは、それでも本人の意思なのですから、それは尊重できます。しかし、こちらから決めつけているというのは、最終的に本人のためにならないということを認識した上で、指導もしなければならないと思います。

特に摂食障害は女性の選手に多い傾向があります。これは、男性よりも圧倒的にホルモンバランスが崩れる時期が来るため、生理不順などにもがき苦しむことになります。それでも「自分は考えなければならない」「これは自分の体なんだ」と認識することが重要です。

そこを甘くしてしまうと、「周囲が何とかしてくれる」と依存してしまいますが、自分で考えなければなりません。本人にとっては厳しいことかもしれませんが、「考える」という力、「決断する」という力は、そのタイミングでしか身につけられないということを私は強く思います。

ただ、一つ難しさがあると思われる点としてチームプレーが挙げられます。チームプレーの場合、選手本人が一生懸命考えて決断しても、チームという性質上、その意見が反映されにくいという壁に直面する可能性があります。したがって、指導者やチームスタッフは、選手がある程度話したいことを聞き出し、ケアができる体制を整えることが非常に重要です。重要なのは、本人の意思決定を代行することではなく、本人が決めた意思に対し、そのケアをチーム全体で実施するといった環境の整備です。このような環境の整備は、チームスポーツであればあるほど、特に女性アスリートに対して行うことは、非常に大切であると考えます。

女性特有の問題と指導者の理解

田里　ここからは学生の質問を聞いていきたいと思います。前田さんはまさにそういった悩みがあるんですよね。

前田　競技を続ける中で、女性ならではの体調変化や、ホルモンバランスの問題があると思いますが、その中でパフォーマンスに影響した実際の経験などがあれば教えていただきたいです。

有森　実は、私は幸いなことにその影響がなかった、あるいは影響を受けずに済んだ人間なんです。ただ、友人の中には、高校生の頃から生理が来ると身動きも取れないほどの痛みがあり、しばらく練習に参加できないという子がいました。私の高校は女子高だったため、そうしたタイプの選手に対しては、学校内でその理解が当たり前に根付いていました。そのため、あえて明示することなく、比較的すんなりと休むことができました。

しかし、これが例えば男女共学の学校になった場合、やはりそこにいる異性の人々、特に先生方

の理解が必要になります。これは保健に関することを含めて、非常に重要な点です。

有川　女性ならではの問題として、生理痛で部活動を休みにくかったり、また先生方に男性の先生が多いので正直に話がしにくいことがあります。また他にも部活動の強度が上がってくると、生理不順が起こってしまう場合もあるので、そういったときにどのような対応をされていたかをお聞きしたいです。

有森　私たちの時代は恐ろしいことに、生理がなくなったら、「いいぞ、走れるぞ」などと、指導者が平気で言っていました。「生理がなくなるぐらい頑張らなきゃいけないんだよ」という言葉を、声高らかに平気で言っていた指導者のもとで、部活動は行われていたのです。長距離種目など、特にそうです。

指導者が男性であるケースは非常に多いです。これが悪いわけではありません。問題は、その指導者が男性であるか女性であるかに関わらず、その知識をきちんと持ってくれているかどうかです。

会場にいるほとんどの女性の方が、小学校の時に生理の話を先生からされたはずですが、「女の子は教室に残りなさい。男の子は運動場に行って遊んでおきなさい」という分け方ではありませんでしたか。男女一緒に生理について聞いたことがある方は、学校の勉強の場では多分いないでしょう。これ、おかしくないですか。まず皆さんが「おかしい」と思わなかったら、この現象はなおりません。男性が女性の体のことを知らされないまま、一緒に生活するんですよ。娘のいるお父さんが、生理について結婚してから初めて知ったという話もあります。そこで初めて色々なことを知っても、もう遅いのです。

これをどう改善していくか。学校でどのようにそれぞれの体のことを教えるか。これは生理のことだけではありません。男性の体を含めた、人間の体の教育です。

「体育」は英語で「フィジカル・エデュケーション」といいます。「フィジカル・エデュケーションとはなんぞや」と単語の意味を考えたら、男女一緒に体についての教育をしないことがおかしいのです。

男性だけを責めているわけでは全くありません。女性も責めます。「おかしい」と思っても、「言えません」「なんか恥ずかしいです」という考えに甘んじてきたのです。これにまず、両方が気づいてくださらないと、この問題は解決しません。

フィジカル・エデュケーション、これはフィジカルの教育なのです。そこにたまたま、いろんな競技の基礎的なことを教えているんですよ。まず「体のことを知りましょう」というふうに教えるのが、学校の体育ではないでしょうか。そこがものすごく抜けているのです。

田里　体育の教員を養成している我々体育学部の教員としても、フィジカル・エデュケーションの意味を考え、男女関係なくお互いの人間の身体や性といったことを知ることは、まだまだ変えていかないといけないというのは、伺って実感しているところです。

有森　ずっと目を背けてきた現場は山ほどあります。と同時に、もっと皆さんが視野を広げなければならないのが、現在のテーマである多様性です。今、スポーツの現場も、この多様性について非常に大きく揺れ動いています。もはや男女の区別だけではありません。LGBTQ、トランスジェンダー、ノンバイナリーといった全てが含まれています。

このような多様な人々が、同じように表に出て、同じように社会生活を送り、同じようにスポーツをして、同じように社会の中で生きていくのです。まず、スポーツをきっかけとして、このような現状を知るというのは、私は非常に良い機会になると考えております。

田里　なかなかそういう意味ではスポーツ界はやっぱり男性と女性のカテゴリーでわけて競うこと

が多いので、多様性についての認識が遅いのかも知れないですよね。

前田　自分がいる創作ダンス部は女子が８割９割で、男子が本当に少なくて。男性指導者だからこそ生理のことを言いにくいという話もたくさん聞いていたりはするのですが、逆に女子しかいない部活で指導者も女性の先生になったときに、指導者が「生理痛は当たり前」とか、「みんな同じだから自分だけがしんどいわけじゃない」という考え方を持っていると感じることがあります。

田里　結局女性同士の方がきついんじゃないか。自分の体調の基準で「多分大丈夫でしょ、私もあるけど」というような対応になってしまうことがあるということですね。

有森　本当は、例えばメンタルケアができる人を間に置いたり、保健室と連携して先生がそこにいる、あるいは専門家と協力しておくということは、ものすごく重要です。個人によって、体の仕組みが違うこと、特別な事情があることも多い中で、それらを抱えながら競技に取り組む場にケアがないというのは一つの問題だと思います。

選手自身が、専門の方を監督に紹介しておき、その先生から担当のコーチや監督に連絡をしてもらう。そして、自分もその連携を通して現場に入れるようにするといった工夫が必要です。ワンクッション、人を介すことで、監督やコーチが知らないことを生徒が抱えている場合でも、自分が繋がっている人が監督にも繋がっていて、伝えてくれるというコミュニケーションの仕組みを作れば、円満に解決できるのです。

何もできないわけではないのですから、できる限り、自分の工夫、アイディア、新しいことを生み出すくらいの勢いで、自分の大切なことのために、改革に取り組むべきです。みんなである程度意見をまとめて、同じような境遇の仲間たちと「この状況をなんとかしなければならない」という声を揃えて言えるのであれば大丈夫だと思います。

怪我からの克服

田里　有森さんも非常に怪我に悩まされて入院をされ、またマラソンに復活をするというご経験をされていますが、有川さんも実は同じような怪我を負っているということで質問したいとのことです。

有川　有森さんが現役の際に足底筋膜炎で手術をされたとお聞きしていますが、私も最近アキレス腱をまず痛めて、その影響で足底筋膜炎になりました。そういった怪我はスポーツしてる中で誰でも起こりうると思うのですが、どのように克服されたり、または自分のそのメンタル的な部分をどのように受け入れて、その後、心持ちの部分をどのようにされていたかをお聞きしたいです。

有森　痛いところだね。大学卒業してもやりたいと思ってますか。

有川　大学卒業後は自分も剣道はしたいのですが、やはり子どもたちに教えるという立場で続けたいなと思っています。

有森　であれば、もしかしたら今お持ちの目標には間に合わないかもしれませんが、完治させた方が良いです。

右が痛いのにやり続けてしまうと、痛みを感じると人間の体は、自分の意思とは関係なく、その痛みを避けるために体を休ませようと反応します。自分が意識しなくても、体は自然と左に重心を寄せているのです。その結果、今度は左にばかり乗ることになり、左が痛くなった後で右の痛みがなくなったとしても、いきなり左側が痛くなるといったことが起こるわけです。

ですから、痛みのある時はやらないでいただきたい。その痛みを感じる動作は一切やめてほしいのです。

その代わりに、その痛みがどこから繋がっているかを考えてください。アキレス腱を痛めた要因はアキレス腱だけではありません。どこか他の部分が弱く、それが原因でアキレス腱に負担がかかったのかもしれません。だとしたら、アキレス腱を使わない間に、その痛みに繋がっているであろう箇所を徹底的に鍛えるべきです。そのためにも、人体解剖学は絶対に勉強した方が良いです。

自分の体のことを知れば知るほど、「ここを痛めたのですが、この箇所が張っていて、それが原因でこうなったのです」と説明できるし、そうすれば医師は喜んで治療してくれます。「痛いんです」としか伝えられない人は、誰も治してくれません。

だからこそ、自分の体の痛みは、まず取ることが重要です。取るためには自分の体を知ること。そうすると、まず使わないでいる間は、徹底的に周りを鍛えることになります。

その時に思うことはただ一つ。今より治った時に数倍強くなっているということです。今しかできないことをやるわけです。せっかく故障したのですから、「なんで故障したんだろう」「痛いんだろう」と言っていると、神経がどんどん集まってきて痛みは増します。

痛いところは触らないこと、放っておくことで、「あれ、痛くなくなっている」という状態になります。そして、痛いところは放っておき、繋がっているところを徹底的に鍛えるのです。

周りのことは気にしなくていい。周りが急ぐことは関係ないし、周りの目からどう見られても全く問題ありません。忘れられて結構です。自分が自分の姿を忘れなければ、それで全く良いのです。人の目ばかり気にすると、ベースが崩れてしまいます。

だから、一番大事なのは、「目標を持って、絶対に復帰して、絶対に強くなっている」という自分の姿と意思を絶対に見逃さないこと。そこだけ見ていればいいのです。その自信があるなら、何年かかったって戻れます、絶対に。自分が自分の意思や自分の姿を消した途端に、物事は全て消えるのです。

田里　怪我をしたら、逆にチャンスと思って自分の体を知るというきっかけになっているということがすごくいいアドバイスだなと思います。

プレッシャーとの向き合い方

前田　メンタルコントロールという部分で一つお伺いしたいことがあります。自分は、部活の大会

など絶対に決めなければならない大事な場面ですごく緊張してしまいます。有森さんはメダル獲得という大きなプレッシャーがある中で、どのような方法でそのプレッシャーを跳ねのけて、自分のベストなパフォーマンスをされたのか伺いたいです。

有森　「プレッシャー」という言葉は、なぜ日本ではこれほどネガティブな意味合いで使われ続けているのでしょうか。プレッシャーは必ずしも跳ねのける必要はありません。プレッシャーを感じ、ドキドキするほど生きているということは、素晴らしいことではないでしょうか。

　そのように心臓が高鳴るようなドキドキ感は、人は死んでしまったら決して味わうことはできません。苦しいと感じることもあるかもしれませんが、その苦しいという感情さえも、死んでしまえば何も感じなくなるのです。

　私は、不慮の事故で亡くなった友人がいます。彼は当時、非常に厳しい練習をしていましたが、それをこなしていることが彼にとってとても嬉しかったようです。もっと厳しい練習をすれば、もっと強くなれる自分自身が心底嬉しかったのでしょう。それは、ある意味、生きていることを感じる「幸せ」のようなものだったのかもしれません。

　その後、私は両足を手術した後、北海道マラソンで競技に復活し、優勝しました。このとき、私は「幸せだ」と感じました。つらいこと、苦しいこと、そしてドキドキするような感覚を味わえている。これこそが「生きている」ということなのだ、と。

　生きていれば何でもできます。復活もできるし、また頑張ることもできます。「死ぬ」ということは、本当に何も感じなくなることなのだ、と思ったとき、それから私は怖いものがなくなりました。「きついな」と感じた瞬間に、「ああ、自分は生きている」と思うようになりました。「心臓がドキドキしている。ラッキーだ」と思えるくらいに、自分の意識を変えることができました。

　「緊張する」とか「プレッシャー」という言葉を、日本人はなぜこれほどネガティブに使うのだろうかと、私は考えています。

　「プレッシャーは人からかけられている」と思った瞬間に、そう思っている自分自身は整っているのか、という話になります。自分自身が整っていなければ、プレッシャーは自分がかけているものだとは考えられず、人にかけられているものだと感じてしまうのです。

　しかし、私たちは自分で選んだことを行っているはずです。プレッシャーをかけているのは自分自身です。つまり、自分が自分自身に期待をしているということなのです。本来、プレッシャーは他人がかけるものではありません。

　そこまで深く考えられるようになると、日常的に使っているネガティブな言葉も、ポジティブな意味合いに変えて、自らの力にしていけるのではないか、と私は考えています。特に学生の皆さんには、そのように意識を変えてほしいと期待しています。

田里　大変お辛い記憶などもお話しいただきました。その時間を通して、私にも失った友人がいること、そして「今、生きている」からこその意味を改めて実感いたしました。

　もっと有森さんからお話を伺いたいところではございますが、時間が限られております。本シンポジウムでは、有森さんの多岐にわたる分野でのご活躍の経験を踏まえ、学生アスリートの皆様にとっても、そして私にとっても非常に刺激的な、そしてこれからもますます学生たちを教え導かなければならないと、私自身が強く思った次第でございます。

　おそらく皆様、お一人おひとりの心に響いた言葉や、日常で活かしたいと思われた言葉があったかと思います。ぜひそれらをお土産としてお持ち帰りいただき、健やかな日常を送る糧としていきましょう。

特別講演会

日時　10月４日（土）13:40～14:40
会場　奈良県橿原文化会館　大ホール

ポジティブ脳で幸せに過ごすために

登壇者

アン ミカ（モデル・俳優・歌手）

本講演は「ポジティブ脳の作り方」をテーマに、講師であるアン ミカさんが自身の経験を振り返りながら、何事も前向きにとらえ、自分らしく生きていくことについて講演し、参加者が自分自身と向き合うきっかけを得ることを目的として開催されました。

当日は多くの参加者が来場し、世界を舞台に活躍されているアン ミカさんの貴重なお話にうなずきながら聴講する姿や、熱心に耳を傾ける様子が見受けられました。また、アン ミカさんの軽妙な語りに思わず客席から笑い声が聞こえる一幕もあり、終始和やかな雰囲気の中で講演が進行しました。

講演後に実施した参加者アンケートでは、全体として、「前向きな気持ちになった」「自身の考え方を見直すきっかけとなった」という声が多く寄せられ、参加者にとって有意義な時間になりました。

実施した参加者アンケートに寄せられた声を一部抜粋・要約して紹介します。

- 自身の経験を交えての話だったので説得力があった。
- ポジティブ思考で、自分の考えや意見を持ち、自分らしさを確立している姿に聞いている私たちもエネルギーをもらった。
- 男女問わず人としての学びが深い内容であり、生き方そのものや物事のとらえ方を変えるきっかけとなった。
- すぐに実践できることをたくさん教わったので、さっそく生活に取り入れ、ポジティブ脳を作っていきたい。

記念シンポジウム

日時　10月４日（土）14:50～16:30
会場　奈良県橿原文化会館　大ホール

大学生と考える！ジェンダー平等って何ですか？
～自分たちの未来を変えるために～

趣旨

若者は今何を考え、何を求めているのか。未来を担う若い世代にとっての生きやすい社会を実現するため、彼らのジェンダー意識や課題を理解し、今の私たちに何ができるか、具体的なアクションを考えました。

第１部：基調講演
「データから見る、今の若者のジェンダー観について」

講師：櫻井（さくらい） 彩乃（あやの）（一般社団法人GENCOURAGE代表理事）

私は1995年生まれで、女性の地位向上をめざしたあの北京会議の開催年と同い年なんです。この30年で、日本や世界はどれだけジェンダー平等に近づいたのか。私自身、この問いに向き合って活動しています。

私が立ち上げたGENCOURAGE（ジェンカレッジ）は、主に30歳以下の若い人と一緒に、日本に存在するジェンダーギャップを、私たち自身のアクションで変えていくための学びと行動の場を提供しています。活動の柱は、単なる勉強会ではなく、若者の意見をしっかり政策に反映させることです。

実際、2020年以降、私は内閣府男女共同参画局や、財務省の政府税制調査会、財政制度等審議会といった場で、税制や古い制度にジェンダー視点を導入したり、こども家庭庁の立ち上げにも関わり、早い段階からジェンダーの刷り込みが行われないようにする取り組みもしています。奈良県では「子ども・若者の意見をどうやって聞いて、取り組みに反映していくか」というアドバイザーも務めています。

私がなぜこの活動に人生を捧げようと思ったのか。原点は、高校２年生のときです。同級生から「女は黙って可愛くしとけばいいんだよ」と言われて、私は衝撃を受けました。幸いなことに、私は「女の子だからこうしなさい」とあまり言われずに育ったのですが、この一言に「なぜ同じ人間なのに

性別で人生の選択肢が違うんだろう」という疑問が湧いたんです。

そして、世界には女の子というだけで殺されたり、教育を受けられない子がいると知って、「性別に関係なく選べる社会」のために自分の人生を使おうと決めました。

活動を通して、女性の権利のために尽力されてきた「先輩方」の存在が、私たち若者を支えてくれていると実感しました。ジェンダー平等の鍵は、この先輩方の活動と、私たち若者の新しい視点を掛け合わせることだと確信しています。ただ、残念ながら、世界全体でジェンダー格差が完全に解消されるまでには、あと123年もかかると言われています。次の世代に不平等な社会を残したくない、この思いで活動を続けています。

若者のジェンダー意識に関するリアルなデータ

「今の若い人たちはジェンダー平等の意識が高いんでしょ？」と思われがちですが、データを見ると「そうとも言えない」側面も見えてきます。

まず、日本財団の６カ国比較調査を見ると、日本の若者が考える最も重要な課題は、１位が「少子化」（47.6%）、２位が「高齢化」（39.3%）、３位が「経済成長」（25.2%）で、「ジェンダー格差」は５位（19.3%）なんです。他国と比べると、日本独自の少子高齢化や経済の課題が、若者の関心事として強く出ていることが分かります。

一方で、働き方や家庭観を見ると、少しずつ変化が見えます。厚生労働省の調査では、「家庭よりも仕事を優先する」（69.9%）や「自分のキャリアよりも家庭を優先する」（72.9%）といった項目について、約７割が「男女は関係ない」と回答しています。ただ、国際的に見ると、「夫婦両方が働いていることが一般だ」という考え方は、日本が66.6%と、他国（アメリカ、イギリス、中国など）より低いんです。特に、学歴や所得が高い女性は結婚相手を見つけにくいと思っている人が、日本は55%と、他国に比べて顕著に低いのも特徴的です。これは、日本社会に根強く残る「女性らしさ」や「男性役割」のステレオタイプが影響しているのかもしれません。

しかし、企業選びの意識ははっきりしています。電通総研コンパスの調査によると、就職先を選ぶ上で、給与や職場の雰囲気の次に、SDGsに対する姿勢や取り組みを重視するという回答が19.1%に上っています。特にSDGsへの取り組みが企業選びに「とても影響する」または「少し影響する」と答えた就活生は９割を超えています。彼らが重視する最大の理由は、「将来性のある企業だと判断できるから」（54.6%）なんです。

さらに、SDGs17の目標の中で、最も関心が高いのが「5.ジェンダー平等を達成しよう」（35.7%）です。これは、若者が社会を変える力を持つ企業や目標を重視する「エシカル就活」の傾向を裏付けています。

刷り込まれるステレオタイプと「静かなバックラッシュ」

若い世代はジェンダー課題に敏感なんですが、同時に、早い段階からジェンダーステレオタイプが刷り込まれているという問題もあります。

東京都の調査（令和５年度）によると、進路・職業について「性別による思い込みがある」と答えた高校生は53.9%で、小学生の41.1%よりも割合が高くなっています。特に、理系科目は男性の方が得意だと女性で33.2%が思っており、文系科目は女子の方が得意だという意識も見られます。家事・育児についても、男女ともに約５割が「女性の方が向いている」と考えているんです。

こうした思い込みは、主に親・保護者（55.9%）からの影響が非常に大きいことがわかっています。私たちはアンケートやヒアリングを通して、「男は泣くな」「女の子なんだから可愛くしとけばいいんだよ」といった、過去に言われた「男らしく/女は○○」という言葉に今もモヤモヤを感じてい

る若者の声を多く聞いています。

そしてもう一つ、深刻なのが「静かなバックラッシュ」（反動）の兆候です。

「男性は平等を支えるために多くを求められすぎている」と感じる日本人の割合は、2019年の調査から６年間で10ポイント以上上昇し、45％に達しています。Ｚ世代の男性の中には、平等への試みを「やりすぎだ」（30％）と感じる人も増えているんです。広報や若者の声を聞く活動をしていると、「自分たちの世代が不平等をゼロにしたわけではないのに、なぜ自分たちが（女性優遇に見える）負の遺産を背負わなきゃいけないのか」という声も聞かれます。

ジェンダー平等は、女性のためだけじゃなく、男性も「男だからこうしなきゃいけない」という生きづらさから解放されるためのものだというメッセージを、もっと丁寧に共有していく必要があります。

若者の声を政策につなぐ「橋渡し役」

私たちは、若い人たちの声が社会に届きにくく、「形だけの参画」に留まる現状を非常に問題視しています。

そこでGENCOURAGEは、若者の声と社会をつなぐ「橋渡し役」が必要だと考えています。

2020年には、内閣府男女共同参画局が実施した「第５次男女共同参画基本計画」の素案へのパブリックコメント（パブコメ）に対し、「#男女共同参画ってなんですか」というプロジェクトを立ち上げました。難しい素案の内容を若者向けに分かりやすく伝え、結果、フォロワーゼロの状態から約１ヶ月間で1050件ものユースの意見を集めて国に提出しました。

このユースの意見は、専門調査会の資料となり、就活セクハラ対策や緊急避妊薬のOTC化の検討といった具体的な政策検討につながったんです。選択的夫婦別姓の議論も巻き起こりました。

こうした成功体験を通じて、若者が「自分の行動で社会は変えられる」という実感を持つことが非常に重要だと感じています。

私たちの主軸である「ジェンカレ」プログラムでは、ジェンダーについて学び（レクチャー）、対話（ワークショップ）を通じて、自分たちの身近な問題に気づき、行動を起こす（アクション）方法を学びます。

ゼミ生たちからは、多様なアクションが生まれています。例えば、「包括的性教育の拡充をめざした武蔵野市議会への陳情提出」、さらには「男性アクティビストを増やす会」の発起など、ジェンダー課題は、性教育、ビジネス、地域、家族など、あらゆる分野に関わっていることがわかります。

若者が変われば社会が変わる、と短絡的に言うつもりはありません。今の大人の皆さんによる取り組みと、若者世代への継続的な教育や機会の提供、両方のアプローチが不可欠です。

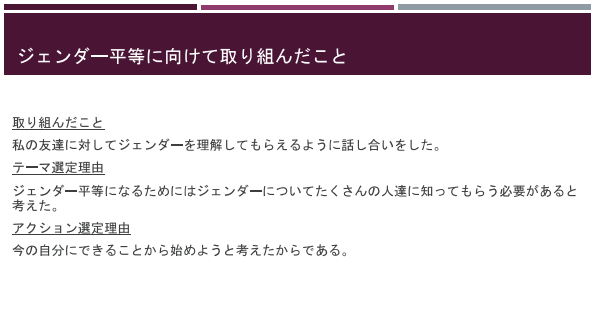
性別にとらわれず、誰もが自分らしく生きられる社会をめざして、私たち一人ひとりにできることを行動に移していきましょう。

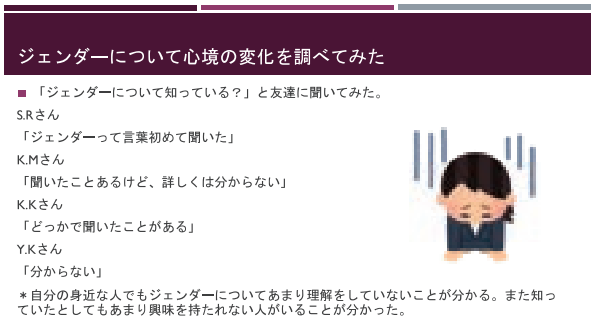
第２部：トークセッション
「ジェンダー平等の実現に向けて、今日から私ができること」

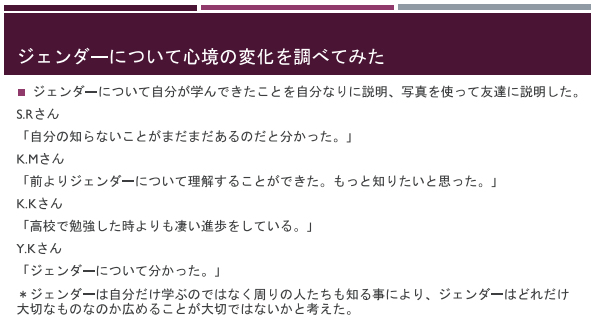
コーディネーター：櫻井 彩乃
パネリスト：　2025年５月24日に開催されたプレイベント「1day ジェンカレ in 日本女性会議2025橿原」参加者の中から選出された大学生
岩元（いわもと） 優芽（ゆめ）（奈良大学　文学部１年）
福田（ふくだ） 実莉（みり）（奈良教育大学大学院　修士課程２年）
沼田（ぬまた） 彩希（さき）（帝塚山大学　法学部２年）
金城（かなしろ） 光（ひかり）（帝塚山大学　法学部２年）

櫻井
　ここからは、５月の1dayジェンカレin日本女性会議2025橿原に参加し、その後アクションをした４人の学生さんと一緒にパネルディスカッションをしていきたいと思います。５月のイベントにどんなことを思って参加し、その後どんなことをしたのか、お話を聞いていきたいと思います。

金城
　私は大学の先生から「1dayジェンカレ」を紹介してもらい、興味があったので参加しました。ゼミでもジェンダーについて勉強していますが、ゼミでは仲間内での感想を言い合うだけです。ジェンカレに参加したことで、今まで勉強してきた仲間たちと、参加してくださった他の方たちとも意見を交換できたので、とても良かったと思っています。







沼田

私も大学のゼミの先生から紹介していただいて参加しました。以前からジェンダーに関して興味がありました。自分の考えを共有し、その場で他の人の意見を聞いて、私の中で考えつかない意見もあったのでなるほどと思い、学びになってよかったと感じています。私が元々興味を持ったのは、性別によっての役割とか、性別に沿ったことをしなきゃいけないとかあまり思わなかったからです。性別とは違う心の性別のような形にも共感できるところがあったので、興味を持ちました。

ジェンダー平等の実現に向けた
MY ACTION REPORT

1dayジェンカレin橿原に参加し、ジェンダー平等の実現に向けて、私は今回ジェンカレで学んだ事や自分の意見などを家族や友人に話をしました。

自己紹介

名前：　沼田彩希

所属：帝塚山大学法学部法学科

ジェンダー平等に向けて取り組んだこと

私はに興味を持ち、下記のことに取り組みました。

❶取り組んだこと ※いつどこで誰に何をしたのか詳しく書きましょう！

家族には家で夜のご飯食べた後に、友人には大学の休憩時間にジェンカレで学んだ事やそれに参加して思ったことを話しました。

❷テーマ選定理由

以前から人と話してみたい内容だったからです。

❸アクション選定理由

様々な人にジェンダーについて少しでも知ってほしいと思ったからです。

アクションの様子

■友人

友人たちは賛否両論だった。「好きにしたらいい」など肯定的ではあるが興味がない人もいた。また「男がスカートはくのはむり」という意見もあった。しかし話を聞いていると似合っていればいいみたいな考えがすこしあった。

■家族

昭和の人なのでやはりジェンダーについては「変」「おかしい」という意見が多く違和感しかないという反応だった。しかし同時に納得してくれる件もあった。

取り組んでみての自分や周囲の変化、感想

自分の変化

性別についての世間の問題を改めて知りそれを人に伝える、説明するのは改めて難しいことだと感じました。
当然ですが人それぞれ意見があるので違う意見でも正しいと思うことがありました。

周囲の変化

納得する人や肯定的考えの人はもちろんいましたが逆に少し否定的な意見もありました。例えば「息子のは別にいいけど男として、女としての役割はしなければならない」という意見で正しいですが否定的と感じました。

感想

私はこのアクションをしてみてジェンカレの時のようにみんなが肯定的ではなく肯定も否定もある様々な意見が多数あると改めて知りました。中には否定的ではあるが正しいことを言っているような意見もあって悩ましい内容だとも思いました。
しかし知ることで考えが変わるということもあると思いました。
私は今後、生駒市のジェンダーフリーウィーク(男女平等参画)に参画しようと考えております。

©一般社団法人GENCOURAGE

岩元

普段は文化財について学んだりしています。大学の先生が「こんなのあるよ」って紹介してくださって、参加しました。参加して良かったのは、保育とか、ファッションとか、自分の全く知らない世界でのジェンダーギャップについて深めることができたことです。

ジェンダー平等の実現に向けた
My Acton Report

自己紹介

名前：岩元優芽

所属：奈良大学文学部 文化財学科

ジェンダー平等に向けて取り組んだこと

・主に行った活動

- 実際に婦人科に行ってみた。
- 「女性と歴史」をテーマに本の選書を行った。
- 女性の身体と健康についての知識を付けた。

・活動を行った理由

自身が性別に違和感を覚えて生活してきたという背景事情から、それで苦しむのは他者と自分が異なるからであり、当たり前だと考えていました。

ですが、自分が実際に苦しんでいることは何なのか改めて考えたときに生理不順などの女性特有の体調の変化や自身の身体的性別を受け入れることが難しいことからくる医者にかかることへの抵抗などが原因だと考え直していた時期に、LGBTQの方や主婦層への医療についてなどに興味を持ち、詳しく調べたいと感じたからです。

実際の活動

1. 実際に産婦人科に行ってみた

2. 「女性と歴史」をテーマに本のために選書を行った。

3. 女性の身体と健康について調べた。

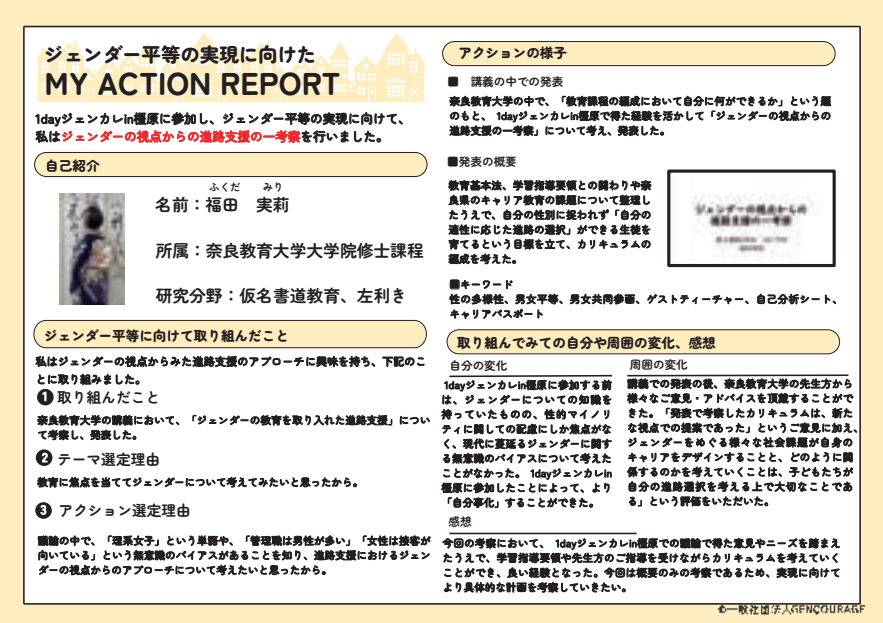
婦人科

個人的に読みやすかった本 BEST3

感想と展望

福田

私は普段、仮名書道教育の研究をしています。他の３名と同じく、大学の先生からの紹介で参加しました。今までは、自分の主観的な意見しかなかったのですが、他の参加者の方々の意見を聞いて、ジェンダーに関する様々な価値観や、モヤモヤした経験などを知ることができて、とても良かったと思っています。



ジェンダー平等の実現に向けた
MY ACTION REPORT

1dayジェンカレin橿原に参加し、ジェンダー平等の実現に向けて、私はジェンダーの視点からの進路支援の一考察を行いました。

自己紹介

名前：福田（ふくだ）　実莉（みり）

所属：奈良教育大学大学院修士課程

研究分野：仮名書道教育、左利き

ジェンダー平等に向けて取り組んだこと

私はジェンダーの視点からみた進路支援のアプローチに興味を持ち、下記のことに取り組みました。

❶ 取り組んだこと

奈良教育大学の講義において、「ジェンダーの教育を取り入れた進路支援」について考察し、発表した。

❷ テーマ選定理由

教育に焦点を当ててジェンダーについて考えてみたいと思ったから。

❸ アクション選定理由

議論の中で、「理系女子」という単語や、「管理職は男性が多い」「女性は接客が向いている」という無意識のバイアスがあることを知り、進路支援におけるジェンダーの視点からのアプローチについて考えたいと思ったから。

アクションの様子

■ 講義の中での発表

奈良教育大学の中で、「教育課程の編成において自分に何ができるか」という題のもと、1dayジェンカレin橿原で得た経験を活かして「ジェンダーの視点からの進路支援の一考察」について考え、発表した。

■発表の概要

教育基本法、学習指導要領との関わりや奈良県のキャリア教育の課題について整理したうえで、自分の性別に捉われず「自分の適性に応じた進路の選択」ができる生徒を育てるという目標を立て、カリキュラムの編成を考えた。

■キーワード

性の多様性、男女平等、男女共同参画、ゲストティーチャー、自己分析シート、キャリアパスポート

取り組んでみての自分や周囲の変化、感想

自分の変化

1dayジェンカレin橿原に参加する前は、ジェンダーについての知識を持っていたものの、性的マイノリティに関しての記憶にしか焦点がなく、現代に蔓延るジェンダーに関する無意識のバイアスについて考えたことがなかった。1dayジェンカレin橿原に参加したことによって、より「自分事化」することができた。

周囲の変化

講義での発表の後、奈良教育大学の先生方から様々なご意見・アドバイスを頂戴することができた。「発表で考察したカリキュラムは、新たな視点での提案であった」というご意見に加え、ジェンダーをめぐる様々な社会課題が自身のキャリアをデザインすることと、どのように関係するのかを考えていくことは、子どもたちが自分の進路選択を考える上で大切なことである」という評価をいただいた。

感想

今回の考察において、1dayジェンカレin橿原での議論で得た意見やニーズを踏まえたうえで、学習指導要領や先生方のご指導を受けながらカリキュラムを考えていくことができ、良い経験となった。今回は概要のみの考察であるため、実現に向けてより具体的な計画を考察していきたい。

©一般社団法人GENCOURAGE

１．学生によるアクションとその成果・課題

櫻井

ここから皆さんそれぞれ取り組んだことをお話しいただきたいと思います。

金城

私のアクションした内容は、友達に一人でもできるような内容にしたいと思い、友達に対してジェンダーについてどこまで知っているかが気になり、心象を調べることにしました。県庁さんなどに行って話をするのはまだ自分にはレベルが高いと思ったので、初めの一歩として友達と実際に喋ることにしました。

活動をしてみてよかったことは、友達がジェンダーについて知ることができたことです。やっぱり自分だけ知っていても広めることができないので、少しでも多くの人に知ってもらうことで広まっていくのではないかと思ったからです。難しかったことは、友達がジェンダーについてそこまで知ってるわけではないので、どういうふうに簡単に簡潔に、相手に伝えることができるのかというのがすごく難しかったです。私自身、説明が苦手なところもあって、ちょっとぎこちない話し方になったと思うんですけど、頑張って伝えることができたので良かったと思っています。話すときに、イラストとか漫画形式のような見えるものがあれば、分かりやすく埋めて

これたのではないかと思いました。

沼田

私のアクションした内容としましては、1dayジェンカレで学んだことや感じたことなどを、友人や家族などいろんな人に話して、ジェンダー平等とは何かとか、現状どのような問題があるのかを共有したことです。

やってみて良かったことは、ジェンダー平等といっても、最初は当事者とか自分の身近なことは少ないと思っちゃうことが多いんですが、話してみると、「女の子は座ってて足を開けちゃいけない」とか、「男の子はかわいいものを好きじゃ駄目」とかいう、そういう点で共有・共感できたことです。たくさんの方が共感してくださって、ジェンダーのことを他人事ではなく、身近に感じてもらうことができて良かったです。

難しかったことは、やっぱり全部というのはあんまり広がってないもので、理解してもらうことが難しくて、反対意見とは言いませんが、やっぱりよく思わなかったり、性別に沿った役割が正しいと思う人が何人かいたことです。若い世代の方々はあんまりそういう意見は少なかったんですが、やっぱり上の世代の方は、価値観が変わっていて、そういうのは良くないっていう方が少し多かった気がします。親とジェンダーについて話すのはハードルが高かったですが、チャレンジしました。

岩元

私が主に行った活動は三つあります。一つ目が、自分の通ってる大学図書館での「女性と歴史」というテーマ展示です。この活動を通して、こういうことあったんだとか、逆にこういうときは案外男女平等だったんだ、といういろんなことを知ることができました。元々、伝統とか歴史と言われていることに懐疑的になった方がいいのかな、と思ったりしました。

二つ目の活動が、女性の体についての理解を深めようということです。私自身、小学校中学校でそういった教育をあまり理解してなかったんですが、自分で実際に産婦人科に行ってみました。行ってみたら、女性の体について書かれた資料が無償で配布されていることを知ったり、そういう取り組みがあることも知れて良かったです。私は元々生理痛がひどくて、受験勉強中に２週間ぐらい寝込んだりして、勉強的にロスしていた経験があります。今は漢方をすすめていただいていますが、親身になって相談してくれるドクターを見つけ、「何かあったときに駆けつけるところ」ができたのはすごくいいことだと思っています。

三つ目が、医療と性的マイノリティについて調べる活動です。レズビアンと産婦人科というテーマを挙げている本を読んで、性的マイノリティを持っていると、アウティングをしてしまう恐れがあるので、医療にかかりづらいという話を聞きました。どんな性別であれ、医療に関わることへの抵抗とかがない方がいいと思ったので、この問題を伝えたいと思っています。

福田

私は教育課程の編成という課題に対し、1dayジェンカレで学んだことをどうやって教育に取り入れることができるかを考えました。「性別にとらわれることがなく、自分の適性に応じた進路の選択ができる生徒を育てる」というテーマのもと、「ジェンダーの視点からの進路支援の一考察」という題で教育課程の編成を考察し、大学の授業で発表しました。性の多様性は、やはり悩んでいる方でなければ、“自分ごと”化することが難しいテーマだと思います。例えば、私は髪型を刈り込みにしたら「女の子なのに…」と言われた経験があります。こういう小さなモヤモヤは誰しもが経験していることだと思います。そのような身近な経験から、“自分ごと”化することが大事だと思いました。授業で発表したときに現職の先生方から「新しい視点での考察、提案でとても良い」というような意見をいただきました。ただ、「カリキュラムが限られている学校という場では実現が難しいかもしれない」という意見もいただいたので、現場の先生方にも意見を頂戴した上で、配慮し、考察を深めていく必要があると思います。

2．アクションを通じた気づきと今後の展望

福田

私は、参加者と、自分自身が経験したジェンダーに関するモヤモヤについて交流した時に、多様なモヤモヤがあることに気が付くことができました。特に、男性の方が持つモヤモヤに対して衝撃を受けました。ジェンダーに関するモヤモヤはそれぞれで違い、多様にあることを知ることができました。この経験はとても良いものだったと思います。

岩元

私は、自分の学んでいることと何か繋げることがあるんじゃないかと考えて、無形文化財（お祭り、だんじり）とジェンダーを繋げて考察しました。だんじりの「女人禁制」は命がけで行う祭事で、身体に触れてしまうリスクや力の差に気を使えないという点も踏まえて、一概に悪いことではないのかな、とも思っていて、女性が事故で亡くなった例があったり、文化を守るために線引きをしているという側面も考えていくと、逆の視点での深まりがありました。

金城

私は、なかなか自分から挑戦していくタイプではなかったので、今回自分でアクションを考えて、実際に行動を起こしてみて、やっぱり一歩踏み出すのが大切なんだと自分の中では思いました。「結果はどうであれ、自分の実際に行動を起こすことは大切ではないか」と思いました。

3．今後していきたいアクション

金城

日本人だけでなく海外の人にもジェンダーについて知ってほしいという気持ちがあり、スペイン語を使って海外の人向けに講演を開いてみたいです。

沼田

私がしたアクションはほぼ日本人相手だったので、海外の方のジェンダーの意識や価値観について調査してみたいと思いました。

岩元

私は高校受験のときに生理の影響で月に２週間ほど大きく体調を崩したりしていたので、放置しちゃいけないよという啓発リーフレットのような、知識を身につけられるものを作りたいです。また、性的マイノリティを持つ人が医療にかかることに抵抗がある問題について、苦しんでいる人のデータがないことが課題なので、どんな性別の人であれ、医療に関わることに抵抗がなくなるための活動を考えたいです。

福田

私は左利きで書道を勉強していて、「左利きなのに何で？」と言われることでモヤモヤを感じています。これは、ジェンダーのモヤモヤと似ていると感じました。ジェンダーの問題に限らず、多様な価値観や多様な個性を認めることができる生徒を育てるためにはどうすればいいのかということを、教育の中で考えたいなと思っています。

４．総括

櫻井

皆さんそれぞれのアクションは、誰かに何か伝えるとか、一歩踏み出すってすごくハードルがあると思うんですが、素晴らしいことです。やはり、先生の影響はすごく大きいです。学校は平等だと思われがちですが、一人ひとり刷り込まれたものって自然と出てしまうので、ジェンダーや多様性の視点から取り組むことは本当に重要だと思います。

私たちは、これまで多くの方が声を上げてくださったおかげで社会は前に進んで、今、次のステージの入口に立っている、ドアが開いている状態だと思います。若い人は平等の意識を持っているから大丈夫だと期待されがちですが、残念ながらそうではないんです。無意識のうちに刷り込まれているものをしっかりと把握して、再生産しないということを作っていく必要があります。

今、若い人に聞いていると、この先の未来を見通せないという人が非常に多いんです。そんな社会では、変化は起こりにくいと思います。この国の若い人が何か未来に希望を持てるように、しっかり若い人の声を聞いて、若者をその中に入れて、若者を応援するということをぜひしていただけたらと思っています。

ジェンダーギャップ解消まであと123年かかると言われていますが、昨年は133年でした。この１年間で10年縮んだんです。ここにいる一人ひとりが日々の生活を変えて、それを周りにちょっとずつ広げていくことができれば、その期間はさらに縮まっていくんじゃないかなと思います。性別に関係なく、一人ひとりが自分らしく生きられる社会を作っていきましょう。

かしはら未来会議

日時　10月5日（日）10:00～13:00
会場　かしはら万葉ホール 1階ロマントピアホール

橿原市の未来を担う中高生が提案！
「日本国はじまりの地からはじめるWell being なまちづくり」

参加校：橿原高等学校　橿原学院高等学校　聖心学園中等教育学校
光陽中学校　八木中学校　畝傍中学校

司会：　ヒラコ

審査員：巽（たつみ） 美奈子（みなこ）（有限会社 巽繊維工業所 代表取締役）
松井（まつい） 昌宏（まさひろ）（橿原市観光協会 事務局長）
宮地（みやじ） なおみ（株式会社 ppp plus Company）
若森（わかもり） 睦司（あつし）（橿原市役所 企画戦略部 部長）
奥村（おくむら） 政哉（まさや）（株式会社NaraDeWa 代表取締役）

第１部　参加校からの発表

１．光陽中学校

テーマ：橿原市をより良くする取り組みの第一歩　明るくて安全な街にしよう
発表の概要：カーブミラー、街灯を増やすことで、安全で明るい街をつくることができます。
【現状の課題分析】
通学路の危険性：発表者は実際に、通学路にカーブミラーが少なく、見通しの悪い場所で事故に遭いかけたことがあります。特に小さい子どもの安全確保の観点から、カーブミラーの増設は喫緊の課題と言えます。
夜道の不安：塾帰りなどで街灯が少なく暗い道が多く、夜道を安心して歩けないという不安を持つ方は多いです。人通りのある場所でも大きい道から外れると街灯が少なくなり、光が弱いため暗く感じることがあります。
【未来への提案】
１．カーブミラーの増設に向けた地域連携の促進
○カーブミラーの設置には地元自治会関係者との意見調整が必要です。市や町の掲示板にポスターを貼り、住民へ積極的に呼びかけを行います。
○自治会が主体となって近隣住民と話し合い、危険な場所を共有することで、地域住民とのつながりを深め、安全対策を地域活性化に結びつけるモデルを提唱します。
２．街灯の増設と明るい街づくり
○LED防犯灯設置補助金の情報を広げる：街灯設置のコスト負担を軽減し、自治会が積極的に防犯灯を増やせる環境を整え、夜道を明るくし安心・安全な街をめざします。
○シンボル的なイルミネーションの設置：橿原市内のイベント不足、特に学生が興味・関心を持つイベントの不足を補うため、イルミネーションをイベント化します。大和八木駅前でやっているイルミネーションのように、人通り増加と安全面向上の相乗効果を狙います。
審査員からのフィードバック（巽審査員）
車社会に生きる大人では気づきにくいカーブミラーや街灯の問題を、実体験に基づいた学生の視点から掘り下げた点が良かったです。街灯の数を実際に数えるなど、疑問を自ら行動して確認した調査姿勢、そして具体的な対策案として補助金情報を提示した点も大変素晴らしく、勉強になりました。

2. 八木中学校

テーマ：あそびがいっぱい！ぼくらのまち橿原　歴史もプールもぜんぶ冒険！

発表の概要：遊び場が少なく、また交通費が高くつくという課題から、歴史と遊びを融合させた様々な遊びを作り、誰もが住みたくなる街づくりをめざします。

【現状の課題分析】

橿原市の気になる因子として、医療・福祉の不足、市民プール閉館をはじめとした市内遊び・娯楽の不足と、遊びに行くための交通費が高いこと、空き家などの都市景観問題、キャッシュレス・フリーWi-Fi不足によるデジタル社会への遅れ等があります。

逆に橿原市の魅力としては、歴史的建造物が豊富、大和八木駅を中心とする交通の便の良さ、商業・教育の充実や、自然災害が少なく暮らしやすいこと等があります。

【未来への提案】

誰もが住みたくなる街の実現に向けた、歴史と遊びを融合させる４つのアイディア

1．全天候型プール：ウォータースライダー、流れるプール、温水プールなどを備えた屋内プールを作り、遠出の交通費節約と、天候に左右されず年中いつでも遊べるレジャー施設で市民のＱＯＬを高めます。

2．空き家を「子どもクラブハウス」へ：空き家をリノベーションし、ゲーム、読書、勉強、カフェなどが一体となった学生の居場所を創出します。地域交流のコミュニティスペースとしての役割や観光客が泊まる宿泊施設としても活用。

3．.歴史アスレチックパーク：古墳や城をイメージした大型遊具（古墳スライダー、勾玉シーソーなど）を設置し、遊びながら歴史を学べる公園を作ります。夜間はライトアップで幻想的な空間を提供し、新たな観光資源としての活用も見込んでいます。

4．子ども向け公共交通機関の利便性向上：子どもバス無料デー（月１回）の導入や、プール・アスレチックパークへの「遊び場直通シャトル」を運行します。子どもだけでもっと自由に出かけられる環境を整備します。

審査員からのフィードバック（松井審査員）

非常に身近に分かりやすくまとめられた提案です。聞き手がその場所にいるかのように想像しやすい内容でした。全天候型プールの提案は、単なる建設だけでなく、「そうするとどういう効果が生まれるか」まで考え抜かれている点が素晴らしいです。また空き家を活用した「子どもクラブハウス」の発想も非常に面白かったです。歴史アスレチックパークは歴史学習の一つの入り口として優れており、実現に向けて市も検討したいと思います。

3．畝傍中学校

テーマ：人が集まりつながる楽しい街へ

発表の概要：人口減少を食い止めるため、未来の理想の橿原市として、誰もが暮らしやすい「人が集まりつながる楽しい街」を作っていきます。

【現状の課題分析】

地域幸福度指標のグラフから、橿原市は遊び・娯楽の客観指数に対し主観指数が上回っている、つまり娯楽施設が多くなくても市民は一定の満足感を持っていることが読み取れます。

その一方で子育て関連の指数は50を下回っており、子どもの数の減少が全体人口の減少財政のひっ迫につながっているといえます。更なる人口減少を防ぐため、保育園の待機児童を減らす、放課後児童クラブの整備等、子育て支援の充実が大切です。

【未来への提案】

人と人が温かくつながるため、「図書館」と「こども食堂」に注目しました。

1．図書館の活用と「学生の居場所」創出

○既存の図書館や自習スペースは静かで勉強がしやすいですが、友達と気軽に話しながら勉強できたり、グループワークに使えるような家、学校、塾以外の「学生の居場所」となる施設となれば良いと考えます。

2．こども食堂のさらなる充実と地域交流の促進：

○こども食堂は、貧困に苦しむ子どもたちへの食事、団らんの提供を目的としていますが、子どもから高齢者まで学校で出会えない人たちと定期的に交流できる「地域の居場所」としての役割もあります。顔も知らない人たちから支えられている事実と、自分が地域の一員であることを実感できる大切な場所です。

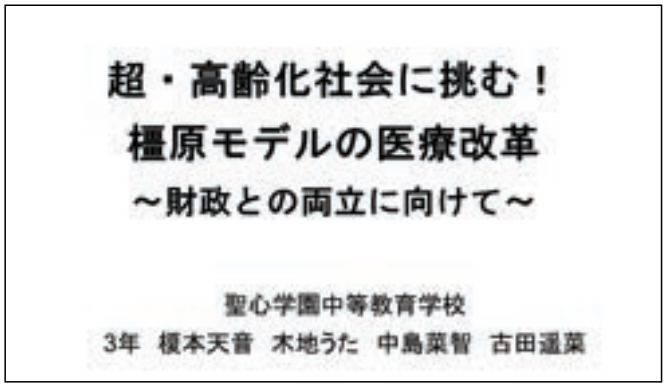
○具体的な活性化策：市のイベント収入を財源とし、こども食堂への助成金を充実させること、SNSでの情報発信強化や、家とこども食堂をつなぐ送迎バスの運行で、より子どもたちが利用しやすい環境を作ります。

審査員からのフィードバック（宮地審査員）

問題点の調査と解決への意欲 現状の問題点をしっかりと調べた上で、「そこで終わらない」、つまり解決に向けてどう動くかという点にワクワクさせられました。

こども食堂の利用促進策の具体性、大人が「場」を作ることはできても、その場が「どうやって利用されるか」という点まで掘り下げたことも評価できます。総じて非常にきれいにまとまっており、「こども食堂」というテーマが会場の参加者全員の頭に残る、インパクトのある発表でした。

4．聖心学園中等教育学校



テーマ：超・高齢化社会に挑む！橿原モデルの医療改革～財政との両立に向けて～

発表の概要：橿原市の魅力にあわせた高齢化社会への対応として独自の医療モデル「橿原モデル」を提案します。

【現状の課題分析】

橿原市は県内で人口１万人あたりの医師数が最も多く、医療資源は充実しています。その一方で全国平均よりも高齢化が進んでおり、それに比例して病気や介護のニーズと、医療・福祉の負担が増大しています。特に、医師・看護師の大病院への集中と、高齢患者による大病院での高度医療受診が医療費の増大につながっています。また、特定健診実施率が低いことも含め、高齢化と医師の偏在によって地域医療が十分に機能していないことが課題です。

【未来への提案】

めざす未来の姿は「橿原市の魅力とあわせ高齢化社会に対応する街」であり、次の２つの柱で構成される「橿原モデル」を提案します。

１．暮らしと自然にやさしい医療環境

○在宅診療・オンライン診療の体制整備：通院が難しい高齢者も自宅やオンラインで安心して診療を受けられる体制を整えます。

○自然の恵みを生かした森林療法の導入：橿原市オリジナルプランとして、橿原神宮でのセラピーウォークや自然茶ブレイク等を通して、誰もが気軽に健康作りに参加できます。

２．“いい医療”を長く使えるしくみ

○かかりつけ医への誘導：「大病院で診てもらいたい」という思いから、高齢患者が初めから大病院を受診してしまう現状に対し、まずは地域のかかりつけ医へという意識を広めます。SNS での情報発信やポスター作成のほか、どこの病院に行けばいいか分からないという悩みを解消する「かかりつけ医候補チラシ」を配布します。

○「かかりつけ診察券」地域共通ポイントカードの導入：健康相談や通院でポイントが貯まり、地元のお店で使えるようにすることで、定期的な健康診断を促し、病気の重症化を防ぐ仕組みを構築します。

審査員からのフィードバック（奥村審査員）

医療領域という難しいテーマに対し、具体的な数値や分析に基づいて多角的な手法（森林療法、かかりつけ医の活用など）を提案した点は非常に高く評価できます。一方で、市民が「しっかりしたところで見てほしい」という心理で大病院に行くという課題解決については、アイディアに掘り下げの余地があると感じました。全体としては市として取り組むべき素晴らしい提案だと思います。

5．橿原高等学校

テーマ：橿原市の交通安全対策について

発表の概要：奈良県警察本部公表の「交通事故多発交差点ワースト10」に橿原市内の交差点が４か所も含まれています。事故のない安心安全な街をめざした交通安全対策を考えました。

【現状の課題分析】

日本損害保険協会の資料分析、橿原署交通課長への聞き取りや、事故多発交差点の現場観察を行った結果、事故の共通原因として大きな交差点で交通量が非常に多く、スピードが出やすいため、減速や停止時の速度変化が激しいことがわかりました。また個別の原因として変則四叉路、六叉路、八叉路による渋滞、停止線が手前にある、店舗が多く出入りが頻繁など、各交差点とその周辺環境による構造的な問題を発見しました。

【未来への提案】

橿原署交通課長の「取り締まりや交通規制は対症療法でしかなく、道路構造・環境の改善による根治治療が理想。ドライバー自身が交通事故を自分事として感じられる取り組みが必要」という言葉に着目し、何よりも大切なのは、ドライバー一人ひとりが安全を最優先する意識を持つことであるという結論を出しました。そこでドライバーの意識改革を促すため、「北風と太陽」のような２側面からの対策を考えました。

1．北風（厳しさ）：事故の悲惨さを伝える活動や、違反者への厳罰化。

2．太陽（楽しさ・報酬）：

○太陽案１（愛着）：各幹線道路に「藤原宮跡コスモスロード」のような愛着のある名称を付け、ガードレールや標識などに装飾を施し、きれいで目立つ道路にします。

○太陽案２（成果報酬）：成果報酬型アプリを開発し、各道路の無事故無違反状態の継続、または個々のドライバーの無事故無違反状態の維持に対しポイントを付与。周辺施設で利用できるようにすることで、交通安全と街の活性化を両立させます。

審査員からのフィードバック（若森審査員）

警察への聞き取りや現場調査、写真撮影など、肌で感じた調査に基づくプレゼン資料は非常に優れていました。スイスの「ビジョン・ゼロ」など具体的な海外事例を紹介した点も評価できます。提案は、多大な費用と時間がかかる道路構造の根本的な変更ではなく、比較的ソフトな対策に焦点を当てていました。「北風と太陽」（飴と鞭）を用いて人の心理を活用し、道路自体に愛着を持たせるという着眼点が斬新です。行政としても、この提案をきっかけに交通事故のない楽しい橿原市をめざすべきと考えます。

6．橿原学院高等学校

テーマ：高校生の通学路からつなぐ“はじまりのまち“構想～飛鳥・藤原の歴史を日常に取り込み、橿原市の主要駅と高校をバスでつなぐ～

発表の概要：橿原市の歴史を学ぶ時間を高校生の通学時間に取り込むことで、「移動」から「学び」への転換を図ります。

【現状の課題分析】

橿原市の「Well-being指標」において、移動・交通、教育機会の豊かさの面が主観・客観ともに低いことがわかりました。学内で行ったアンケートでも約半数が交通に課題を感じており、特に「橿原神宮前駅と橿原学院を結ぶバスがあればいいのに」という声が多くありました。また、橿原市は「日本国はじまりの地」として歴史的価値が高いにもかかわらず、高校生は通学路にある歴史資源に触れる機会がなく、素通りしてしまう現状があります。

【未来への提案】

高校生の通学を支援する新路線バス「飛鳥まなび号」を導入します。

〇既存の路線や停留所を活用することで運用コストを抑えつつ、停留所を歴史資源に沿って配置します。

〇バス車内に「まなびパネル」を設置し、飛鳥の歴史などについて学べるようにする。通学時間という「移動」を「学び」の時間に変え、高校生が歴史に触れ、街を知り、未来を考えるきっかけとなる「走る教室」をめざします。

〇期待効果：通学環境の改善だけでなく、通学中の歴史接触による郷土愛と学びの育成、地域資源の再発見による観光・教育の両面での活性化、若者の参画意識向上といった多岐にわたる効果が期待できます。

審査員からのフィードバック（宮地審査員）

１つのテーマを深く調べ、この会議という場をふんだんに利用した素晴らしい提案です。通学時間が交通手段としてだけでなく、「地域の愛情」「仲間との思い出作り」など、様々なきっかけになるという点が良かったです。また、発表資料についても、内容と言葉とイラストがすごく分かりやすくまとめられていました。特にバスやまなびパネルのイラストを自身で作成したことや、「飛鳥まなび号」のロゴマークが素晴らしかったです。

第２部　橿原市長とのパネルディスカッション

各校の代表者６名が橿原市長に対し、直接聞いてみたい質問や要望を問いかけました。

★光陽中学校

市長が中学生に「これだけは知ってほしい」と思う橿原市の魅力は何でしょうか。

市長　日本国はじまりの地であり、歴史が深いこと（飛鳥・藤原の宮都の世界遺産登録をめざす活動、藤原京、大宝律令など）だと思います。今井町や益田岩船など、歴史の宝庫であることに誇りを持ってほしいです。

橿原市に住み続けたい人が少ない現状に対し、どのような取り組みを行っていますか。

市長　現市民向けには、子育てと教育に注力（18歳までの医療費無料、第２子以降の保育料無償化など）し、子育てしやすい環境作り等を進めています。高齢者の移動手段確保による住みやすいまちづくりや、また市外からの移住促進として、移住者への金銭的支援や生活支援、PR活動を実施しています。

★八木中学校

学校の体育館にクーラーを設置してほしいです。

市長　暑い夏が続いており、整備が遅れているのは申し訳ないです。令和６年度から市内の小中学校の体育館への空調設置工事を始めており、八木中学校も今年・来年あたりから始まる大規模リフォームの一環として設置予定です。

橿原市にリニアモーターカーを造る話はどうなりましたか。

市長　物理的に直線で走るリニアのルートが橿原市を通ることが難しくなったため、誘致は断念しました。現在は、橿原市に最も近い大和郡山駅にできることをめざし、誘致活動を行っています（東京・大阪間は2037年開通予定）。

地震などの災害に備え、何日分の生活支援物資があるか、何人分の避難を想定しているか知りたいです。

市長　南海トラフ巨大地震や奈良盆地東縁断層帯による揺れを想定しています。避難者は最大２万6,000人ほどと想定されるが、現在の避難所の収容人数は１万7,000人となっており、

食料・飲料は３日間分を用意しています。４日目以降は国などからの支援が届く想定。個人での防災準備も呼びかけていきます。

★畝傍中学校

市長が子どもの頃、橿原市に「こんな施設があったらいい」「こんな街になってほしい」と思っていたことはありますか。

市長　スポーツが好きだったので、プロスポーツが見られるようなスポーツ施設（ドームや球場など）が近くにあるといいと思っていました。

現在の橿原市で便利に感じるところ、逆に不便に感じるところはありますか。

市長　便利に感じるのは、交通の便が良いことです（近鉄10、JR3の計13駅があり、平坦な市であるため）。そして不便に感じるのは、大型ショッピング施設周辺の週末や連休の大渋滞等です。

★聖心学園中等教育学校

高齢者の方々が、支えられるだけでなく、地域を支える存在として活躍するにはどんな仕組みが必要だと思いますか。

市長　「人生100年時代」において、現在の65歳以上は昔に比べ非常に元気であるという視点の変化が重要です。高齢者の経験を活かせるよう、地域活動への参加促進や、子どもたちへの歴史の伝授などを通じた異世代間連携の深化が大切です。退職した教員が無料で学習指導をする場も人気で、高齢者が支える側に回っている良い例です。

★橿原高校

橿原市は交通事故が多いと言われているが、交通安全対策の考えはありますか。

市長　啓発活動や交通安全教室を通じて、市民が交通事故を「自分事」として捉える意識改革が必要です。また、交差点の改良や見通しの悪い場所の解消といった物理的な対策も当然進めていきます。不幸な事故を防ぐため、啓発活動を積極的に行うべきと考えています。

★橿原学院高等学校

今回提案した構想（バスの移動時間活用など）を実現に近づけるために、私たちが身近にできることはありますか。

市長　提案は時間を有効に使うために有益です。移動を移動として捉えるのではなく、自分事に繋げる意識が重要だと思います。バス乗車と歴史学習を紐付けるなど、好循環が生まれる仕組みづくりを進めたいと考えています。学生の皆さんには、今回のように地域の課題に注目し、解決策の提案といった形で引き続き発想と知恵を貸してほしいと思います。

表彰

提案の独創性、実現可能性、そして橿原市の未来への貢献度の３つの視点から厳正に行い、審査員による「最優秀賞」、「審査員特別賞」を決定しました。また会場内の観客にスマートフォンから投票していただき、「会場特別賞」を決定し、合計３校を表彰しました。

最優秀賞　八木中学校

会場特別賞　畝傍中学校

審査員特別賞　橿原高校

総括

奥村審査員

全体として、発表の質と完成度の高さは驚くべきものでした。単なる思いつきではない、徹底した分析に基づく真摯な提案であったと感じました。どの提案も橿原市や地域にとって非常に有益であり、地域で実現に向けて検討していくべき貴重な提言です。参加者には、今回の未来会議を機に、今後も引き続き、提言いただいた内容の実現に向けて力を貸してほしいと思います。

プレイベント
1

日本女性会議2025橿原プレ大会
～自分らしく 輝いて生きる 私の未来～

日時 2024年11月16日（土）12:15～17:00
会場 かしはら万葉ホール

日本女性会議の周知と県下の男女共同参画の機運の醸成を目的に、プレ大会を開催しました。「未来にはさまざまな選択肢がある」というメッセージを込めたステージイベントやワークショップへの参加を通じて、親子で気軽に楽しみながら、多様な未来について考えるイベントとなりました。参加者数：約630人

①オープニングセレモニー

演奏：アンクルン音楽クラブcon brio
　　畝傍高等学校音楽部

プレ大会のオープニングを飾ったのは、アンクルン音楽クラブcon brioと畝傍高等学校音楽部による「糸」「栄光の架橋」の演奏。インドネシアの伝統楽器・アンクルンの柔らかい音と合唱の美しいハーモニー、そして、子どもたちのひたむきな姿に会場は温かな感動に包まれました。

②オープニング映像「未来へ継なぐ！」

制作：奈良芸術短期大学専攻科デザインコース

オープニングの最後には、翌年に開催する日本女性会議のPR動画を放映しました。橿原大会のテーマである「日本国はじまりの地から未来へ」にふさわしく、飛鳥・藤原の時代に活躍した女性たちから現在の私たちへ、バトンがリレーのようにつながれる様子がアニメーションで表現されました。

YouTubeで公開中▶
日本女性会議2025橿原PR動画

③野々村友紀子さんトークショー
強くしなやかに生きるためのヒント～これからのあなたへ伝えておきたい大切なこと～

登壇：野々村 友紀子（放送作家）
辻川 朱利
（特定非営利活動法人 子育て研究所tocotoco 代表理事）
DJ LEGO（F.D.P DJ SCHOOL）

著書・脚本等の作家業やメディア出演など多方面で活躍中の野々村 友紀子さんによるトークショー。橿原市内で活動する辻川さん、DJ LEGOさんも登壇し、自分の力で強く生きていくためのヒントや、パートナーとの関係、子どもとの関わり方、そして事前に募集した野々村さんへの質問など対談形式で進行しました。開場前に行列ができるほど大盛況で、夫婦のことや子育てのこと、仕事のことなど野々村さんの小気味よい語り口と共感を呼ぶ内容に会場は大盛り上がりでした。

④なでしこのマドイ～わたしらしく生きたい女性のためのトークセッション～

コーディネーター：
髙木 麻衣（㈱タカギ 代表取締役社長）
登壇：吉田 佳代（梅乃宿酒造㈱ 代表取締役）
和田 貴美子
（和田貴美子税理士事務所 税理士／中小企業診断士）
松井 れい（㈲アラヤ商店 代表取締役）

奈良県に縁のある女性経営者4人が、経営者そして一人の女性としての経験や葛藤、未来への展望を本音で語ったトークセッション。考え方や生き方は違えども、活力に溢れる登壇者それぞれの姿に、「自分らしく前向きに生きることの大切さ」に気付かされる、まさにプレ大会のテーマを体現したかのようなトークセッションでした。

⑤こども限定プレイパーク

クラウン・ピエコロショー：
クラウン・ピエコロ
たっちゃん先生の運動あそび：
たっちゃん先生（わんぱくキッズ体操教室）
サポート：保育者＆親支援団体TAMOTSU
BGM：F.D.P DJ SCHOOL

保護者がトークショーを楽しんでいる間、子どもたちが楽しく元気に遊べるスペース。DJによる陽気な音楽とともに大道芸で子どもたちを釘付けにしたクラウン・ピエコロショー、思いっきり身体を動かして楽しめるたっちゃん先生の運動あそび、静かに過ごしたい子どもたちには保育者＆親支援団体TAMOTSUによる絵本のよみきかせやお絵かきで飽きさせませんでした。

⑥あなたにオススメの漢方茶ブレンドワークショップ

講師：岸 千鶴
（漢方養生指導士・漢方養生指導士漢茶マスター
漢方茶ブレンダー協会認定講師）

健康状態をみる「気・血・水」の考え方を踏まえた漢方茶のブレンド方法を学ぶセミナー。ブレンドした漢方茶のお土産付きで、参加者はそれぞれ自身の健康状態と向き合いながら真剣に選んでいました。

⑦パーソナルカラーセミナー

講師：林 由恵
（㈱グレイスウィル代表取締役、カラー総合スクール
A+STYLE代表）

自分に似合う色を知ることで、日常や仕事の自己表現力を磨き、自分らしく生きるためのセミナー。プロによるQlet®カラー診断法を用いて、お一人ずつカラー診断を実施。メイクや服の色もわかり、ポジティブな気持ちになったと会場は笑顔で溢れました。

⑧男女共同参画推進団体コーナー

市内で活動する「橿原市男女共同参画推進団体」の有志によるオリジナリティ溢れるワークショップを開催しました。

◆ぱんだと花のクリエイティブワークショップ　主催：女性のための傾聴ボランティアぱんだ
◆女性の政治参画について考えるワークショップ　主催：ならジェンダー平等ネットワーク
◆フェルトボールを使った小物づくり　主催：ハナまな　協力：なないろはぁと
◆パステルアートワークショップ　主催：特定非営利法人子育て研究所tocotoco

⑨ぬり絵でコミュニケーション「ぬりWA®～ぬり絵×対話」体験ワーク

親子で参加できるワークショップ。子どもたちが専用のぬり絵に気持ちを色で表現したものをもとに、日本色彩キャリア育成協会認定ぬりWA®ファシリテーターが一緒にお話。「普段は知らない子どもの気持ちを聴けてうれしかった」と一緒に参加した保護者も驚いていました。

⑩サイエンス・オープンラボ～奈良女子大学生が紹介する科学のおもしろさ～

奈良女子大学理学部の学生による、さまざまな科学体験ができるコーナー。実験や観察などで科学の不思議を体感し、子どもたちからは驚きや感嘆の声が多く上がっていました。

⑪かしはら魅力発見コーナー

親子で古代衣装の着付け体験や土器のハンズオン体験ができる「かしはらの歴史を知ろう」をはじめ、「昆虫ふれあい体験」、「四神の缶バッジを作ろう」、「ストリートファイター×橿原市」展示の4つのコーナーを設け、訪れた人々にかしはらの魅力をPRしました。

参加者の声（アンケートより抜粋）

- 来年、女性会議があるということを知らなかった。ボランティアやお手伝いできることがあれば参加したい。
- 小さな子どもを託児で見てもらえ、久しぶりに自分の興味のあること話を聞けたり、体験できたりと、勉強、磨きの時間をもつことができた。
- オープニングの素晴らしい演奏に心を打たれた。
- 野々村さんの話は共感することも多く、子育てに役立つ話ばかりでとても楽しかった。
- 女性の経営者の方の話を身近で聞けてとてもよかった。参考にして再チャレンジをします！
- とても勉強になった、自分らしさについてもう一度見つめなおして進んでいきたい。

プレイベント
2

1dayジェンカレ in 日本女性会議2025橿原
～未来を変える！“自分ごと”としてジェンダーを考えてみよう～

日時 2025年５月24日（土）13:00～15:30
会場 橿原市役所分庁舎コンベンションルーム

講師：櫻井 彩乃（一般社団法人GENCOURAGE代表理事）
対象：奈良県内在住・在学の学生（大学生、高校生など）
参加者数：29人

「1dayジェンカレ」は、地域の大学生・高校生を対象に、身近に潜むジェンダー課題を“自分ごと”化し、課題解決のための具体的な行動につなげることを目的として開催しました。

「ジェンカレ」とは、ジェンダー平等の実現に向けて包括的に学び・対話・行動を行うゼミ形式のオンラインプログラムのこと。今回の「1dayジェンカレ」では、ジェンカレのプログラムを凝縮し、基本的な知識を学ぶ“レクチャー”、ジェンダー課題を共有する“ワークショップ”、自分にできる行動につなげる“アクション”という3つのステップからなるプログラムで、ジェンダー平等の実現のための具体的なアクションを考えました。

また、「1dayジェンカレ」の受講後に活動報告を提出した参加者には修了証を交付し、さらには参加者を代表して4名が日本女性会議2025橿原「記念シンポジウム」に登壇しました。

1. レクチャー

プログラムは、講師の櫻井さんによる、ジェンダーの基礎知識と日本の現状についてのレクチャーから始まりました。レクチャーでは、日本のジェンダー・ギャップ指数は世界146カ国中118位と低く、世界全体でもジェンダー平等を達成するには133年かかるという試算が紹介され、ジェンダーギャップの要因として、「家庭責任の偏り」、「性別役割分業の構造化」「無意識のバイアス」「女性リーダー不足」などが指摘されました。ジェンダー平等とは、性別に関係なく誰もが自らの意思で人生を選べる社会を作ることであり、ジェンダー平等を実現するためには、ジェンダーを意識した視点をもって現状を知ること、そして様々な物事に男女が共にバランスよく参画していくことが重要であることを強調されました。

「ジェンダーレンズ」をかけて世界を見る

ジェンダー平等のイメージって？
- 理解しきれていない
- 実現が難しい
- 個性
- 多様性
- 男尊女卑をなくす

ジェンダーに関して「誰に」「どんなことを」言われたことがありますか？
- 親に ――「男の子だから泣かない」
- 先生に ―「女らしくしなさい」
- 母に ――「男は度胸 女は愛嬌」
- 知人に ―「早く結婚したら？」

2. ワークショップ

身の回りにある
モヤモヤを
深堀り

レクチャーの後は、６つのグループに分かれてワークを行いました。

グループワークでは、身の回りで感じたジェンダーに関するモヤモヤを洗い出し、その要因を探っていくことで、学校やアルバイト先、地域やメディアなど、日常に潜むジェンダー課題を共有し、背景には「意思決定層の男女比の偏り」や「昔から残る固定的な性別役割分担意識」という構造的な問題があることを確認しました。

共有された事例

アルバイト先で	「女の子だから接客を担当して。」
学校で	進路や学部によって男女比に偏りがある
アルバイト先で	上司に男性が多い
メディアで	アイドルの活動年齢に差がある
学校で	生理のことを先生にわかってもらえない
地域で	伝統行事に関わっているのは男性が多い
ＳＮＳで	ワンクリックの広告に女性モデルが多い
話し方	「私」「僕」の一人称は性別限定？

高校生から大学生までの「ジェンカレ修了生」がファシリテーターとして各グループをサポート。

3. アクション

プログラムの最後には、参加者それぞれが「今日からできるアクション」を計画しました。「友人や家族とジェンダーについて話す」という身近な行動から「エシカル消費を心がける」「企業の賃金格差や育休取得率を確認する」など多種多様な行動が社会や、未来を変える行動につながること、計画したアクションを行動につなげる重要性を学びました。

未来を変える
ための一歩を
踏み出す

私にできることは何か？

「女子高、女子大の良さを広める」
「月経についての体験型ワークショップを開催する」
「歴史的な固定概念を探ってみる」
「世界で困っている女性に寄付できる商品を買う」
「男性が多い学科で教員研修を実施する」
「ジェンダーだけでなく、その人の背景にある複合的な側面にも目を向ける」

参加者の声（受講アンケートより抜粋）

- グループワークを通じて自らの性別への固定観念を実感し、偏見を持たない人は世界にいないのではないかと考えた。
- 将来の教育を担う学生が、ワークショップでジェンダー課題に向き合うことは、教育を変える大きな一歩になる。
- 仲間内以外の人々とジェンダーについて考えた経験は非常に貴重であり、今後も対話を深めたいと強く感じた。
- 座学に留まらず、多様な対話や実践者の話に触れたことで、自分もジェンダーのために行動したいと実感した。

1か月後　MY ACTION REPORT 活動報告

1dayジェンカレで計画した「今日からできるアクション」。参加した学生が、ジェンダー平等実現に向けてどのような行動を行ったのかを、1か月後に、活動報告として提出してもらいました。

修了証
（活動報告提出者に交付）

日本女性会議2025橿原で活動報告を掲示

活動報告は「日本女性会議2025橿原」会場で掲示しました。活動報告を見た参加者からは「互いの意見を言い合えるきっかけづくりをされたことが素晴らしい。」「ジェンダーについて伝える方法として良い方法だと思う。」「私も声をあげられるようがんばりたい。」などのコメントが寄せられました。

記念シンポジウムに登壇！

1dayジェンカレに参加した学生を代表して、選出された4名の学生が、10月4日に開催された「日本女性会議2025橿原　記念シンポジウム」に登壇し、1dayジェンカレを通じて得た気づきやその後の具体的な活動について、全国から集まった参加者に向けて力強く発表しました。

ジェンダー平等な社会を若者の手で

講師：**櫻井 彩乃**

「それっておかしくない？」「本当にそうなのかな？」という気づきが、社会をよくするきっかけになります。ワークショップでは、自分の中にあるモヤモヤを言葉にし、周りの人と対話することで、一歩を踏み出すきっかけになりました。大きなことをする必要はありません。自分の周りから、できることを少しずつやっていけば良いのです。若者の声や行動がまちの中で広がっていくこと、そしてそれをみんなで応援すること。そんな連鎖が、未来を少しずつ変えていくのだと思います。

開催までの歩み

1　開催決定まで

2022.　8　橿原市議会が橿原市長へ大会誘致の要望書を提出
2022.　8　橿原市男女共同参画審議会で大会誘致を承認
2022.　9　2022年開催市である鳥取県倉吉市へ次期開催希望を申請
2022. 10　日本女性会議橿原大会の2025年開催が決定
2022. 10　「日本女性会議2022 in 鳥取くらよし」に次期開催地としてブース出展

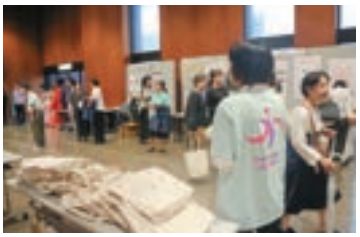
2　実行委員会

2023.　1　準備委員会（全４回開催）
2023.　7　実行委員会設立総会・
　　第１回実行委員会（全10回開催）
2023.　7　大会テーマ決定
2023.　7　各部会活動開始
　　総務部会（全７回開催）
　　企画部会（全10回開催）
　　広報部会（全９回開催）

2023.　7　大会シンボルマークを
　　全国公募

2024.　2　大会シンボルマーク決定
2024.　7　大会公式サイト開設
2024. 11　「日本女性会議2025橿原 プレ大会」開催

2025.　5　大会ボランティア募集開始
2025.　5　プレイベント
　　「1dayジェンカレin日本女性会議2025橿原」開催
2025.　6　大会公式サイトリニューアル
2025.　6　参加者募集開始
　　(大会申込パンフレット、チラシ発送)
2025.　7　橿原市民参加費引き下げ
2025. 10　「日本女性会議2025橿原」開催



2026.　3　実行委員会解散

参加状況

●総参加数　1,775人（1日目分科会、2日目全体会　申込人数）

●都道府県別（人）

北海道・東北地方	19
北海道	9
青森県	5
秋田県	1
福島県	3
岩手県	1

中部・東海地方	135
富山県	1
石川県	2
福井県	10
山梨県	35
長野県	11
岐阜県	4
静岡県	3
愛知県	37
三重県	32

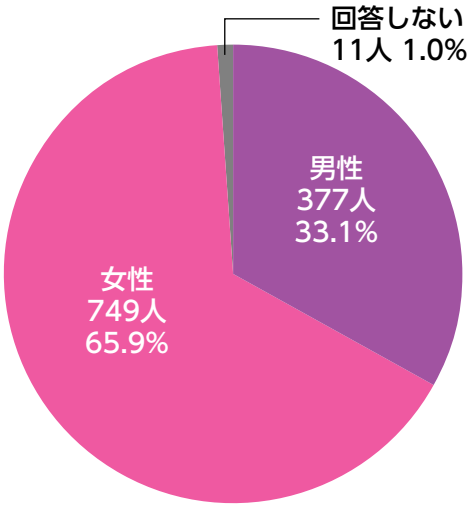
関東地方	48
茨城県	9
栃木県	5
埼玉県	20
千葉県	1
東京都	12
神奈川県	1

近畿地方	1,418
滋賀県	71
京都府	87
大阪府	69
兵庫県	21
奈良県	1,148
和歌山県	22

中国・四国地方	93
鳥取県	27
島根県	2
岡山県	3
広島県	17
山口県	4
徳島県	23
香川県	14
愛媛県	3

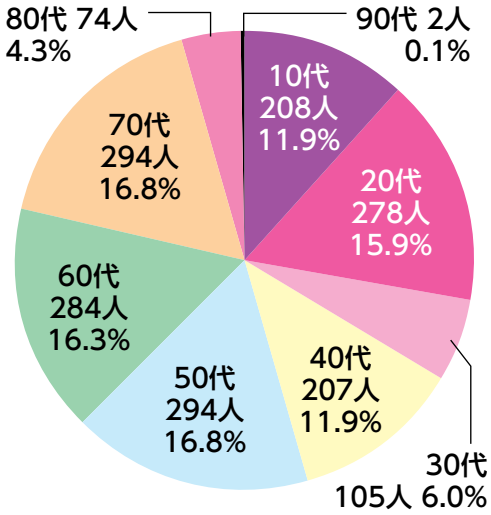
九州・沖縄地方	62
福岡県	29
佐賀県	7
長崎県	2
熊本県	10
大分県	4
宮崎県	5
沖縄県	5

●性別



※申込代表者のみ

●年齢別



※未回答・不明を除く

●分科会別申込数（人）

分科会1	561
分科会2	195
分科会3	190
分科会4	95
分科会5	144
分科会6	676
分科会7	132
分科会8	391
分科会9	97

●かしはら未来会議

参加数　230人（事前申込なし）

※大会の3日間で約2,000人の参加がありました。

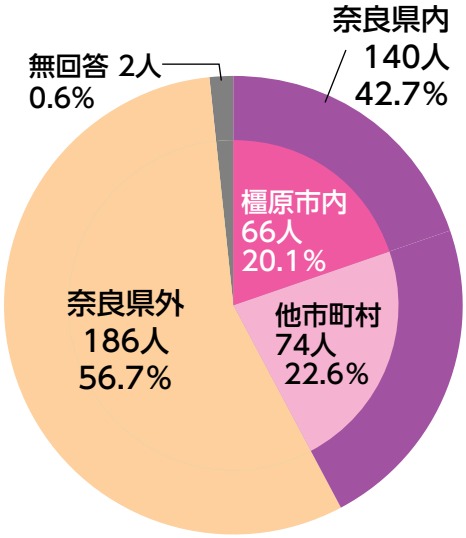
参加者アンケート結果

※ご意見・ご感想は掲載にあたり一部抜粋・編集等を行っています。

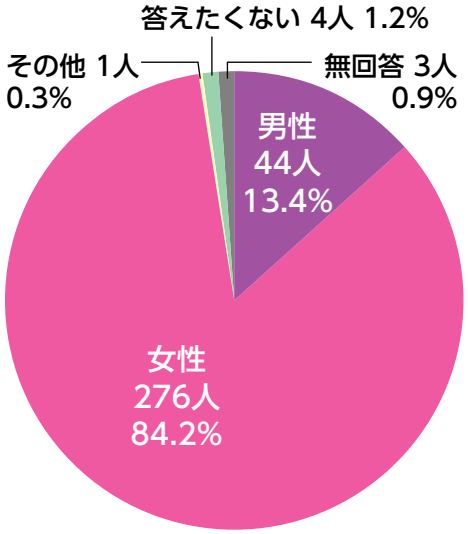
分科会・全体会 来場者アンケート【回答数：328件】

●回答者属性

【お住まい】



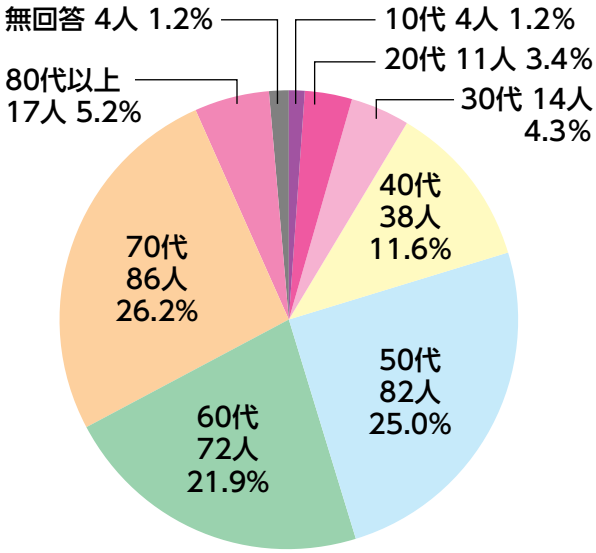
【性別】



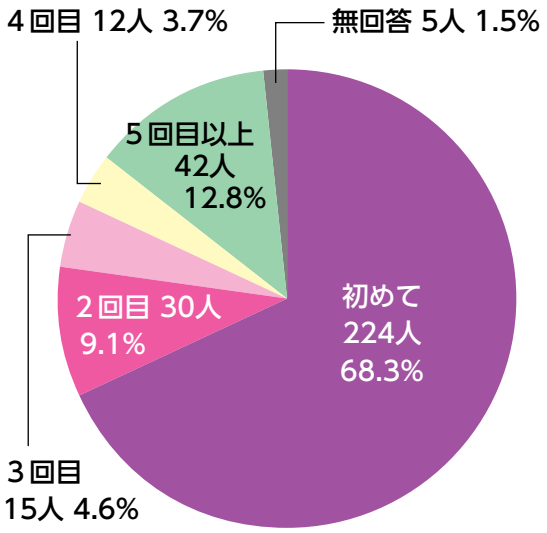
北海道	4
秋田県	1
福島県	1
茨城県	2
栃木県	1
埼玉県	4
千葉県	1
東京都	5
福井県	5
山梨県	18
長野県	4
岐阜県	1
静岡県	3
愛知県	11
三重県	14
滋賀県	13
京都府	22
大阪府	17
兵庫県	3

奈良県	橿原市内	66
	他市町村	74
和歌山県		4
鳥取県		10
島根県		1
岡山県		1
広島県		4
徳島県		6
香川県		4
愛媛県		1
福岡県		9
佐賀県		3
熊本県		1
大分県		1
宮崎県		4
沖縄県		4
その他県外		3
※回答なし		2

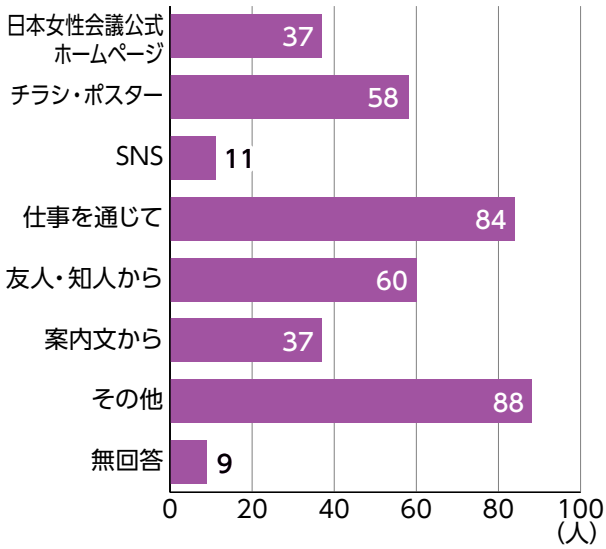
【年代】



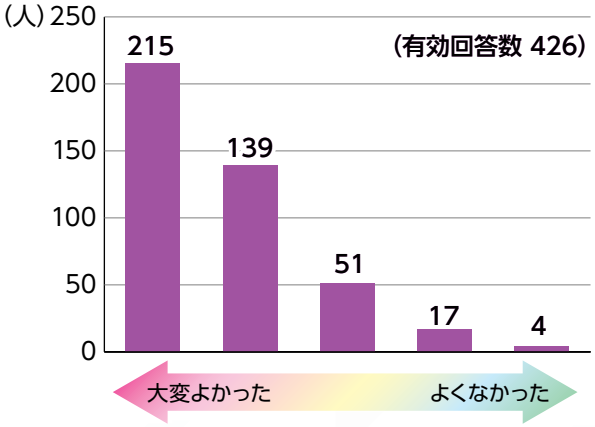
Q．日本女性会議への参加は今回で何回目ですか



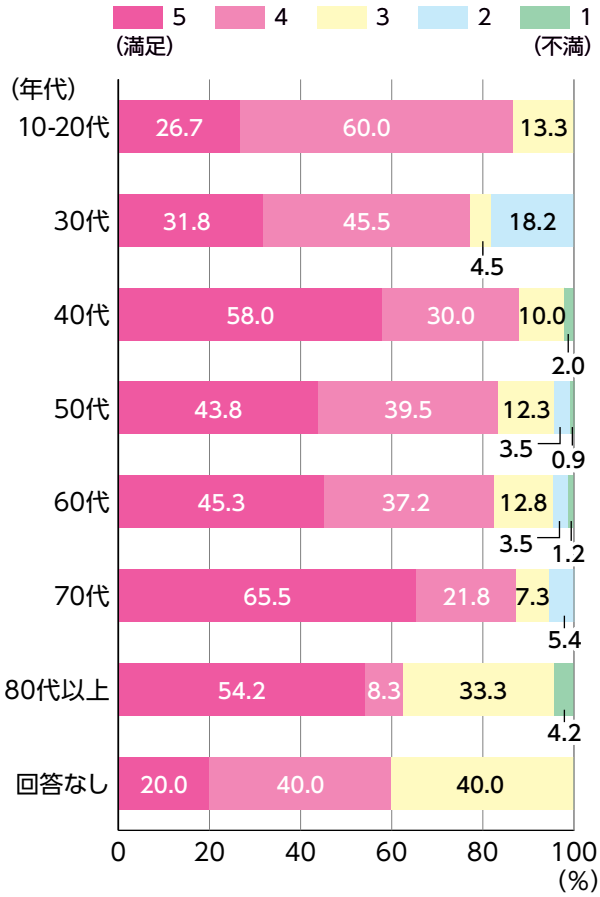
Q．大会に参加申込したきっかけはなんですか？
（複数回答可）



Q．分科会の内容はいかがでしたか？
〈分科会全体の満足度〉



〈分科会全体の満足度（年代別）〉



◎分科会１　感想

・難聴が認知症を進める要因になると知りました。アミロイドβがたまりやすい女性が生物上認知症になりやすいとは。運動の大切さ、歯周病が骨粗しょう症等を進めてしまう事等、改めて心に刻みました。
・３講演とも興味深い内容でしたが、連続して聞くことは疲れました。内容をまとめたレジメがあれば、理解し記録しやすいのではないでしょうか。
・未来に向かう医療として健康寿命を伸ばす、話す人との関係が大切。骨伝導イヤホンを知りました。

◎分科会２　感想

・久しぶりに歴史のかなり詳しいお話を聞けてとてもよかったです。古代の女帝が中継ぎではなく政治的実力をもって統治していたという話は新鮮でなるほどと思いました。鎌倉時代ごろまでは女性も地頭になったり、領地を相続できたので、男尊女卑が徹底したのは江戸以降ではと思います。
・万葉集や古事記のお話はとてもわかりやすく、その時代の女性がいかに大らかで力強く生きていた

かが良くわかりました。
・レジメがていねいで読み易かったです。

◎分科会３　感想
・ジェンダー平等について性別の垣根を越えて意見を聞くことができました。NHKでも放送された地方から離れる女性目線の思いをデータを基に見ることができて良かったし、今後の自分のアクションを考える仕掛けも、聞いて終わりではなく良かったと思います。
・様々な業職にて男女共同参画の取り組み（特に男性育休取得）が進んでいることが分かりました。若い世代の声には「日本で安心して子どもがうめない」という人もいるので、収入や環境面での課題解決に向けて、今日発表のあった取り組み内容を参考にしたいと思います。
・少子化は、女性だけの問題とは限らない。ジェンダーギャップが地方少子化にもつながっていることを知りました。

◎分科会４　感想
・男性にも家事分担は今からは必要ですね。また、私達高齢者は社会貢献に参加して行こうと思いました。
・笑いを混じえながら、データも提示しながらとても興味深いお話を聞くことができ、有意義な時間を過ごせました。自分の経済力をもっと上げようと思いましたし、子育てにも活かしたいと思いました！
・大変おもしろい内容でした。数字、時給での換算がとてもわかりやすく、理解しやすかったです。視点を変えるとこんなにすんなり腹に落ちるものだと気づきました。推進・啓発活動に活かしていきたいと思います。

◎分科会５　感想
・発達障害、自閉症スペクトラム、ひきこもり、子どもの支援としてのお話、状況を知ることができました。自分自身が人間関係に悩みやすい中、発達段階で、思春期の時期がかなり長い人間なのかと思いました。
・現代社会の抱える子ども問題から障がい者に対する周囲、家族のあり方等、考えさせられる機会になりました。
・いわゆる障がいと呼ばれる子どもの３段階にわたっての支援の仕方という形で、わかりやすい発表でした。質問アプリも良い仕かけだったと思いますが、どんな質問が来たのか目で見えると良かったと思いました。

◎分科会６　感想
・リプロの幅広さを実感。そして、若年向け教育についてもアイディアで伝わりやすい方法があるのですね。きちんと伝える。でもきちんと理解してもらわないとならない。アイディアが大事であると思いました。
・医療現場での新しい取り組み、人の生涯にかかわる重要な場面での「人」を診てくださっていることに、感銘を受けました。民間の企業者が学校に出向き、学習支援しておられることを知り、今の自分に何かできるのではないかと考えるキッカケをいただきました。
・性差医療の中に、妊孕（にんよう）性保存、妊娠、出産、全てを選択することの難しさ。知識がないと考えることができない、学ぶ機会があると良いと思う。月経から、自己を知るきっかけや、自他ともに認め合うことは大切だと思った。ショーツやナプキンなど、経済的な学びがあるのが良いですね。

◎分科会７　感想
・女性の理工系進学と就職の低さがよくわかり、国際的にもジェンダー理解の低さがわかった。その中での取り組みをされ、事例をあげてもらい未来がみえてきました。
・奈良女子大学と奈良高等専門学校の取り組みは今後もがんばっていただき、理系女子がたくさん増えることを望みます。科学塾もとてもいい取り組みだと思いましたが、各大学から遠い人には参加が難しく、どの中学校でも参加できるプログラムが必要だと感じました。
・教育の現場で、積極的に女子の力をのばし、人材として育てる場を紹介いただけて、心強く感じました。我が県にも、そのような場があるのか、戻ったら調べてみます。

◎分科会８　感想
・女性が管理職になるのはとてもむずかしい事と思います。家族の理解があり、地区の協力もありながらできる事だと思っています。
・長野商工会議所　副会頭の先進事例　女性に限らず、思っていることを発信することの大切さ、そして、一人ではなく、企業間、行政を交えての話

し合いの場をセッティングしたバイタリティーに感動しました。

・橿原市の状況を知ることができ、ワーク・ライフ・バランスを推進している会社の存在も認識しました。橿原市の市長さんも長野の取り組みをしっかり聞かれていたので、今後の橿原市の取り組みや施策がどう変化、反映されていくのか楽しみです。

◎分科会９　感想

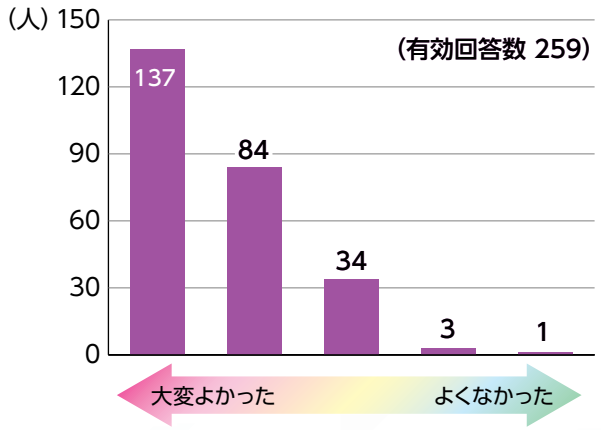
・性のあり方とは生き方、くらし、一人ひとりの人生の話という話は、なるほどと思いました。性＝sexというイメージが強いのでやはり生きることそのものという意識の変革が大切なのだなと思います。子どもの研修も大切ですが、65才以上の高齢者にも研修が必要だと思います。じいちゃんばあちゃんが理解できたら子や孫にもいい影響を与えると思います。

・「生命（いのち）の安全教育」、私も初めて聞きました。デートDVの講座を中学・高校で行っていますが少子化のなか、生まれてきた子どもたちが幸せに生きていけるよう、望まない妊娠等は、宝である子どもの命を傷つけてしまうので、「生命（いのち）の安全教育」は、文科省の方からも教育現場にすすめてほしいと思います。

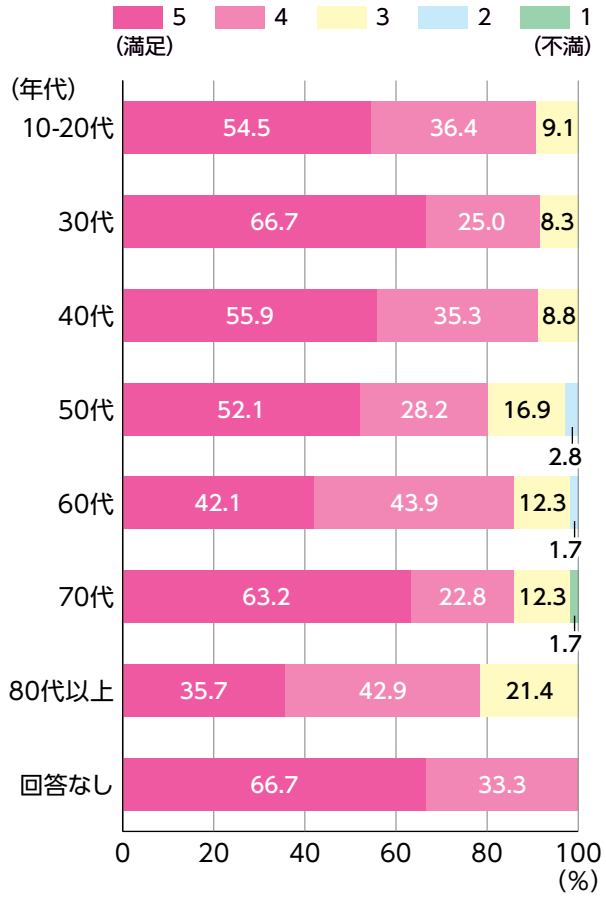
・DVやデートDVなどの人権侵害に対して、また、性の多様性について、改善する、理解するための取り組み、とても参考になりました。

・パネリスト３名の方々の一言一言が心にしみました。LGBTQへの理解、望まれない妊娠や中絶、実際に性被害を受けた女性の声、いずれも他人ごとではなく、身近にあることだと肝に銘じました。娘２人にも、折を見て伝えていきたいと思います。

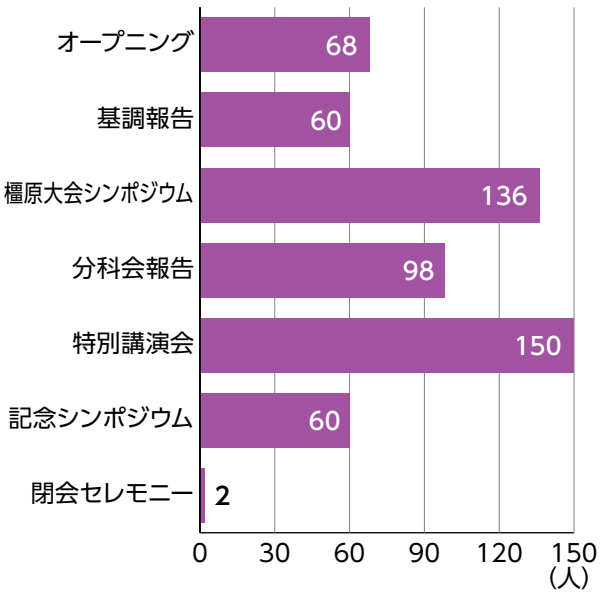
Q．全体会の内容はいかがでしたか？
〈全体会の満足度〉



〈全体会の満足度（年代別）〉



Q．特に良かったものを教えてください。
（複数回答可）



◎全体会感想

・生きにくいといわれる日本社会をよくしていくため、今は大事なときだと思うので、今回の様々な取り組みを聞くことで、様々な分野で頑張ってくれていることが分かり、素晴らしい人材がたくさん活動してくれていることに感謝します。また、日本国はじまりの地での日本女性会議に参加できたことも、とてもうれしく思っています。
・初めて参加しました。女性だから男性だからと育てられたわけでもなく、育てたわけでもないけれど、今の年齢になるまで、女と男の得意なことはあるからと、ばくぜんと思っていました。参加して、知らず知らずのうちに、男だから、女だからと自分の中にはめこんでいるのだと思いました。
・日本の始まった奈良からのオープニングは大変良かったです。分科会報告は大変良くわかりました。アンミカさんの講演はご自身の家庭で学ばれたことを軸に話をされたのが胸に響きました。
・橿原大会シンポジウムの有森さんのお話がとてもよかったです。特に最後の「プレッシャーはネガティブなことではない」ことの理由が、とても感動的でした。コーディネーターの田里さんとパネリストとの会話形式も聞きやすかったと思いました。
・たくさんの登壇者から、様々な意見を聞けて満足です。特に最後の櫻井さんの講演では、私と同世代の現状を知れて良かった。私が参加した分科会では、10～20代向けの内容が少なかったので、日常感じるジェンダー不平等を言語化して「現実あること」と肯定してもらえて少し救われました。フィナーレ、明るい気持ちになれました！
・年配の方が多かったが、どのように次世代につなげていかれるのか　女性会議の世代交代をどのように行っていくのかと、関心があります。
・たくさんのテーマがあって、たくさんの課題が示され、それに対する提言がされて、良い場所だと思いました。このような機会が続けてあれば行政のとりくみも変わっていくのではと、希望のもてる集会でした。

Q. 大会全体を通してのご意見・ご感想を教えてください。

・スタッフさんたちが進行等工夫されているなと感じました。資料を入れてくださっているバッグが素敵でした。中高生による未来プロジェクトは新しい取り組みでいいなと感じます。
・今回、分科会への参加にあたり、１歳の息子の託児をお願いしました。託児スタッフのみなさんがとてもあたたかく、安心感があって安心して預けることができました。子育て中でもこのようなイベントに参加しやすくしてくれる、この託児があって本当に感謝です！
・初めて参加しました。全ての分科会や講演など、内容もとてもよく充実した時間を過ごすことができました。ここまでの準備は大変なものだったことでしょう。本当にありがとうございました。そして、大変お疲れさまでした。
・たくさんの分野を網羅した内容は、とてもよかったと思います。特に経営者側のとりくみ、スポーツの分野について、はじめて知ることができました。
・様々な角度での女性活躍の形があること、まだまだというか常にお互いが考えて歩み寄りをしながら進めていく必要があると感じました。
・男女共同参画にたくさんの人がご尽力されていることを知りました。これまで、それほど女であることに差別や不平等な扱いを受けたことがなかったので、この会議に参加されている方々ご尽力されてきた恩恵を受けてきたのかなと思った。
・男女共同参画やジェンダー平等について、女性のためでなく男性のためでもあることを理解されていないことが問題であり、課題であると改めて感じました。声を集めて届けることや、政治に参画することの重要性をまわりの人と仲間を集めて取り組んでいきたいです。
・まだまだ、ジェンダー平等には時間がかかるが、私たち一人ひとりが少しでも変わることでその時間は短くなるだろうと思う。一人ひとりの意識改革を活動で広げていきたいと思いました。
・世の中にこんなにもたくさんジェンダーの視点で考え、行動している人がいることに感動しました。ここまで繋いできた女性たちがいること、その先に今の自分やみんながいることに感謝と尊敬と希望と、あたたかい気持ちになり力をもらいました。

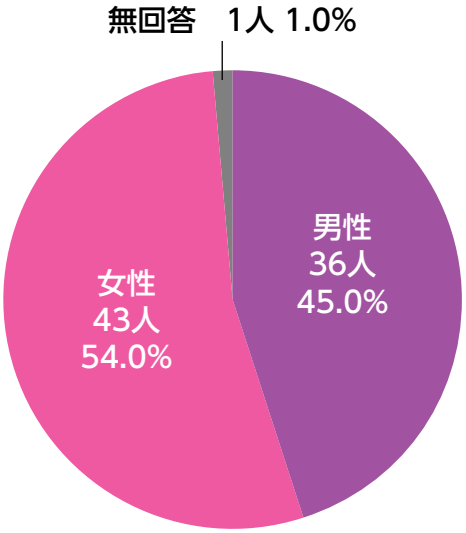
かしはら未来会議 来場者アンケート【回答数：80件】

●回答者属性

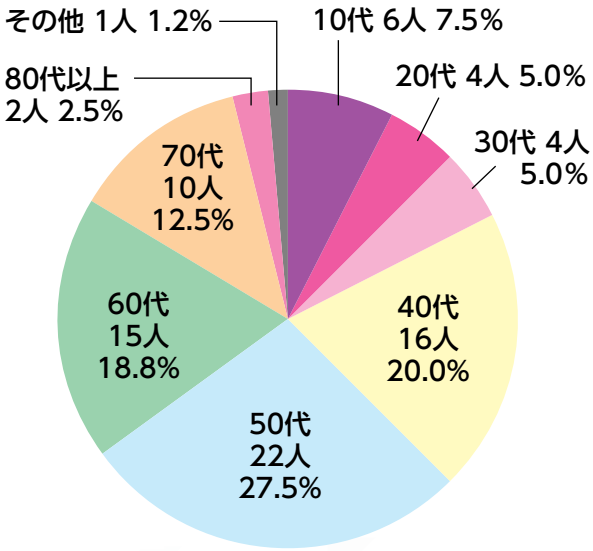
【お住まい】

奈良県	橿原市内	53
	他市町村	13
広島県		3
香川県		3
埼玉県		2
沖縄県		2
東京都		1
山梨県		1
大阪府		1
兵庫県		1

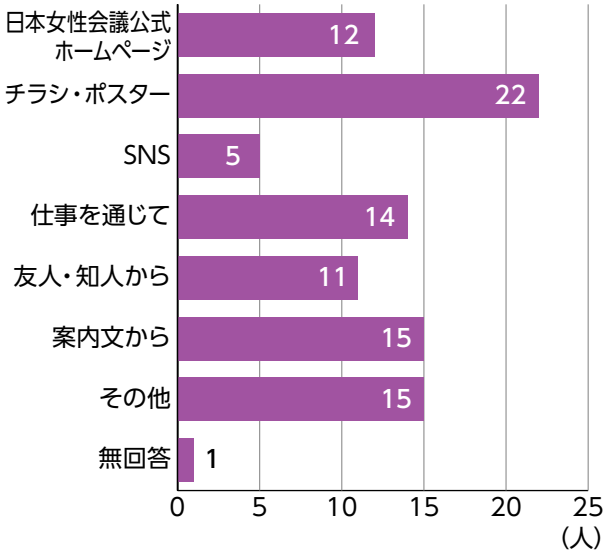
【性別】



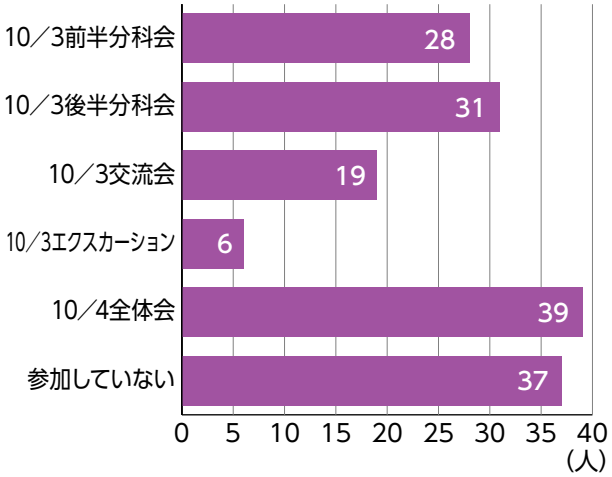
【年代】



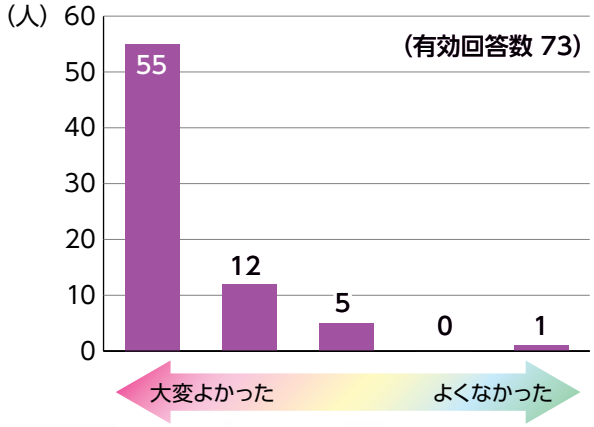
Q. かしはら未来会議に参加したきっかけはなんですか。（複数回答可）



Q. 「かしはら未来会議」は「日本女性会議2025橿原」の最終日に開催しました。他に参加されたプログラムはありますか。（複数回答可）



Q. 「かしはら未来会議」の内容はいかがでしたか。



Q. 特に印象に残った内容や学校があれば教えてください。

◎全体

・学生たちの柔軟な発想に大人が気づかされました。
・この提言を単なる発表で終わらせず、行政は真剣に実現を検討してほしいです。
・学校の提案と発表はいずれも素晴らしいものでした。身近で感じたことを提案という形にできた学生と、発表の場を設けた関係者のみなさんに、感謝の思いでいっぱいです。
・中学生の視点やアイデアにも驚きましたが、高校生のスキルやしたたかさ、安定感を感じました。もちろん「まだまだ考えきれてはいない」と感じる内容もありましたが、斬新な発想はとても貴重だと感じました。

◎八木中学校

・「遊びながら歴史を学ぶ」という発想が、大人にはない純粋な子ども目線で、非常にワクワクしました。
・中高生の「遊ぶ場所がない」という切実な生の声にハッとさせられました。
・歴史アスレチックは、多世代が集まる場所として実現性が高く、明るい未来を感じました。

◎聖心学園中等教育学校

・中学生が高齢化社会や医療問題を深く考えていることに驚き、感銘を受けました。
・専門家へのインタビューやデータに基づいた分析が鋭く、非常に説得力がありました。
・スライドの見せ方がとてもきれいで、内容の難しさを感じさせない素晴らしいプレゼンテーションでした。

◎光陽中学校

・実際に夜道を歩いて街灯を数えた行動力に感動しました。調査に基づいたマップは、説得力が抜群です。
・身近な安全に焦点を絞ったことで、行政が取り組むべき優先順位が明確に伝わってきました。
・発表の仕方がはっきりとしていて聞きやすく、練習の積み重ねを感じました。

◎畝傍中学校

・「こども食堂が好き」という素直な言葉が印象的。地域とのつながりの大切さを再認識しました。
・中学生自身が、「放課後の居場所」を求めているというニーズは、これからの街づくりに不可欠です。
・活動の課題点までわかりやすく説明があり、今後の広がりを応援したくなりました。

◎橿原高等学校

・冒頭に事故データの提示があり、一気に引き込まれました。現状分析が見事です。
・道路に名前をつけて愛着を持たせるというアイデアが斬新。低コストですぐに始められそうですね。
・スライドを全面に使った構成がダイナミックで、視覚的にも優れていました。

◎橿原学院高等学校

・「バスを一台確保して学校に任せる」という発想が非常に新鮮。新しい学びのきっかけになりそうです。
・自作のロゴマークやイラストから、生徒自身が楽しんで取り組んでいる様子が伝わり、最高でした。
・プレゼンテーション能力が高く、未来の学びの形として実現を期待したいです。

Q. かしはら未来会議を受けて、今後の橿原市に期待することを教えてください。

・人口増や子育て環境の向上に取り組んでほしいです。
・子どもたちが課題としてとらえている点について、少しでも改善されることに期待します。
・今回の会議の成果を、なんらかの形で次に繋げることができたら、素晴らしいと思います。
・橿原市は、コンパクトシティとしての機能が充実していると考えます。市長と中高生とのパネルディスカッションでは、さまざまなことが取り上げられ、刺激になりました。

Q. その他(かしはら未来会議や日本女性会議2025橿原へのご意見やご感想)

・こうした会議には初めて参加しましたが、とてもおもしろく、様々な意見や考えを聞くことができて良かったです。
・全体的に良い内容でした。分科会も地元企業からの発信があり、街全体で課題解決の糸口を探るきっかけになればと願います。
・県外から参加しました。歴史ある地域でも、地元の人が知らないことがあり、工夫しようとしていることを知りました。
・今後の少子高齢化は避けられませんが、奈良県内でもトップクラスの魅力ある市であってほしいです。

後援・実行委員会

後援

内閣府 ／ 文部科学省 ／ 厚生労働省 ／ 近畿経済産業局 ／ 奈良県 ／ 奈良県教育委員会
橿原市議会 ／ 橿原市教育委員会 ／ 奈良県市長会 ／ 奈良県町村会 ／ 奈良県市議会議長会
奈良県町村議会議長会 ／ 天理大学 ／ 奈良県立医科大学 ／ 奈良女子大学 ／ 奈良大学
奈良芸術短期大学 ／ 朝日新聞奈良総局 ／ ＮＨＫ奈良放送局 ／ 共同通信社奈良支局
産経新聞社 ／ 奈良新聞社 ／ 毎日新聞奈良支局 ／ 読売新聞奈良支局 ／ 株式会社 時事通信社
奈良テレビ放送株式会社 ／ 日本商工会議所 ／ 全国商工会議所女性会連合会
奈良県商工会議所連合会 ／ 奈良県商工会連合会

実行委員会等

●大会長	橿原市長	亀田　忠彦
●副大会長	橿原商工会議所会頭	佐藤　進
	橿原自治委員連合会会長	桝谷佐千代
	前橿原市議会議員	森下みや子

●実行委員会

・実行委員長	槇村　久子			
・副実行委員長	島本太香子	若竹　紀子		
・監事	中村吉代茂	古川義富美		
・委員	赤松　邦子	上田　博史	木村亜希子	清田　典章
(50音順)	熊本かよ子	古謝真友子	下市　実紀	鈴木　喬
	髙木　麻衣	竹内　晶子	巽　美奈子	谷村　るみ
	藤堂　宏子	堀内みどり	松井　昌宏	三橋　昌代
	村上　晃子	安田　恵子	吉田　紀子	吉田　徳弘
	若森　睦司			

●部会（◎は部会長、〇は副部会長）

・総務部会	◎清田　典章	熊本かよ子	堀内みどり	吉田　紀子
	〇三橋　昌代			
・企画部会	◎髙木　麻衣	藤堂　宏子	巽　美奈子	鈴木　喬
	〇安田　恵子	村上　晃子	赤松　邦子	髙木　鎮廣
・広報部会	◎松井　昌宏	木村亜希子	竹内　晶子	
	〇古謝真友子			

協賛・寄付

協　賛

あいおいニッセイ同和損保
株式会社アイプリコム
アクアソリューション株式会社
アスカ美装株式会社
株式会社アストリア
株式会社我妻運輸
アトリエ・ソリッド
医療法人社団安東内科
イオンモール橿原
生駒商工会議所
株式会社インフィニティ
社会福祉法人うねび会
株式会社オークホテル
財団法人大阪男女いきいき財団
大西造園土木
オカハシ株式会社
有限会社奥野商会
オフィスカノン
株式会社香久山美人
社会福祉法人橿原園
橿原サッシセンター株式会社
橿原市建設業協会
社会福祉法人橿原市社会福祉協議会
橿原市上下水道協同組合
橿原商工会議所
橿原神宮
橿原・高市地区歯科医師会
橿原・高市地区薬剤師会
橿原タクシー株式会社
社団法人橿原地区医師会
橿原中央ビル株式会社
橿原ライオンズクラブ
橿原ロータリークラブ
株式会社葛城
かとう建設株式会社
株式会社鞄工房山本
河村繊維株式会社
北関東綜合警備保障株式会社
社会福祉法人協同福祉会
近畿日本鉄道株式会社
近畿労働金庫
株式会社近鉄百貨店橿原店
近鉄八木駅名店街協同組合
株式会社熊本商店
Graphic Planning
グランドメルキュール奈良橿原
甲村ハウジング株式会社
株式会社コーレル
国際ソロプチミスト
国際ゾンタ 奈良万葉ゾンタクラブ
五條メディカル株式会社
個別進学会
有限会社サウンドプロデュース
株式会社崎山組
佐藤薬品工業株式会社
サラダ館葛本店
沢設備工事株式会社
参画ネット　なら
社会福祉法人三養福祉会　特別養護老人ホーム橿原の郷
株式会社サンロード
三和運輸株式会社
三和澱粉工業株式会社
株式会社ジーピーウェーブ
株式会社ジェイポート
市民生活協同組合ならコープ
社会福祉法人松福会
株式会社shinka
株式会社新歌舞伎座
人材育成・雇用協議会
真珠の奥出加工
株式会社新生
スミレ写真館
社会福祉法人聖寿会
かなはし苑
青商会
積水ハウス株式会社奈良支店
第一生命保険株式会社
大和ガス株式会社
大和ガス住宅設備株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社タカトリ
有限会社竹田花香社
株式会社田中設備
株式会社中部トータルサービス
株式会社長大 大阪支社
天理大学付属おやさと研究所
株式会社東急コミュニティー
社会福祉法人徳真会

豊田真珠株式会社

トヨタユナイテッド奈良株式会社

内藤電機株式会社

社会福祉法人中川会

株式会社中川組

株式会社仲嶋電機

株式会社中谷本舗

奈良OAシステム株式会社

奈良芸術短期大学

一般社団法人奈良県医師会

一般社団法人奈良県歯科医師会

社会福祉法人
奈良県社会福祉協議会

奈良県商工会連合会

奈良県信用保証協会

奈良県農業協同組合

一般社団法人奈良県薬剤師会

奈良県遊技業協同組合

奈良交通株式会社

ならコープ　いこ～る

奈良商工会議所

奈良信用金庫

奈良大学

奈良中央信用金庫

奈良トヨタ株式会社

株式会社南都銀行

医療法人南風会

医療法人西井会

西川運輸倉庫株式会社

日興薬品株式会社

日世商会株式会社

株式会社ハシモトガスショップ

晴香堂株式会社

阪神管理サービス株式会社

税理士法人東岡会計

株式会社ヒカリワールド

部落解放同盟奈良県連合会

ヘアーギャラリー アレ

医療法人平治会

平成記念病院

株式会社松吉組

有限会社マルゲン

株式会社丸産業

森本石油株式会社

八木駅前商店街振興組合

ヤマトー商事株式会社

大和信用金庫

大和大学

株式会社雪の元本店

有限会社吉住保険コンサルタント

株式会社吉田木材

ラック産業株式会社

ルートインジャパン株式会社
ホテルルートイン桜井駅前

株式会社ルビー

（敬称略）

寄　付

鈴木　喬

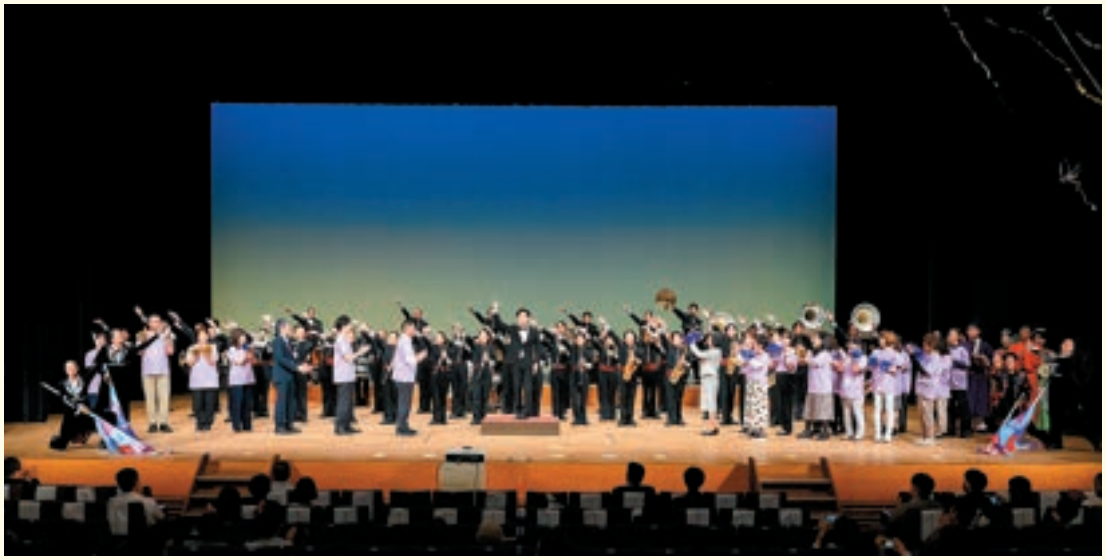
竹内　晶子

槇村　久子

まほろば会　会員一同

吉田　明美

和田　奉子

（敬称略）

日本女性会議2025橿原 実行委員会
〔事務局〕橿原市企画戦略部人権政策課
〒634-0804 奈良県橿原市内膳町1-6-8
かしはらナビプラザ4階
TEL 0744-21-1090
FAX 0744-47-2351
E-mail danjo2@city.kashihara.nara.jp